THINK × ACT
関西大学
KANSAI UNIVERSITY

関西大学

平成 24 年度教育研究高度化促進費 採択事業

アジアと連携したサービスラーニング教育プログラムのモデル化

最終報告書

目次

１章	教育プログラムの概要	3
１．１．	はじめに	3
１．１．１．	教育プログラムの目標	3
１．１．２．	サービスラーニングという教育プログラム	4
１．２．	モデル化を目指すプログラム	5
２章	フィリピン・チルドレン・プロジェクト（ＰＣＰ）	8
２．１．	プログラムの概要	8
２．２．	事前活動	10
２．３．	現地活動	12
２．４	事後活動	30
３章	フィリピン・フィールドスタディ（ＰＦＳ）	31
３．１．	プログラムの概要	31
３．２．	事前活動	32
３．３．	現地活動	34
３．４．	事後活動	37
３．５	まとめ	39
４章	カンボジア・協働活動プログラム（ＣＣＡＰ）	41
４．１．	プログラムの概要	41
４．２．	事前活動	43
４．３．	現地活動	46
４．４．	事後活動	48
４．５．	まとめ	49

５章　実践的英語コミュニケーション能力育成に向けた取り組み　51
５．１．　プログラムの目的と特徴　51
５．２．　活動内容　51
５．３．　活動結果　53
５．４．　まとめ　55
５．５．　成果報告論文　55

６章　新規連携先の開拓：JOCV と連携したプログラム　75

７章　スウェーデンにおけるサービスラーニングの事例　98

８章　サービスラーニングのモデル化　104
８．１．　サービスラーニングのデザイン　104
８．２．　サービスラーニングのミクロなデザイン　104
８．３．　サービスラーニングのマクロなデザイン　106
８．３．１．　フィリピン小学校支援プロジェクト（ＰＥＳＰ）　106
８．３．２．　実践の特徴の比較　107
８．３．３．　マクロなデザインのモデル　109
８．４．　今後の課題　110

１章　教育プログラムの概要

久保田賢一（関西大学総合情報学部）

１．１．はじめに

グローバル化が急速に進む現在、解決の糸口がつかみにくい問題に対して、積極的に対処し、解決していく人材の育成が、高等教育において喫緊の課題として求められている。このような高等教育に対する課題に応えるために、関西大学では 2007 年度に策定した長期ビジョンにおいて、「『考動力』ある人材の育成」を掲げている。「考動」とは、「自らの頭で自主的によく考え、自律的かつ積極的に行動する」ことを意味している。

本教育プログラムでは、その理念をグローバルな視野から具体化し、地域社会や国際社会でリーダーシップを取りながら地球規模で発生する問題を解決することができる「考動力あふれる人材」の教育プログラムのモデル化をめざしている。とくに、グローバル化を意識し、国内をフィールドにするのではなく、アジアを中心とした開発途上国で活躍できる人材を育成し、アジア地域での社会貢献をする活動を通して、学生が主体的に学ぶことのできる教育プログラムはどのようなものか、実践されている４つの教育プログラムを事例に、実践可能性の高い、アジアをフィールドとした教育プログラムを展開していく可能性について検討を加える。

１．１．１．教育プログラムの目標

「社会人基礎力」、「グローバル人材」など 21 世紀に入り、社会の急激な変化に対応するために、従来の能力概念を超えた〈新しい能力〉の必要性が議論されるようになってきた。〈新しい能力〉は、単に知識やスキルを身に着けるだけでなく、社会が激しく変化する中で問題状況を把握し、自ら目標を設定し、解決に向けて協働して取り組む力を含む概念である。関西大学においても〈新しい能力〉概念を「考動力」と名づけ、「自らの頭で自主的によく考え、自律的かつ積極的に行動する」関大人というビジョンを提示している。同様な考えのもと、本教育プログラムにおいても、とくに以下にあげる 3 つの能力を育成することをめざしている。

ａ）異文化間で協調しながら活動する力
ｂ）英語コミュニケーション力
ｃ）地球的視野で考える力

これらの能力は、それぞれが独立しているのではなく、相互に関連しあっている総合的な力である。学生は、アジアの国を訪問し、異文化環境に飛び込み、そこで暮らしている人たちと生活を共にし、英語を使って現地の人間と積極的に協働する中で、そこで起きている問題を自らの問題として捉えし、主体的に取り組めるようになることを本教育プログラムの骨子とする。異文化で起きている問題は、そこでのローカルなものではなく、日本ともつながりのあるグローバルな問題としてとらえなおす力が求められる。

１．１．２．サービスラーニングという教育プログラム

本教育プログラムを「サービスラーニング（Service Learning: 以下 SL と呼ぶ）」として位置付ける。SL とは、サービス（社会奉仕）とラーニング（学習）の二つの側面をバランスよく取り入れ、学生が体験から生きた知識を学ぶ教育プログラムである。つまり、社会貢献活動のなかに学びの要素を盛り込んでいる活動といえる（国際基督教大学サービス・ラーニング・センター 2005）。

人が他者や社会に好意的な感情を持つようになるには、自分が相手から「受け入れられている」「認められている」という手ごたえから始まる。誰かが自分のしていることに関心を向けてくれる、自分のために誰かが何かをしてくれているという他者からの働きかけや、他者との交流体験が基盤となり、他者と関わりたいという感情が生まれる。自分のしていることが他者の役にたっている、そして感謝される体験は、自分が社会的な存在であるという自覚を促し、社会に役に立つという有用感が生まれることで、さらに役に立ちたいという感情が育っていく。SL は、人が社会的な存在であるという認識を深め、自主的に社会への働きかけをおこなうきっかけを用意してくれる。

SL は、北米の大学で発達し、さまざまな領域での実践事例が報告されている（ex. Hutchinson 2011)。日本でも 2000 年以降多くの大学で導入され始めたが、まだ十分に成熟した教育プログラムには至っていない。関西大学ではインターンシップなどの体験学習をめざしたプログラムは用意されているが、SL に関しては充実しているとは言えない。本教育プログラムの特徴は、アジアの国で実施することで異文化環境に対応できるグローバル人材を、社会貢献と学習を取り入れた SL を通して育成することをめざしている。

先進的な事例として,2002 年に設立された早稲田大学の平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）の活動を取り上げる 。「社会と大学をつなぐ」、「体験的に学ぶ機会を広く提供する」、「学生が社会に貢献することを応援する」という 3 つの理念をもち、早稲田大学の社会貢献を推進する活動を実践している。設立以来、のべ 13 万人以上が WAVOC のプログラムに参加し、積極的に学生が社会に対して働きかけようとする活動を支援している。現場体験で学んだことを大学での学術的な知をつなげ、広い教養と深い専門

性を身に付け、卒業後はグローバルな視点で社会に貢献する人材として期待されている。オープン科目として、ボランティア論などの講義科目と「カンボジアの文化遺産の保全と村づくりへの国際協力実習」などの体験的学習科目が用意され、単位を与えている。学生が主体的に取り組むプロジェクトもあり、大学が公認団体として認定し、資金や広報活動の支援をおこなっている。

早稲田大学のこのような取り組みをまだ多くの大学が実施しているわけではないが、SL を正規科目としてカリキュラムに組み入れたり、プロジェクトを大学として公認し、支援をしたりする取り組みは、少しずつではあるが増えている。関西大学においても、このような取り組みを大学としてどのように実施できるか、今後検討を重ねていく必要があるだろう。

１．２．モデル化を目指すプログラム

SL を取り入れた３つの教育プログラムを取り上げ、カリキュラムを目標に沿って開発し、形成的評価を実施する。以下の３つの教育プログラムの概要を説明する。

１）フィリピン・チルドレン・プロジェクト（PCP）

フィリピン・チルドレン・プロジェクト（PCP）は、2010 年度（平成 22 年）から関西大学の学生が参加する教育プログラムである。関西大学では春学期初めに募集をおこない、事前・事後の活動に参加できる学生を中心に選抜をおこなう。関西大学の学生は毎年、6 から 12 人が参加している。

８月中旬に 10 日間、フィリピンのアンヘレス市を訪問し、主に養護施設でリコーダーの演奏の仕方を指導する。事前研修として、学生はリコーダーの教え科方について学習する。小学校と大学での文化交流。リコーダーの指導をおこなう。タガログ語やリコーダー教授法の他にフィリピン事情、保健衛生講座、学外施設での講義や実習を行う。現地では、小学校におけるリコーダー指導に加え、ホーリーエンジェル大学における交流も行う。単位にすると４単位相当となり、それ以外の準備作業の時間を換算すれば、実際には６単位以上の学習量となる。事後研修として学内で報告会を催し、学外のディベート大会に参加するなどの言語化を試みさせる。そして年度内に文集（報告書）や DVD を完成させてプロジェクトは終了する。

参加した学生のうち数名はプログラムの支援をする役割を担うために、翌年は一般メンバーの資格で PCP に参加する。2010 年の PCP に参加した６名の学生メンバーのうち３名は、2011 年の企画段階から参画し、現地ではリーダーシップ、あるいはリーダーシップ・フォロワシップ（補佐力）を発揮してプロジェクトの成功の一翼を担った。本教育プログラムに参加し、フィリピンに興味を持ち、フィリピンに 1 年間留学した学生もいる。

２）フィリピン・フィールドスタディ（PFS）

専門演習の活動の一環として、1996 年から毎年、ゼミのフィールドスタディとして 15 から 20 名の学生が参加してきた。当初は、タイ、マレーシア、オーストラリア、インドなど様々な国を訪問したが、10 年前からフィリピンに定着をしてきた。ゼミ担当教員がフィリピンに海外ボランティアとして 2 年間活動してきたため、フィリピンとの人的ネットワークがあり、フィールドスタディの対応がしやすいからだ。ゼミ活動の一環としておこなうため、フィールドスタディを軸に 1 年間のプログラムが開発されてきた。

春学期は、サブゼミとして毎週専門演習の時間とは別にフィールドスタディの準備のための時間を取り、学生が自主的に学習する場を設けた。4 年生のアドバイスのもと 3 年生自身が自主的に計画を立てる。たとえば、航空券の手配、日程の調整、訪問先との連絡、宿泊の予約など、すべて自分たちで計画を立てる。また、フィリピンの社会、歴史について交代で調べてきたことを発表する。フィリピン訪問中、大学などで日本についての発表を予定しているため、日本の社会状況などを英語で説明できるようしたり、交流会の出し物として、歌やダンスなどの練習をしたりする。コミュニケーションはおもに英語でおこなうため、週 90 分の英語コミュニケーションの時間を作り、英語で自己紹介や会話の練習も行っている。

フィールドスタディは、毎年夏休み期間中に行われる。2，3 週間、フィリピンに滞在し、保育園、小学校、高校、大学、NGO、政府機関など様々な団体を訪問し、フィリピンについて理解を深める。2013 年度は次の団体を訪問した。

①ブラカン大学、フィリピン工科大学

学生間の交流を深めるためのワークショップや歌とダンスの披露し合い、また現地の学生とともに歴史的な建物を見学した。

②NGO

日本に出稼ぎに出かけたことのある女性を支援するバティス女性センターでは、日本とフィリピンの間の問題点や日本人の男性との間に生まれた子供の養育費に関する説明を受けた。ゴミの集積場のあるパヤタスでは NGO による保育園やフリースクールを訪問した

③政府機関

海外雇用庁では、フィリピン人の海外での労働状況に関する話を聞いた。日本大使館では、ミンダナオ和平に関する日本政府の取り組みに関する話を聞いた。

④社会起業家

ユニカセ・レストランはストリートチルドレンが独り立ちできるように、レストランでの仕事を提供している。フィリピンの貧困問題についての状況を学んだ。

⑤児童養護施設
ミンダナオ島にあるハウスオブジョイという養護施設を訪問し、子どもたちと遊んだり、料理を作ったりして、養護施設での生活を体験した。
⑥学生ジャーナリズム全国大会
フィリピン全土の 20 あまりの大学から学生が集まり、ニュースレター、ラジオ番組、ポスター、映像作品などの制作を競い合った。

これらの訪問先は、教員のアドバイスのもと学生自身が決め、相手側と連絡を取り合い、日程を調整する。2 名ほど 4 年生がアドバイサーとして参加する。4 年生にとっても下級生指導は大きな学びにつながる。
帰国後、秋学期にはフィールドスタディで学んだことを下級生、他ゼミの学生、保護者などに報告をする会を持つ。相手に合わせてプレゼンの内容を変えるなど、どのようにすれば効果的な発表ができるか検討を加えるので、深い振り返りを促すことができる。ビデオ作品と報告書を印刷物として作成して活動を終える。

３）カンボジア・協働活動プロジェクト（CCAP）
本全学の学生を対象に募集をおこない、2011 年の夏にカンボジアを訪問し、大学との交流や NGO 活動の支援をおこなう目的で実施された。2012 年は短期留学の奨学金を受けることができたため、応募者は 30 人を超えたが、選考を実施し 9 名を派遣した。
カンボジアの学生の受入は、2011 年 12 月から 3 回にわたって行われた。しかし、2013 年は、短期留学の奨学金を受けることができず、国際交流基金からの助成でまかなった。10 名から 5 名に縮小した。
活動は、農村部の小学校において、校門の建設、小学校での保健教育、図書館の充実などの活動をおこなった。日本の絵本を英語とクメール語に翻訳した。カンボジアの絵本を寄贈するとともに、教師に対して図書館の運営方法、読み聞かせ指導の方法などの研修をおこなった。他にも、日本の小学校とカンボジアの小学校間で行われる交流学習を支援する取組などを行っている。
次章より、各プログラムの詳細な内容および成果と課題について報告する。

参考文献

Hutchinson, M. (2011) Measuring Engagement Impact on Communities: Challenges and Opportunities. *Journal of Higher Education Outreach and Engagement*, 15(3) pp. 31-44.

２章　フィリピン・チルドレン・プロジェクト（PCP）

澤山利広（関西大学国際部）

２．１．プログラムの概要

国及び地域　：フィリピン共和国・パンパンガ州アンヘレス市
渡 航 期 間　：平成 24 年８月 10 日～平成 24 年８月 19 日（10 日間）
参 加 人 数　：８人（３年１人，２年２人，１年５人）

【プログラムの目的】

本学学生のフィリピン共和国での活動を通じた、現地の初等教育レベルの情操教育分野への寄与と本学学生の育成である。

一般に、大学生・院生は，国際協力を行うための語学力と技術力を持ち合わせていない。そのような学生が派遣前の授業科目と正課外教育によって必要な知識とスキルを身につけ、ルソン島パンパンガ州アンヘレス市圏の孤児院と小学校において国際情操教育協力を行う。派遣後研修では，参加者が現地活動の言語化・映像化によって体験を咀嚼し、社会貢献活動で高い成果を生み出すための行動特性，すなわちコンピテンシーの向上を狙いとしている。

また、アヘンレスでのプログラムは、本学の「アジアと連携したサービスラーニング教育プログラムのモデル化グループ（以下，ASLG）」の実践の１つであり、他の ASLG によるプログラムとの比較研究の成果は本学のサービスラーニング科目群の設立に反映される。

サービスラーニングが生涯にわたる地域への貢献や地域との結びつきの強化を教育効果としていることに鑑み、本プログラムは市民の参画を得た社学連携型プロジェクトである点を附記する。

【プログラムの特色】

本プログラムは、海外での見学や体験等を通じた、日本の参加学生（関大生）の知見の向上だけを目的とする活動ではなく、他者への献身を志向する技術協力である。

教員不足、教材不足等のために十分には行われていないフィリピンの初等教育レベルの情操教育の充実に寄与すると共に、関大生の語学のみではなく社会貢献活動、特に国際協力のリーダーに求められるコンピテンシー（高い成果を生み出すための行動特性）の諸

項目（志、実行、受容、活用、和）の向上を重視する。

具体的には、国際協力に従事する上で必要となる、８点であり、その過程を通じて、コンピテンシーを高める。

①ボランティアに関する基礎理論、
②ボランティア活動に必要な技能、
③地球規模の課題及び地域社会の諸問題、
④実践知の言語化・映像化手法、
⑤自国及び他地域の歴史・文化・価値観、
⑥外国語運用能力とノンバーバル領域を含むコミュニケーション力、
⑦ボランティア・スピリッツに根ざしたリーダーシップ力、
⑧誇りと愛着が感じられるコミュニティの創造力等の修得、理解、把握、あるいは獲得

【プログラムの年間スケジュール】

本アヘンレスでのプログラムでは、以下の年間スケジュールで活動を進めた。

プログラムの年間スケジュール

月	内容
４月	参加者募集（募集要項発表、ポスター掲示、学内説明会など）
５月	参加者決定、父母説明会、派遣前研修
６月	派遣前研修
７月	派遣前研修
８月	派遣前研修、現地活動（8/10-19）
９月	派遣後研修
10 月	派遣後研修
11 月	派遣後研修、ビデオ完成
12 月	派遣後発表会
１月	派遣後研修、
２月	報告書（文集）完成、次年度のためのフィリピンでの準備
３月	次年度のためのフィリピンでの準備

【プログラムの教育・指導体制】

参加学生は、「派遣前研修」において現地での技術指導やプレゼンテーションなどの準備作業を行う。本学国際部専任教員（澤山）が派遣前後研修、及び現地活動を統括し、PCP をはじめとする学外の組織の協力も得て、音楽、体育等の情操教育教授法等の実習を行う。

また、現地訓練として、HAU の NSTP（National Service Training Program）担当教員やアンヘレス市圏を含む中北部ルソン島に特有のカパンパンガ文化の研究拠である HAU 付属博物館学芸員によるレクチャーを受け、フィリピン人のホスピタリティに根差したボランティアスピリットと当地の過去と現在の理解に努める。

帰国後の「派遣後研修」では、活動の言語化・映像化を通じた体験の定着を図ることを目的としたプログラムが組まれている。具体的には、ルーブリックやポートフォリオの整理・分析、文集（報告書）やビデオの編集、報告会開催、ディベート大会参加のため準備を行う。さらに、社会貢献活動支援士、あるいはボランティア検定 1 級の資格取得を目指す。

【プログラムの危機管理体制】

アヘンレスでのプログラム責任者は、参加学生と父母を対象とした派遣前説明会において、緊急連絡網を作成した。参加学生には海外旅行保険への加入を義務付けた。プログラム責任者は、現地事前調査・準備の段階で現地関係者と共に、事故、自然災害等の発生時の連絡体制の確認や避難、搬送にかかるシミュレーションを行った。通院が必要な事態を想定して Angeles University Foundation Hospital の救急救命センターに搬送するルートを確保した。本プログラム責任者である本学国際部専任教員（男性）に加え、女子学生のケアを担当する PCP スタッフ（女性）が現地活動の全日程に同行し、プログラム責任者と現地コーディネーターが、24 時間体制で不測の事態に備えた。また、異なる会社の携帯電話を揃えるなど複数の連絡手段を用意した。

宿舎はセキュリティを最優先し、ビレッジと呼ばれる警備員が常駐するコンパウンド内の施設（Fontana Villas）を利用した。

２．２．事前活動

【事前活動の目的】

アヘンレスでのプログラムは、一般に十分な語学力と移転可能な技術を持ち得ない学部生・院生を対象とした国際協力志向型のサービスラーニングプログラムである。研修によって情操教育教授法を身につければ、語学力を幾らかカバーすることは可能である。現地活動を実効性あるものとすると共に、その経験を身につける観点から正課外教育「派遣前研修」

と「派遣後研修」が用意されている。すなわち、様々な属性の参加者が知恵と力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）を結集して、フィリピンにおける初等教育レベルの情操教育協力を行うことはもちろん、派遣前後の研修においても、互いに高め合うことに本プログラムの特徴がある。専攻の異なる学生が、それぞれの所属学部での学びを提供し合いながら、現地で必要となる語学、技術等の向上を図るピアエデュケーションを採用した。

【事前活動の詳細日程、及び内容】

事前活動の日程と内容

日付	時間	内容	場所
4／25（水）	18：10～19：40	オリエンテーション	総合研究室棟
5／12（土）	11：00～17：30	PCP 説明	総合研究室棟
5／22（火）	17：30～19：00	事業説明・面接	総合研究室棟
5／29（火）	17：30～19：30	父母説明会	総合研究室棟
6／3（日）	8：30～16：00	フリーマーケット手伝い	Ama-do
6／9（土）	9：00～18：00	英語試験＋e ポートフォリオ説明 教材づくり、教材集め	第 1 学舎 D206 総合研究室棟
6／26（火）	17：00～19：30	教材づくり、教材集め	総合研究室棟
6／27（水）	18：10～19：40	海外体験で学ぶ	第 2 学舎 C302
7／3（火）	17：00～19：30	教材づくり、教材集め	総合研究室棟
7／7（土）	10：30～18：00	教材づくり、教材集め	総合研究室棟
7／10（火）	17：00～19：30	教材づくり、教材集め	総合研究室棟
7／17（火）	17：00～19：30	教材づくり、教材集め	総合研究室棟
7／25（水）	18：10～19：40	「東南アジアの紛争影響地域に対する日本の支援」－フィリピンとカンボジアにおける日本の支援と成果－	第 2 学舎 C302
8／6（月）	10：30～18：00	最終確認・荷物搬出	総合研究室棟

派遣前研修では、活動の準備が中心で、楽器集め、楽譜作成、授業進行のコツとペースの話し合い、フィリピンでの活動計画などを話し合ってきた。当初は皆、あまり馴染めず、硬い感じの会議であったが、時間が経つにつれて次第に打ち解けていった。それに伴い、会議の方もスムーズに進んでいったが、リコーダーとソーラン節の全体練習はあまり時間が取れず、各自の練習や会議以外の空き時間で練習をすることとなった。

【フリーマーケット】

初めての PCP の活動は尼崎の Ama-Do でのフリーマーケットであった。全員初めての顔合わせで、なかなか緊張の糸が解けなかった。

このフリーマーケットの目的は２つある。１つは寄付するものを買うための資金集めである。もう１つは、恥ずかしがらずに人と話したり、客を呼び込むために大きな声を出すことで、授業の予行演習をするということである。

自分から大きな声を出して接客している人もいれば、緊張が解けきっていないのか声をあまり出せなかった人もいた。慣れるにしたがい全員が最初よりも声を出して接客することができた。多くの品物を売ることができたが、高い値段づけのために売れなかったり、安い値段を言ってあまり資金にならなかったりと値段設定が難しくとても苦労した。

去年の金額には及ばなかったものの、8、450 円の売り上げは、ABBC に洗濯機やバスケットボールを寄贈する費用に充てた。

リコーダーの練習

フリーマーケット

２．３．現地活動

【現地活動の詳細日程】

8/10(金)	
15:30	関西空港集合
17:25	出発
20:55	ニノイアキノ国際空港到着
	リクシさんと合流、バンでホテルへ
	（通常２時間→洪水の影響で渋滞、６時間掛かる）
翌 03:00	ホテルフォンタナ着

8/11(土)		
10:00	朝食	
12:30	リコーダー練習	
14:15	リコーダー教え方打ち合わせ	
16:00	ソーラン節練習	
17:45	買い出し	
19:00	夕食	
20:30	ミーティング	
8/12(日)		
7:30	朝食	
8:30	ABBC(子ども達が教会へ行くためあまり遊べず)	
10:30	ホテルフォンタナ着、リコーダー練習	
12:00	昼食	
13:30	ホテルフォンタナ発	
14:00	Duyan Ni Maria Children's Home of Angeles City（孤児院）着、ゲームで交流	
	(名前ゲーム、人間知恵の輪)	
	ABBC(バレー、バスケなど)	
19:00	夕食	
20:00	ミーティング	
8/13(月)		
6:15	朝食	
7:15	ホテルフォンタナ発	
7:40	ABBC 着、準備	
11:00	昼食	
12:00	1、2、3 年生授業	
14:30	4、5、6 年生授業	
16:00	片づけ	
16:30	ホテルフォンタナ着、休憩	
18:30	夕食	
19:30	ミーティング	
20:15	ソーラン節練習、次の日の打ち合わせ	

8/14(火)	
6:30	朝食
7:20	ホテルフォンタナ発
8:00-9:00	4、5、6 年生授業
10:00	1、2 年生授業
11:00	３年生授業
12:00	昼食
13:00	Cutcut 小学校ソーラン節指導
15:30	休憩、ミーティング
16:45	ABBC
19:00	夕食
20:00	ミーティング
8/15(水)	
6:30	朝食
7:20	ホテルフォンタナ発
8:00	1、2 年生授業
9:00	３年生授業
10:00	4、5、6 年生授業
11:30	昼食
13:00	Cutcut 小学校ソーラン節指導
15:00	お店で休憩
17:15	ABBC
19:45	夕食
20:45	ミーティング
8/16(木)	
6:30	朝食
7:20	ホテルフォンタナ発
8:00	1、2 年生授業
9:00	３年生授業
10:00	4、5、6 年生授業
11:45	昼食
12:40	Holy Angel University 着
13:00	HAU ツアー、学生との交流
18:45	ABBC
20:00	夕食
21:00	ミーティング

8/17(金)	
6:30	朝食
7:20	ホテルフォンタナ発
8:00	最終練習、会場づくり
10:00	ミニコンサート
12:00	昼食
12:40	ABBC 発
13:00	Sapang Bato High School で学生との交流
15:30	ホテルフォンタナ着、休憩
17:00	最後の ABBC 子ども達と一緒に夕食
21:00	ABBC 発
21:30	ミーティング
8/18(土)	
9:00	朝食
10:00	ホテルフォンタナ発
	観光（ピナツボ火山噴火で火山灰が降り積もった河川敷、火山灰で埋まった教会、アエタ族の村、神風特攻隊記念碑・飛行場、平和観音像、ショッピング）
18:30	夕食
20:00	ミーティング
8/19(日)	
2:50	起床
3:00	ホテルフォンタナ発
5:00	ニノイアキノ国際空港到着
6:55	出発
11:45	日本着

【現地活動の内容】

■ABBLC（Angeles Bahay Bata Learning Center）

ABBLC は施設で暮らす子どもを含む男子と、外から通う女子が学んでおり、１～３年生

と４～６年生で授業の時間帯をずらす２部制をとっている。今回は、大雨による授業変更や試験がある中、私たちの授業を受けてくれた。初日こそ人数は集まらなかったが、２日目からはたくさんの児童が来てくれた。

ａ）今年の授業づくり

今年はリコーダーをただ吹くだけではなく、きれいな音で吹くことを目標とし、そのために息の入れ方や、タンギングをしっかりと教えた。また、３年生はリコーダーではなく、鍵盤ハーモニカ（ピアニカ）を使用するという初の試みをした。

・Call and Response

指導者がお手本のフレーズを演奏し、児童が真似るというのを繰り返す

・Recorder's Master 3 rules

１．姿勢

２．優しく息を入れる

３．リコーダーの穴を完璧にふさぐ

授業は１時間目に１・２年生、２時間目に３年生、３時間目に４～６年生をそれぞれ同時進行で行った。５・６年生は授業始めの"Hello Song"と終わりの"Goodbye Song"、その日の成果の発表のみを合同で行い、授業自体は別々で行った。外で授業を行ったり、教室の変更があったりしたが、それでも児童は集中し、熱心に楽器に向かい合っていた。

ｂ）課題

今までの反省点から、今年もサブのスタッフがついてこれない児童を対象に、個別指導をするという方法をとった。さらに、グループごとに分けて練習させたためか、児童同士で教え合うなどの姿が見え、切磋琢磨している様子が伺えた。来年は、もっと児童がお互いに練習し合えるように工夫して授業を進めたい。

ｃ）ABBLC でのリコーダー、ピアニカ授業

＜１年生　課題曲"Bahay Kubo"「バーハイクボ」＞

１年生は、当初２年生と同じ"Bulaklak"を演奏する予定であったが、難しいということもあって、急遽"Bahay Kubo"という少し簡単で、更にフィリピンで有名な歌に変更した。

１日目

まず始めに、緊張をほぐすために“Hello Song”という歌を一緒に歌い、その後、日本のCM でお馴染みの「チェッチェッコリ」を使って歌遊びをした。そして、四分音符や四分休符などの音楽知識を体を使ったリズム遊びで指導した。最後に皆で“Bulaklak”を歌い、その後にゲームをした。１年生は、英語での意思疎通が難しいからか、勝手に外に出て行ってしまう児童もいた。言葉だけでなくとも伝わるような授業を、心がけなければならなかった。

２日目

通常通り、“Hello Song”から始め、四分休符などの音楽知識を、拍手によるリズム遊びで復習した。その後に、「チェッチェッコリ」の歌遊びを行った。この日は、低い Do から高い Do までの音階のカードを階段状に並べて、手で高さを変えながらピッチを学ぶという練習を重点的に行った。音階を学ぶのは難しいということもあってか、飽きてしまう児童もいた。

３日目

前日までの「チェッチェッコリ」ではなく、この日は、“Walking Walking”という歌遊びで曲の速さをだんだんと速くしながらテンポを指導した。その後、新たに二分音符の学習もし、前日の課題であった音階を、「ドレミの歌」に合わせて、体を使いながら定着させることを試みた。この日、初めて課題曲である“Bahay Kubo”を指導できた。児童にとって親しみのあるこの曲を、鈴やカスタネットを使い「タンウンウン」、「ウンタンタン」のリズムで練習した。裏拍「ウンタンタン」のリズムが、児童にとっては難しかったようだ。

４日目

前回の復習で「ドレミの歌」に合わせて、体を使った音階の復習を行った。その後は、音量の違いについて学習した。ライオン、イヌ、ネズミの絵を用意し、各動物に見合った声の大きさはどれかを指導し、だんだん大きくしたり、小さくしたりした。“Bahay Kubo”を鈴、カスタネットに分かれて練習した後、合奏した。自分の演奏するリズムが分かっていない児童もいた。

５日目　ミニコンサート

前日に欠席していて、初めて楽器をさわる児童もいたので、リズムはなかなか合わなかったが、楽しく演奏することを重視して指導し、ミニコンサート直前の練習を終えた。本番では、リズムの正確さは欠けるものの、少し恥ずかしそうに、そして、楽しそうに演奏してくれた。

＜２年生　課題曲“Bulaklak”「ブーラックラック」＞

２年生は、“Bulaklak”という曲を学習した。この歌はフィリピンではとても有名な遊び歌である。日本で言うと、「かごめかごめ」のように、中央の「女王様」を囲んで輪になり、周囲を回りながら歌い、女王様はユニークな踊りでみんなを楽しませ、目を覆って次の女王様を指さすというものである。今回、２年生は、音楽の基礎を学ぶことを中心とした授業を行い、リコーダーの学習も初めて行った。

１日目

テスト期間中であったために、授業は通常ならば空き時間である 12 時から 13 時に行われた。本来は児童が 22 人いるはずだったが、時間の変更などの影響からか、8 人しか来なかった。まず初めに、自己紹介、“Hello Song”を歌った後、“Head Shoulders Knees and Toes”を歌うために、体の部位について、頭なら頭、肩なら肩を触りながら学習し、実際に体を動かしながら歌った。そして、音符の名前と長さを四分音符、八分音符、四分休符を使って教え、音符カードを使ってリズム遊びを行った。その後、リコーダーを吹く際の姿勢の注意を呼びかけ、リコーダーを配って、Ti を教えて、吹いてみるところで終了した。

２日目

まず、歌遊びをし、“Bulaklak”を歌った。その後、階名で歌い、その際に、ライオン、犬、ねずみの絵を用いて、強弱をつけながら階名で歌うことに挑戦した。また、音階にあわせて、手を使って歌うという練習も行った。その後、リコーダーを配り、Ti の復習を行った。

３日目

まず、歌遊びをし、その後、“Bulaklak”を強弱をつけたり手をつけたりしながら歌った。そして、黒板に貼っていた楽譜を隠して、暗記して数回歌った。その後、姿勢を確認し、リコーダーを配って、児童を４つのグループに分け、教室を２グループずつ２つ使い、グループ練習を 30 分程度行った。グループ練習では、Ti の復習を行い、La、So を教え、タンギングについても注意しながら、楽譜の１段目を吹けるようにすることを目標としていた。最後にもう１度みんなで集まり、“Bulaklak”の１段目だけを全員で何回か吹いて授業を終わった。

４日目

この日は、歌遊びをして、“Bulaklak”を数回歌ったあと、リコーダーを配り、３日目と同じようにグループ練習を行った。その際、３日目での様子を見て、児童に Re を教えることを今回は諦めた。また、３日目のように音がきちんと鳴っていなくても、指があっていれば、あまり気

にせずに褒めることにした。その進め方のおかげか、４日目は“Bulaklak”を最後まで吹くことができた。

５日目　ミニコンサート

ミニコンサート前に、ブーラックラックを数回吹いてリハーサルをした後、本番を迎えた。本番では２回披露することになったが、児童は２度とも懸命に指を動かして曲を吹いていた。リコーダーの学習は始めてで、手の小ささなどの影響もあったが、それを忘れてしまうくらいに、成長した姿を見せてくれた。

＜3 年生　課題曲“Mary Had a Little Lamb”「メリーさんの羊」＞

今回は初の試みとして、リコーダーではなく鍵盤ハーモニカ（以下、ピアニカ）を使用した。児童は、初めて見る楽器にとても興味津々な様子で、授業が待ちきれなさそうであった。こちら側も初めてピアニカで授業を行うために、楽しみであった反面、少し緊張もした。

1 日目

まず、約束事（先生が手をあげたら、児童は手を頭に乗せる）を決めた後、“Mary Had a Little Lamb”を４フレーズに分けて歌った。2 回、3 回と繰り返していくうちに児童の声が大きくなってきて、とても嬉しかった。その後音符の名称とリズムを学習し、ピアニカを使って So La Ti Re の音を正しい姿勢、指使いで練習した。

2 日目

“Mary Had a Little Lamb”を歌詞・階名で歌い、約束事、姿勢、指使いなどの復習をした後、1 フレーズずつ弾く練習をした。指を抑えたまま、タンギングで音を刻ませることを何度も繰り返した。理解すると、隣の児童に教えている場面も見られ、負けないように必死に練習しているのが印象的であった。

3 日目

この日は、ほぼ１対１で授業を進行した。すべてのフレーズを吹くことを目標とし、復習の後すぐに練習を開始した。最後のフレーズで苦戦する児童が多かったのだが、何度も繰り返すと吹けるようになり、「先生！見て見て！」と自分たちから積極的にアピールすることに驚いた。最後に列ごとに発表を行った。

4 日目

暗譜することを目的とし、楽譜を隠して階名で歌う練習を繰り返した。その後、吹ける度合いのばらつきを無くすため、個別練習を行った。その後は、本番のシミュレーションとして、列ごとであったりグループで発表をした。本来のテンポの拍数に合わせて演奏することが難しく、どうしても早くなる傾向があったのだが、その他は特に問題はなかった。

5 日目　ミニコンサート

リハーサルの時点で、拍のリズムに合わず少々不安であったが、本番は構えも演奏も揃っていて、練習の成果を存分に発揮してくれたと思う。児童の演奏し終わった表情を見ていると、みんな笑顔で全力を出し切った感じが読み取れ、非常に嬉しかった。

＜4 年生　課題曲“Jingle Bells” 「ジングルベル」＞

4 年生にはクリスマスソングとしてお馴染みの“Jingle Bells”を教えたが、後半が比較的難しい曲のため、指導範囲を半分までにした。4 年生は人数も一番少ない学年であったため、個人に目が行き届きやすいクラスであった。

１日目

授業の前に簡単な自己紹介をすませて、”Head、 Shoulders、 Knees and Toes” “Walking Walking”を皆で歌った。最初は緊張していた彼らもすこしほぐれ、授業に臨んだ。まず、四分音符など音の長さやリズムを知ってもらうために、手を叩きながらリズムゲーム式で練習した。その後、強弱の習得のため、動物の絵を用いて何度も“Jingle Bells”を一緒に歌った。リコーダーを吹く際の姿勢、息の入れ方も教えた。特にタンギングには苦労をしている様子だった。

２日目

“Walking Walking”などのリズム遊び、前回の復習を行った後、So から高い Re まで階名の指導を始めた。手の高さを使ってどちらが高いかを示した。リコーダーを児童に配ると、So から Re それぞれの指使いを指導して、その際にタンギングの復習も交えた。もっとも重要な部分であるため、4 グループに分けての練習に時間を割いた。その後、階名で“Jingle Bells”を歌ってから、リコーダーで初めて演奏した。一段目まで吹くことができた。

３日目

リズム遊び、前回の復習を行ってから、階名で“Jingle Bells”を歌った。動物の絵を使って、

強弱をつけながら階名で歌わせたり、楽譜を見ずに歌わせるなど、児童が飽きないような工夫をした。その後、リコーダーを用いて一段目から復習した。できない児童に対して友達が教えてあげるという姿も伺えた。当初の目標では全てのフレーズを終わらせる予定でいたが、休符のリズムにつまずいてしまい、最後の一段を翌日にまわす形となった。

４日目

残りの一段を終えて、最初から通して練習した。暗譜もしっかりできていた。次にグループごとに吹いてもらい、個々の音色を確認した。今回はリズム遊びを中盤に挟んだ。このことが児童の集中力を持続させるよい結果となった。最後は本番と同じ並びで仕上げを行った。

５日目　ミニコンサート

私達の１人が手を挙げて、演奏を開始する時、とてもいい顔をしていた。適度な緊張感の中、彼らは４日間の練習の成果を存分に発揮した。今回の経験が次学年でのリコーダーの練習に対する意欲につながってくれればいいと思う。

＜５年生　課題曲“National Anthem of the Philippines”「フィリピン国歌」＞

去年もリコーダー指導を受けている６年生を５年生が見習えるように、授業の始まりと終わりを合同にした。授業終わりには、その日の練習成果を学年ごとに発表し、どちらにとっても自分たちの頑張りを認め合えるとてもいい機会になった。５年生は、昨年の５・６年生が進めることができた A、 B、 C という３パートあるうちの A、 B の２パートを練習した。

１日目

初回の授業では、何度か階名で歌った後、早速リコーダーを使った練習を行った。前半を合同で後半を５・６年生に分けて練習した。まず、前半では今まで学んだリコーダーの構え方と音階を復習し、何度か A パートを演奏した。後半練習ではもう一度指のポジションを確認し、国歌の最初の１小節を何度もゆっくり繰り返す練習をし、最初の２小節を演奏することができた。

２日目

A パートを階名で歌って覚え、前日練習した最初の２小節を復習した。それから次の２小節までの指の動きを練習し、個別練習を長めにとった。動きが似ているためか、ここはすぐにできるようになり、A パートを通して吹けるようになった。

３日目

B パートを音階で歌った後、リズムのみの練習に移った。音符を黒板に掲示し、手拍子でリズム打ちをした後、高音と低音でのタンギングの違いを教えた。B パートでは初めに、タンギングが必要なパートのみを繰り返し、そのあとに、その前の部分をつけて練習した。ここでも個人練習に重点を置き、A パートから B パートの途中まで吹けるようになった。

４日目

B パートを覚えているかどうかの確認から始まり、吹けるようになった所を復習した。それから高い Re と Mi のポジションを確認をし、音を出した。１つ１つ音を出すときれいに出るが、リズムに合わせようとすると音が狂ってしまうため、ゆっくりとしたテンポから何度も繰り返し、練習した。この日も個人練習の時間を長く取り、授業の終わりには B パートも吹けるようになった。

５日目　ミニコンサート

４日目までの復習をした。C パートは歌うことに決め、A パートから通しで練習をした。ミニコンサートも大成功であった。児童が次第に吹けるようになり、それにつれて増えていく笑顔が印象的だった。来年は６年生でマスターさせたい。

＜６年生　課題曲“National Anthem of the Philippines”「フィリピン国歌」＞

６年生は授業の始まりと終わりを５年生と行った。昨年も国歌を演奏したのだが、半分までしか進めることができなかったため、６年生は最後まで国歌を吹くことが目標であった。また、私たちの指導だけではなく、自ら練習し、自分たちのリコーダーの音に合わせて演奏することもできた。

１日目

この日は前日までの大雨の影響で時間割が大きく変更となった。最初は５年生と合同で授業を進め、音符の復習、音符・休符の呼び名と長さの確認をし、A パートを階名で歌った。その後、５・６年別で分かれて授業をし、６年生は２小節ごとに区切り、個別指導を併用させていった。この日は４小節まで進んだ。

２日目

“Hello Song”と”Goodbye Song”、それから授業の終わりにその日の成果の発表を５・６年生合同で行った。この日はフレーズを意識しつつ、何小節かに区切ってそれを３回

繰り返して練習し、音を合わせた。進み具合を考慮に入れつつ、２分間の個別指導と２分間の自由練習を組み入れ、児童自身で練習をさせた。時折、２分間の休憩を織り交ぜ、集中とリラックスを交互にさせることで、A パートと B パートの４小節目まで進んだ。

３日目

C パートの７小節目まで指導できた。全体練習を繰り返す中で、児童のやる気が感じられ、学生が個別で見ることで効率よく授業が進められた。最終日に最後までできるめどがたった。

４日目

この日はまず、B パートの 16 分休符の有無の違いの紹介と、C パートの前半と後半の違いを確認した。難しいにも関わらず児童はよく理解をし、C パートをほぼ順調に進ませ、次の日のミニコンサートに向けての通し練習をした。

５日目ミニコンサート

始まりの合図を児童に任せ、１回目は聞いてもらい、２回目は客席の児童達に歌ってもらうという形にし、直前練習では暗譜で通し練習を２回行った。本番は、他学年の見本となるような６年生らしい見事な演奏を見せることができた。

＜Mini Concert!＞

１年生

鈴やカスタネットを使い、“Bahay Kubo”を演奏した。多少のリズムのずれはあったものの、鍵盤ハーモニカに合わせ、少し恥ずかしがりながらも元気いっぱい楽しそうに演奏し、他の学年の児童や先生方も大勢で一緒に歌ってくれた。

２年生

リコーダーで“Bulaklak”を演奏した。練習開始当初から担当者達は不安を抱えていた。不安を残したまま当日を迎えたが、多少音がずれるものの、最後まで演奏できた。児童達も楽しそうで、満足そうだった。

３年生

鍵盤ハーモニカを用いて“Mary Had a Little Lamb”を演奏した。この学年は児童に合図をとってもらい、リコーダーと歌を２回繰り返すなど、見事な演奏をしてくれた。児童は予想

以上の拍手喝采を浴び、とても満足気であった。

４年生

リコーダーで“Jingle Bells”を演奏した。休符や暗譜も完璧で、音も綺麗に出ていた素晴らしい演奏となった。周りも一緒に歌い、大変盛り上がった。

５年生

上級生ということで少し難易度の高い“National Anthem of The Philippines”を演奏した。練習中にリコーダーを吹くことが嫌になり、途中で投げ出す子もいたが、当日は全員で立派な演奏をしてくれた。

６年生

最上級生の６年生は５年生と同様に“National Anthem of The Philippines”を演奏した。その演奏はとても素晴らしく、さすが６年生と言える演奏だった。暗譜は勿論のこと、音色の美しさや表現力は目をみはるものだった。これも１年生の頃からの練習の積み重ねだと思うと、児童達の努力に感動した。

ｄ）学生の発表

６年生の演奏終了後、リコーダーの演奏とソーラン節を披露した。なによりもソーラン節が大盛況で、練習した成果を存分に発揮できた。真似をする児童がいて、日本の良い文化紹介にもなった。

ｅ）児童達のダンス

学生が行ったサプライズの後、児童達もダンスを数人で披露してくれた。そのダンスはアメリカン POP だったが、フィリピンではお店でも流れるくらいアメリカン POP の方が人気だそうだ。曲のリズムに合わせて上手に踊っていたが、日本人と違い、児童達は即興で作ったダンスを踊っていたのであった。踊っている児童は楽しそうだった。そのダンスを見ている私達メンバーにも、その楽しい気持ちが伝わったダンスだった。

■CutCut 小学校での活動

アンヘレス市内の CutCut 小学校で２日間かけて、３年生約 120 人を対象にソーラン節の授業をした。

１日目

最初に、自分達でソーラン節を披露した。この出来栄えで児童達の興味も、授業の内容も大きく変わってくるので、前日まで焦りを感じながらの練習だったが、掴みとしてはよかったようだ。

授業が始まると、４つのグループに分かれ、前のステージにメインティーチャーが２人、グループごとのリーダー２人という配置で授業を進行した。指先だけのリコーダーの授業とは違い、体全体を使っての授業で、難しい表現をしなくても視覚でそのまま伝えられるので、児童の集中を切らすことなく授業を進めることができた。児童達の興味と、吸収の早さには目を見張るものがあり、２日間かけて完成させようと想定していた範囲を、ほとんど１日目で終わらせてしまったぐらいだった。

●工夫した点

冒頭部分の８回手で掴む動作のところは、“Get 8 candies”と言うなど、できるだけわかりやすい説明を行った。特に、踊りの波を表現した部分の“push and back”はウケがよく、最初に踊ったときからみんなで掛け声を出していた。また、何回もフレーズごとに分けて教えた後、通し練習をし、グループ練習、そしてまた次のフレーズというように進行していった。全体での練習の際、始めるときに“Relax。 Relax”と声をかけ、急に「構え！」と叫んで準備させてみるなど、楽しみながら児童の集中を切らさないように行った。

●問題点

雨が降り、屋根のある場所で全員一斉に踊ろうとすると、どうしても隣の児童とぶつかって、すごく嫌そうにする児童がいた。また屋根のないところにはみ出てしまい、雨に当たりながら踊っている児童もいて、そのような配慮も必要だった。また、当初の予定では休憩は授業と授業の間に１回という予定だったが、休憩回数が少なかった。児童の親御さんから、「もっと休憩を下さい。」と言われるほどだったので、臨機応変に対応すべきだった。

２日目

CutCut 小学校に着くと児童達から“Maraming salamat po。（ありがとう）”とお礼の手紙をたくさんもらった。予想外の出来事にすごく驚き、嬉しかった。

１日目と同じように４つのグループに分け、早速練習を始めた。最初は、前日の復習から入り、残りのフレーズを教えて、後はグループ練習という流れで進めた。

２日目の最終目標である発表は、当初全体で踊って終わろうという話だったが、そうすると練習時と変わらないので、練習と発表の違いを明確にするために４つのグループごとに前に

出て、他のグループに見せる形にした。

発表時は、後のグループになるにつれて、周りの興奮も高まっていき、最後に全員で踊ったときにはすごい一体感を感じた。違う学年の児童も楽しそうに見ていて、中には一緒に踊り出す児童までいた。

２日間、計４時間弱で、「まさかここまでできるのか」という驚きと、全員が一つになって踊りきったという達成感を味わうことができ、とても中身の濃い時間を過ごせた。

●工夫した点

前回の反省を生かし、休憩を多くとり、屋根のある場所で窮屈な思いをできるだけさせないように、練習するグループと、対面でそれを見るグループに分けることにした。前日の良かった点である声だしと、初めの構えは続けて行った。

■Sapang Bato High School（サパンバトハイスクール）での交流

午前中に ABBLC でのミニコンサートを終えて、Sapang Bato High School を訪問し、生徒と交流した。

ａ）概要

まず、学生メンバーが自己紹介を行った後、PCP の活動内容を紹介すると共に、フィリピン国歌とハイホーをリコーダーで演奏し、Cutcut 小学校で教えたソーラン節も踊った。そのお返しに、Sapang Bato High School の生徒は即興でダンスを披露してくれた。その後は、みんなで円になって、自己紹介ゲームを行いながら自由にしゃべったり、歌ったり、踊ったりして交流した。また、PCP メンバーが日本から持ってきたお菓子とお茶を配り、みんなで食べた。

ｂ）交流

初めは、話題が尽きてしまうのではという心配もあり、自己紹介ゲームを用意した。それは、袋の中に、「日本のお菓子の中で気に入ったものはなにか」という質問から、「彼氏、彼女はいるか」「ファーストキスはいつか」など、様々な質問が書かれている紙が入っており、１人ずつ紙を引いて、その質問について答えていくというものであった。これは非常に盛り上がる話題が多く、そういった質問のおかげもあってか、知らぬ間に、自己紹介ゲームは終わり、みんなそれぞれに楽しく喋っていた。個々で喋ったり、全体で喋ったりもしたが、それと同じくらい、歌を歌ったり、ダンスをしたりする様子もよく見られた。Sapang Bato High School の生徒が提案したゲームは、日本でいう爆弾ゲームであった。バツゲームとして円の真ん中で誰かからのお

題に答えるといったゲームで、そのバツゲームのほとんどは踊るというものであり、歌ったり、踊ったりするという文化がフィリピンでは盛んだと感じる瞬間がたくさんあった。

交流となると、言語は必然的に英語を話すことになり、PCP メンバーは苦戦する場面もあったが、それでも話はとても盛り上がっていた。また、Sapang Bato High School の生徒たちは、英語がとても上手で、日本とフィリピンでの英語の教育の差を実感した。

最後に、みんなで集合写真を撮り、Facebook を交換し、日本に帰ってからも連絡を取り合えるようにした。ほんの数時間の交流だったにも関わらず、生徒のみんなが我々をあたたかく迎えてくれて、緊張もとけ、高校生に戻ったかのようにとても楽しく話すことができた。

■Holy Angel University での交流・概要

ａ）概要

Holy Angel University（以下 HAU）は 1933 年に設立された、パンパンガ州で最初のカトリック系の私立大学である。市内の主要な土地に 7 ヘクタールの広さのキャンパスが広がり、16、000 人以上の学生が通っていて、地域最大の大学の一つとなっている。管理、アート・デザイン＆建築、ビジネス、通信・情報科学、コンピュータサイエンスと数学、教育、エンジニアリング、人文科学、言語、法律、メディカル＆ヘルスケア、科学、社会科学、観光•ホテル管理などの 14 の学部がある。

ｂ）交流

まず初めに、HAU 側からの大学紹介があった。大学関係者や学生に案内してもらいながら、大学図書館、CSK 劇場、Vicente Manansal 博物館、Kapampangan 研究博物館、Holy Guardian Angel チャペルを見学した。また、実際の英語の授業を見学した。

CKS シアターで開催されたショートプログラムでは、両大学の紹介 DVD を上映し、文化交流活動の一環として、HAU Rondalla によるマンドリンやフォークギターなどの演奏、HAU コラールによる男女混合のアカペラ合唱、フィリピンのフォークや歌謡曲素晴らしい演奏を披露してくれた。

私たちは、ソーラン節を踊ったり、日本のポップ•ソング「上を向いて歩こう」を合唱したり、リコーダーで「桜」とフィリピン国家を演奏した。また、聖天使トラベルサービス（HATS）のイベントに出席したインターンのグループのために、書道の短いデモンストレーションも行った。

最後に、エグゼクティブラウンジで大学側から非公式の歓迎会が開催され、メリアンダをごちそうになり、私達の訪問の締めくくりとなった。

■マニラ及びアンヘレス市でのフィールドワーク

ａ）ピナツボ山・噴火の爪あと

ピナツボ火山は 1991 年に、およそ 500 年ぶりに噴火した。この噴火は 20 世紀最大の噴火と言われている。爆発的な噴火は 15 日間続き、山の標高が 260 メートルも低くなった。火山灰で半分が埋まった教会を訪れた。火山灰の影響はものすごく、撤去作業は今もなお続いている。

ｂ）アエタ族との交流

アエタ族とは、約２万年前にマレー半島を経由してフィリピンに渡来したと言われているネグリード系の先住民族である。縮毛、低身長、黒褐色の肌が身体的特徴とされ、ピナツボ山の噴火により山間部に住めなくなり、政府の用意した代替地に集落を作って生活をしている。日時計を使用した生活が印象的だった。私達が訪れた時、子ども達は元気に道場で空手の稽古に励んでいた。

ｃ）神風特別攻撃隊の記念碑

ここ、フィリピンは神風特攻隊発祥の地である。今回私達は、３つの記念碑を訪れた。石碑には、第二次世界大戦中の大日本帝国軍（当時の日本）のフィリピンでの戦歴について記してあった。ここから飛び立っていった自分たちと同年代の兵士たちが、何を考えていたのだろうかと考えているうちに、胸が痛くなるような気持ちに苛まれた。この日本の「神風」は、歴史上最大の作戦であった。このようなことがもう２度と起こらないよう、平和の象徴としてこの記念碑が建立された。命を落とした多くの人々を悼み、フィリピンの方がこれらの記念碑を今もなお保全してくださっている。

■Duyan Ni Maria Children’s Home of Angeles City での交流

この日は予定していた女子の児童養護施設が改修工事中のため、隣町にある共学の児童養護施設を訪れた。私達が中に入ると、児童達が興味津々でこちらの様子を見ていた。その日は誰かの誕生日だったようで、黒板に“Happy Birthday！”と書かれていた。学生は自己紹介の後、リコーダーを演奏した。その後の名前ゲームは大盛況だった。

児童達はゲームのご褒美のステッカーが気に入ったようで、男の子は車や動物などのステッカーを腕や顔に貼り、嬉しそうに自慢していた。女の子は可愛らしくハートやキラキラしたものを選んでいた。誰が始めたのか、耳たぶにイヤリングのようにハートのステッカーを貼り、メンバーにもつけてくれた。

交流の最後では児童達が Thank you song を歌ってくれて、少ない時間ながらも親し

み合えた交流だった。最初の交流としては最高の出来だったと思う。

別れ際では涙を流す児童もいたり、最後まで手を離さない児童もおり、後ろ髪を引かれる思いの中、お互いの姿が見えなくなるまで手を振っていた。

■ABBC での交流(男子児童養護施設)

初日の朝の訪問では、子ども達が教会に行かなくてはならず、あまり馴染めなかった。特に小さな子どもは英語が苦手で、一方私達の英語もつたないものであったが、互いに身振り手振りでコミュニケーションを取ろうとしていた。子ども達は体を動かすことが大好きで、その日の夕方の交流では、スポーツを通じて、子ども達と打ち解けることができた。

ABBC だけに限ったことではないが、子ども達は本当によく人のことを気遣ってくれる。汗まみれの服を地べたにおいていると、さっとベンチに掛けてくれて、体を動かしている私達に水をすすめてくれる。フィリピンの “hospitality”、すなわち「もてなしの心」を感じることができる。今回の訪問で残念だったことは、天候の関係もあってあまり外で遊べなかったことだ。しかし室内では、彼らはまた違った顔をみせてくれた。子ども達はとにかくカメラが大好きで、私たちのカメラで身の回りのものを沢山撮っていた。このことから、普段学生にとって当たり前のものでも、彼らにとっては違うということに気が付いた。また日本のアニメソングはフィリピンでも流行っていて、ギターで演奏し皆で歌った。子ども達と親密になると自分の部屋を見せてくれた。好きなことや、思い出など、彼らのことを知ることのできる貴重な時間であった。

最終日は目一杯体を動かし、リコーダーやピアニカを吹き、その後に一緒に食事をした。お互いタガログ語と日本語を教えあったり、文化の差についても語り合った。別れの時、ABBC に洗濯機や、リコーダーなどを寄贈した後、彼らがダンスを披露してくれた。実に楽しいひとときだった。

来年、卒業したり、家庭の事情で子ども達の顔ぶれは変わっているかもしれない。しかし、いつかはこの施設から去っていく子ども達が、学生と共に過ごした時間を頭の片隅にでも覚えていてくれたら、と願うばかりである。

２．４．事後活動

【事後活動の内容】

派遣後研修では、報告会の準備や報告書・DVD 作成等を通じた経験の定着を図るための活動である。報告書作成では、まず目次案を作成し、担当を振り分けて、執筆、編集を行った。書式や言葉づかいなど、細かく添削していった。内容の追加、写真の選定、感想文の作成など、時間と労力が必要な作業だった。先生の助言を得ながら、読みやすく良い文章にするために何度も推敲し、やっとの思いで完成することができた。

3 章　フィリピン・フィールドスタディ（PFS）

久保田賢一（関西大学総合情報学部）

3．1．プログラムの概要

国及び地域　：フィリピン共和国・ブラカン州マロロス市、マニラ首都圏マニラ市、
　　東ダバオ州サンイシドロ町
渡 航 期 間　：平成 24 年 8 月 27 日～平成 24 年 9 月 10 日（15 日間）
参 加 人 数　：15 人（4 年 2 人、3 年 13 人）

【プログラムの目的】

本プログラムは、以下の 3 つの能力を育成することを目的としたプログラムである。

①フィリピンの人々と協調しながら活動する力
②英語コミュニケーション能力
③フィリピン現地にある問題について考える力

本プログラムでは、上記 3 つの能力育成を通して、関西大学の長期ビジョンにおける『考動力』ある人材の育成を実現する。具体的には、自らの頭で主体的に考え、自律的かつ積極的に行動でき、地域社会・国際社会においてリーダーシップを取りながら地球規模で発生する問題を解決できる人材の育成を目指している。

【プログラムの特色】

本プログラムの特色は、学生が主体となって活動する点にあり、プログラム全体を通してワークショップ型の活動を取り入れている。本プログラムの構成は、事前活動、現地活動、事後活動に別れており、各段階に学生が主体的に活動できるような活動を取り入れている。

【プログラムの教育・指導体制】

学生に対する教育・指導は、本学担当教員と外部講師の 2 名が行った。フィリピン渡航前には、現地で英会話ができるようにトレーニングを行った。現地で学生は毎日ジャーナルを作成する。ジャーナルは紙媒体として記録し、必要に応じて、教員がフィードバックを行う。帰

国後、学生にはレポート課題を課した。また、事後活動として、教員の指導のもとに報告書を作成し、活動報告会を行った。

３．２．事前活動

【事前活動の目的】

現地での活動を円滑に行うために、事前活動の目的を以下の 3 つに定めた。

ａ）知識導入

現地での会話について深い理解が得られるよう、事前にフィリピンに関する知識導入を行った。知識導入として、フィリピンの歴史・宗教・現地 NGO の活動をテーマとして取り扱った。

ｂ）異文化理解・交流

現地活動をより円滑に行えるように、文化の違いによって生活習慣が異なることなどを理解することや、現地の活動に向けた関係性づくりを目的とした活動を実施した。

ｃ）危機管理

現地での病気や事故に備え、現地で起こりうる病気や事故に対する予備知識を付けることを目的にレクチャーを行った。

【プログラムの危機管理体制】

事前学習の際に、参加学生に対して本学担当教員より、健康維持のためのレクチャーを行った。また、渡航にあたっては必ず大学が指定する保険への加入を義務づけており、本学担当教員らは学生の日常生活におけるカウンセリングをインターネット上で行い、適宜アドバイスなどを行った。

参加学生はブラカン大学内にある 24 時間警備員が常駐するドミトリーに宿泊する。参加学生が現地滞在時に体調不良を訴えた場合は、速やかにブラカン大学担当教員がブラカン大学内の医務室で受診させ、必要によっては隣接するブラカン州のメディカルセンターにて受診させることができる。さらに状態が思わしくない場合は、担当教員付き添いのもと、首都マニラにあるマカティ・メディカルセンターまたは日本人会病院にて受診させる。盗難等トラブルに巻き込まれた際も、ブラカン大学担当教員が対応できる体制が整っていた。

さらに現地で使用可能な携帯電話を学生に携帯させ、ブラカン大学担当教員と密に連絡を取り合うことができるようにしており、重大な問題発生時には携帯電話から本学担当教員に直接連絡し、対応を指示することができる体制を整えている。

フィリピンでの台風発生時の体制としては、安全が確保されるまで、学生を他より高い位置にある大学のドミトリーに待機させることができる。さらに、大学全体として、危機管理規程を制定しており、学長を総括責任者とする危機管理体制を構築している。生命に関わる事

態が発生した場合には、危機管理委員会を設置し、必要な対応・対策を講じることとなっている。

【事前活動の詳細日程】

事前活動の日程と内容

実施回	日程	活動内容
1 回	4／13（金）	オリエンテーション
2 回	4／18（水）	活動の目的設定
3 回	4／20（金）	フィリピンに関する学習（1）【フィリピンの歴史】
4 回	4／27 日（金）	フィリピンに関する学習（2）【フィリピンの宗教】
5 回	5／2（水）	フィリピンの現地 NGO 代表者による講演会
6 回	5／11（金）	フィリピンに関する学習（3）【フィリピンで活動する NGO】
7 回	5／18（金）	異文化理解に関するワークショップ（1）
8 回	5／25（金）	異文化理解に関するワークショップ（2）
9 回	6／1（金）	現地大学や現地訪問先に関する説明
10 回	6／8（金）	現地大学生との Skype 交流
11 回	6／15（金）	危機管理（安全学習、保健衛生）に関するレクチャー
12 回	6／22（金）	渡航に向けた準備（1）
13 回	7／6（金）	渡航に向けた準備（2）
14 回	7／13（金）	渡航に向けた準備（3）
15 回	7／20（金）	渡航に向けた準備（4）

【事前活動の内容】

事前活動では、現地での活動を円滑に行うために、知識導入、異文化理解・交流、危機管理に関する内容を全 15 回に分け、各回 90 分の事前学習として取り扱った。事前学習では、参加者が主体的に行う、参加型学習の形態で行った。また、危機管理に関する学習としては本学担当教員によりレクチャーを行った。以下、事前活動の詳細について記す。

ａ）知識導入

フィリピンにおいて活動を行う上で、フィリピンに関する知識は必ず必要となる。知識導入を事前にしっかりと行うことで、現地理解や異文化理解につながる。そのため事前学習では、フィリピンの歴史・宗教・現地 NGO の活動を中心テーマとして、調べ学習を行った。知識導入の授業では、60 分でフィリピンに関して参加学生が調べた内容を発表し、それに関して学生間でディスカッションを行い、残りの 30 分で本学担当教員からレクチャーを行う形とした。

フィリピンの歴史の回では、スペイン統治時代やアメリカ統治時代、日本の占領下のことなどを学び、そうした歴史が現在のフィリピンの文化に深く影響していることを共有した。フィリピンの宗教の回では、現地の学生との宗教観に関するディスカッションを想定し、参加者同士で宗教について意見交換をし、宗教について考える回となった。現地 NGO の回では、現地で活動する NGO からフィリピンの現在抱えている問題について知る機会となった。

ｂ）異文化理解・交流

異文化に対する抵抗感や理解の促進を深めるために、異文化理解についての学習としてフィリピンの現地大学生と交流する機会を設けた。交流にはテレビ会議を用い、フィリピンのブラカン大学の学生とビデオチャットを行った。ビデオチャットでは、学生らは事前に用意していた学生生活や日常生活に関する質問をお互いに行った。日常的な場面を比較した上で、異文化に対する考え方や異文化を理解する態度についての指導を行った。

ｃ）危機管理

安全教育では、現地の衛生状況や、水道水、生ものの危険性について指導を行った。また、治安の面では、道の歩き方や地域毎の危険性に関する指導を行った。

３．３．現地活動

【現地活動の目的】

現地活動では、大学や NGO の訪問を通して異文化に触れ、英語で会話し、社会問題に実際に触れることで、異文化間で協調する力、英語コミュニケーション力、地球的視野の獲得を目的とした活動を行った。

【現地活動の詳細日程】

現地での活動日程と内容

日程	内容
8／27（月）	入国
8／28（火）	大学訪問①（訪問先：Bulacan State University）
8／29（水）	
8／30（木）	フィリピン現地原住民文化体験
8／31（金）	大学訪問②（訪問先：Technological University of Philippines）
9／1（土）	NGO 団体訪問①（訪問先：Dynamic Teen Company）
9／2（日）	NGO 団体訪問②（訪問先：バティスセンター）
9／3（月）	大学訪問③（訪問先：Technological University of Philippines）
9／4（火）	日本大使館訪問
9／5（水）	マニラ～ダバオ移動 養護施設訪問（訪問先：House of Joy）
9／6（木）	House of Joy の近隣の高校訪問
9／7（金）	House of Joy にて遊具づくり（イカダ）
9／8（土）	House of Joy にて日本文化の紹介
9／9（日）	House of Joy にて交流会
9／10（月）	活動終了・帰国

【現地活動の内容】

現地活動として主に大学、NGO、養護施設を訪問した。その活動の詳細について以下に記す。

■大学訪問

大学訪問では、都市部の大学 2 校と田舎にある大学 1 校の計 3 校を訪問した。それぞれの大学で現地学生に対して自分たちのことや日本の文化について紹介するプレゼンテーションを行った。現地大学生との交流では、英語を使って会話をし、お互いにコミュニケーションを取り合うことで実践的な英語コミュニケーションを行った。また、お互いの文化への理解を深めるために現地大学生に対してワークショップを行った。ワークショップ内では、両国の大学生が自分自身の大切なものについて議論することで、国による価値観の違いを理解することが出来た。

3 校の大学訪問を通して、実際に現地の大学生と交流し、ワークショップを行うことで、異文化間で協調しながら活動する力、英語コミュニケーション力を養うことができた。

＜学生の感想＞
『学生間のＧＡＰを知るためのＷＳを考えて、今回は英語で発表をしないといけなかったのでひたすらその練習。みんな慣れない英語での発表だったので練習はしっかりと行いました。ヤソのＰＰＴがカッコよすぎてＷＳは大成功、発表する僕らも見やすいＰＰＴのお陰でなんとか全員華麗な英語の発表が出来ました！』
『出てきた答えの奥底をさらに会話の中で聞き出したことによって、より深いフィリピンの事情や国民性を知ることが出来ました。』
『全員現地学生と仲良くなって、会話をする機会もありＦＷの序盤に英語に慣れることにも成功しました。』

■NGO 訪問
NGO 訪問では、計 2 つの団体を訪問した。一つ目の団体 Dynamic Teen Company は、貧困地域での教育支援を行っている団体である。訪問した際には、代表者の方に話を伺うことができ、団体の創設の背景やどのような思いで活動を行っているのかをインタビューした。また、現在の団体の活動における問題点や課題もインタビューから聞くことが出来た。その後、実際に団体の活動に参加し、貧困地域の子ども達に対し行われている教育をその場で体験することができた。
二つ目の団体バティスセンターは、日本とフィリピンにある女性問題を取り扱う活動している団体である。訪問した際には、団体の担当者の方から、団体の活動や女性問題が起きた背景についての説明を受け、団体を問題に対する理解を深めた。そのあと、昼食の席で問題の当事者と交流し、実際に起こっている問題について英語を使って質問をし、問題への理解を深めた。
二つの団体の訪問を通して、現在現地で起こっている社会問題に実際に取り組んでいる人たちとの交流することができ、地球的視野で考える力を養うことができた。

＜学生の感想＞
『私たちがまず視察したのはＤＴＣ　のオフィスであり、そこはスラム街の一角にある住宅とは思えないほど綺麗な建物であり、そこにはたくさんの本が並んでいました。しかし、その本はとても子どもたちが読めるような内容ではありませんでした。このように、ニーズにそぐわない支援が現状としてありました。』
『授業見学を行いました。そこでは子どもたちが、ビニールシートの上に座り、一個の黒板に向かって楽しそうに授業を受けていました。そこでの授業内容は日本と同じ科目としては算数があり、違っていた面は、買い物の仕方などといった、基本的な人間生活において必要な

こと、そして聖書の読み聞かせを行っていました。日本では考えられないけれど、このような教育が貧困地では行われていないことに驚きました。』
『ＤＴＣとバティスが連続で続いた怒涛の二日間でしたが、事前学習の効果もあって、知識をたくさん得ることが出来ました。フィールドワークの中でも特に濃い二日間を過ごすことができたと思いました。』

■養護施設訪問
フィリピンにて日本人が運営している養護施設を訪問した。この施設には 5 日間滞在し、生活を共にし、子ども達と交流をした。数日間共に過ごすことで子どもたちの生活を経験し、そこに住む人たちやその地域について学んだ。Japanese Day と呼ばれる日本の文化や遊びを子ども達に伝える会を催し、子ども達に日本について学んでもらった。また、子ども達の使う遊び道具（イカダ）を学生ら全員で製作し、その遊具を施設へ贈呈した。また、子ども達に対して、イカダの使い方を教えた。
養護施設訪問を通して、子ども達が置かれている状況や周囲の環境を学んだ。また、そんな状況の中でも、笑顔でたくましく生活している子ども達との交流を通して、地球的視野で考える力を養うことが出来た。

＜学生の感想＞
『皆それぞれにわし子（私達が豚に付けた名前）の最後の姿を見届け、順番に皮を剥いで、皆で美味しく頂きました。普段無意識に近い感覚で言っている「いただきます」の言葉の重み、大切さを改めて考えさせられました。』
『私達にとって不慣れな事だったので、完成までに一杯時間がかかってしまったし、現地の方みたいに綺麗なイカダは作る事が出来なかったけど、子ども達はと-----っても喜んでくれて、子ども達の 100%の笑顔を見られただけで、本当に頑張って良かったなぁと思いました！』
『現地では、学校訪問、ホームステイ、Japanese day などたくさんの活動がありましたが、基本は「子ども達と遊ぶこと」HOJ の烏山さんがおっしゃられた言葉で「見えない愛を見える行動で」というものがあります。何かしたいと思っている気持ちを思っているだけじゃなく、行動に移すこと、僕たちの場合はイカダを作って、子ども達に喜んでもらうということでした。そのような活動を通して少しでも子ども達に愛が伝わっていたらいいなと思います。』

３．４．事後活動

【事後活動の目的】
事後活動では、現地での活動を振り返り、学生らの学びを深めることを目的として活動を

行った。事後活動においても、報告会の準備や報告書の作成は学生が主体的に活動を行った。

【事後活動の詳細日程】

事後活動の日程と内容

実施回	日程	内容
1 回	9／25（火）	現地活動の振り返り、事後活動に向けた役割分担
2 回	10／2（火）	学内報告会①（次年度のプログラム参加者対象）の準備
3 回	10／16（火）	学内報告会①の実施
4 回	10／30（火）	学内報告会②（全学部全学年対象）の準備
5 回	11／3（土）	学内報告会②の実施
6 回	11／4（日）	学内報告会②の実施
7 回	12／1（土）	学外報告会①（プログラム参加者の保護者対象）の実施
8 回	12／4（火	活動報告書のとりまとめ・構成の確認
9 回	12／11（火）	新メンバーとの合同ワークショップの準備
10 回	12／16（日）	新メンバーとの合同ワークショップ
11 回	12／18（火）	活動報告書の完成
12 回	1／8（火）	学外報告会②（小学生～高校生対象）の準備
13 回	1／12（土）	学外報告会②の実施
14 回	1／15（火）	次年度に向けた修正案の作成
15 回	1／19（土）	新メンバーへの引き継ぎ

【事後活動の内容】

事後活動、現地での活動を終えた 9 月下旬から開始した。事後活動の内容として主に報告会の開催、報告書の作成を行った。報告会は様々な対象に対して行った。また年間の活動を振り返り、次年度に向けた活動の修正案を提案し新メンバーへの引き継ぎも行った。

■報告会

現地で活動する以前から帰国後に報告会を行う事は決定していた。そのため、現地での活動期間中も「伝える」という事に意識を置いていた。伝える対象は異なっても、来てくれた人たちに対して活動を通して気づいたことや学んだことを「伝える」事で「何かを変えるきっかけにしてほしい」という事を共通の目的として報告会を行った。

報告会の内容として、学生らが現地の大学生との交流や NGO 団体を訪問して話を聞いた

事など、活動の中で感じたことや学んだことを中心に取り扱った。下級生や国際協力に興味のある大学生には学生らの経験を伝えることで、同世代でもさまざまな活動が出来るという事を伝えることが出来た。また、学外報告会では学生らの保護者を招待し、学生らがどのような活動をしてきたのか、またその活動を通してどのように成長したのかを直接伝えた。外部報告会は、普段の活動を支えてもらっている保護者に対して感謝を述べる場にもなった。このように対象を変え、複数回報告会を行う事で何度も活動を振りかえる機会を持つことができた。

■報告書の作成

事前・事後活動を含む本フィリピンブラカンプログラムを通して学んだことを記録として残すために、報告書の作成を行った。事前学習から全ての活動を振り返ると、活動中にはわからなかった気づきも見つけることが出来た。報告書には、事前準備でどのような事を行ったのか、活動中の活動中の日々の学びや感想を主としてまとめた。このように記録を残すことは、次年度以降の活動の参考にもなる。また、報告会にて他者の意見から気付いたことを踏まえて、学生らは個人個人の感想としてまとめた。事前学習から事後学習までを通して振り返ることで活動前後での変化に気づくことが出来た。

３．５．まとめ

本プログラムを振り返り、学生らの変化およびプログラムの長所に関して以下に記す。

■学生らの変化

<u>事前活動</u>

事前活動を始める前は、英語を使って会話をすることに抵抗や苦手意識がある学生が多かったが、実際に授業で英語を使う経験をしていくことで、英語で会話することに抵抗感が薄れ、英語コミュニケーション力が向上していると感じた。異文化理解の学習を通して、活動先や海外の異なる文化に触れることで、現地に行く前の段階から、異文化に対しての関心が増し、異文化間で協調しながら活動するための知識を身につけることが出来た。

事前活動全体を通して、現地活動を行う責任や意欲を向上し、活動を円滑に行うため

の知識や能力を育成することが出来た。

現地活動

現地での活動を通して、英語で現地の大学生や NGO スタッフと交流することで、英語コミュニケーション力が身に付いた。また、現地の人との交流やワークショップを通して、異なる文化の人たちと話し、共に考えることで、異文化間で協調しながら活動する力につながった。NGO や養護施設を実際に訪問することによって、海外で行っている社会問題に実際に触れることができた。その経験から学生らにとっては、以前より広い視野で社会問題を考えるきっかけとなった。その点から、地球的視野で考える力が身に付いていると感じた。

現地活動全体を通して、自分の国以外の人、文化、社会問題に触れることで、学生自ら自分自身を振り返り、今後の行動を考えるきっかけとなっていた。

事後活動

報告会、報告書と、学生自身の経験を他の人たちに伝える活動を行うことで、現地での活動を学生ら自身で振り返ることができていた。活動を振り返ることで、学生ら自身が学んだことを再度考えることが、より深い理解に繋がっていた。また、学生らの学びを他の人に伝えることで、学生達とは違った視点からの意見や感想を頂くことができた。多様な方からの言葉で、学生自身の新たな視野の獲得につながった。

■プログラムの長所

本プログラムの長所としては学生が主体的に活動を計画し、参加できたことが挙げられる。その要因として挙げられるのがワークショップ型の活動を行った事だ。学生は、「事前学習」「現地での活動」「事後学習」の三つの段階において多くの場面で講義型のように知識を伝達されるだけという形を取らず、自ら問題について考える機会を多く持つことが出来た。学生が「プログラムを通して自己の学びについて考える機会が増えた」と述べているように、本プログラムは、学生らに学びに対する主体性を持たせるきっかけとなった。

４章　カンボジア・協働活動プログラム（CCAP）

久保田賢一（関西大学総合情報学部）

４．１．プログラムの概要

国及び地域　：カンボジア・シェムリアップ州シェムリアップ
渡 航 期 間　：平成 24 年 8 月 7 日～平成 24 年 8 月 17 日（11 日間）
参 加 人 数　：12 人（院生 1 人、4 年 3 人、3 年 1 人、2 年 5 人、1 年 2 人）

【プログラムの目的】

関西大学では2007年度に策定した長期ビジョンにおいて、「『考動力』ある人材の育成」を掲げている。本プログラムは、その理念をグローバルな視野から具体化し、地域社会や国際社会でリーダーシップを取りながら地球規模で発生する問題を解決することができる「考動力あふれる人材」の教育プログラムのモデル化をめざす。

【プログラムの特色】

本プログラムの特色は、以下の 3 点である。

①本学全学部・全学年の学生を対象に参加者募集を行っていること。全学部・全学年を対象とすることにより、年齢・専門知識など、より多様な学生を集めることが可能であり、普段は関わることがない学生と関わり人間関係の幅が広がると共に、活動中も多角的な視点から議論することができたと考える。

②カンボジア滞在中、本学の学生とパニャサストラ大学の学生が協働して活動を行うことである。そのことにより、両国の学生が、お互いの国の問題を共有することができると共に、異文化理解やコミュニケーション能力の向上も図ることができる。

③活動中の相手とのコミュニケーションは全て英語を使用する。パニャサストラ大学では、授業を全て英語で行っているため、学生一人一人の英語の能力が高い。そのため、交流に参加した本学学生が実践的に英語を活用する有意義な機会となる。

【年間スケジュール】

プログラムの年間スケジュール

月	内容
4 月	フィールドワークの内容決定
5 月	フィールドワーク参加者の募集
6 月	参加者の選抜 事前活動（詳細後述）開始
7 月	事前活動
8 月	カンボジアへ渡航（詳細後述）
9 月	事後活動（詳細後述）開始
10 月	学習ポートフォリオの提出
11 月	関西大学の学園祭にて活動報告会の実施
12 月	フィールドワーク合同報告会の実施
1 月	地域連携による海外ボランティア学習交流会への参加
2 月	活動報告書の作成
3 月	活動報告書完成

【プログラムの教育・指導体制】

本プログラムでは、参加学生がフィールドワーク中に感じたことや、考えたこと、学んだことをジャーナルとして書き残し、それを学習ポートフォリオとして SNS 上に蓄積した。学習ポートフォリオには、教員だけでなく、参加学生全員がアクセスできる仕組みになっており、お互いの学習ポートフォリオを読んだり、内容について議論する時間を設けたりすることで、学習効果の向上を図った。また、プログラム終了後、活動報告書の作成や報告会の実施をするための資料としても、学習ポートフォリオを使用した。

【プログラムの危機管理体制】

本プログラムでは、渡航前の事前活動の際、参加学生に対して本学担当教員より、安全確保、健康維持のためのレクチャーを行った。そして、渡航にあたっては必ず教員が指定する保険への加入の義務付けを行った。また、A 型肝炎ワクチンなどの予防接種を奨励した。さらに、本学担当教員らは、学生の日常生活におけるカウンセリングをインターネット上で行い、適宜アドバイスなどを行った。

カンボジアでは、参加学生は、パニャサストラ大学の教員が紹介したホテルに滞在した。参加学生が現地滞在時に体調不良を訴えた場合は、速やかにパニャサストラ大学の担当教員がロイヤル・アンコール・インターナショナル病院にて受診させることができるように、地図

や車などの環境を整えた上で活動に臨んだ。

また、担当教員同士でインターネットを活用し、密に連絡を取り合いながら、現地の疾病や災害、事故などの情報共有を図った。

４．２．事前活動

【事前活動の目的】

本プログラムでの事前活動では、以下の２点を目的に事前活動を実施した。

①参加学生が意欲的に活動に取組むための動機づけを行う

②現地でフィールドワークを実施する上での、国際協力や異文化理解、危機管理に関する予備知識を身につける

【事前活動の詳細日程】

事前活動の日程と内容

実施回	日程	内容
1 回	6／9（土）	オリエンテーション
2 回	6／13（水）	講義（カルチャーショック論）
3 回	6／20（水）	活動ビジョンの設定
4 回	6／27（水）	講義（国際協力論）
5 回	7／4（水）	現地連携団体の説明
6 回	7／11（水）	講義（支援の方法） テレビ会議システムを使った交流
7 回	7／14（水）	合宿（英語に関するワークショップ）
8 回		合宿（フィールドワークの目標に関するプレゼンテーション）
9 回	7／15（日）	合宿（異文化理解に関するワークショップ①）
10 回		合宿（異文化理解に関するワークショップ②）
11 回	7／18（水）	合宿の振り返りと、目標の再設定。現地での活動準備
12 回	7／25（水）	客員講師による講演 （東南アジアの紛争影響地域に対する日本の支援）
13 回	7／28（土）	渡航に向けた準備
14 回	8／1（水）	渡航に向けた準備
15 回	8／3（金）	渡航に向けた準備

【事前活動の内容】

カンボジアにおけるフィールドワーク（以下、カンボジアフィールドワーク）を実施するにあたり、

事前活動として、全 15 回（1 コマ 90 分）の事前学習や、日本国内で SNS やテレビ会議システムを活用したカンボジア学生との交流を実施した。事前学習の詳細は上記の表の通りである。

SNS を使った交流では、Facebook を使った。パニャサストラ大学の学生と関西大学の学生が、Facebook 上で交流を行うためにコミュニティページを開設し、そこに自己紹介の動画や、お互いの国を紹介する写真の投稿やチャット交流を行った。また、不定期的にテレビ会議システムである Skype を使った交流も実施した。全ての交流は英語により実施された。

これらの取組により、学生の活動に対する動機付けを行うと共に、10 日間という短い期間で、カンボジアの学生と日本の学生が、打ち解け合い協働できるための環境作りをすることができた。

次に事前学習についてである。事前学習ではカンボジアで活動を行うための予備知識を身につけると言うことに主眼を置き、国際協力、異文化理解、危機管理という 3 大項目を中心に実施した。また、各講義後は、参加学生はその日学んだことや、与えられた課題を、ジャーナルとしてまとめ、SNS 上に学習ポートフォリオとして記録・蓄積を行った。また、学習の振り返りを行えるだけでなく、他の学生のジャーナルを読みコメントを書き込むことで、インフォーマルな場でも学生同士がディスカッションできる環境を作ることができた。以下に、国際協力、異文化理解、危機管理のそれぞれに関する詳細を記述する。

■国際協力

3 つの講義やワークショップを通して、国際協力に関する基礎的な知識を学習した。内容は、1)被災地支援と国際協力、2)これまで国際協力としてどのような支援が行われてきたのか、3)東南アジアの紛争影響地域に対する日本の支援である。また、日本がどのような国際協力を行っているのか、カンボジアにはどういった NGO があり、どのような活動を行っているのかということについても学習し、支援の在り方や自分たちができる国際協力について議論を重ねた。

下記は、事前学習で行った国際協力に関する講義の一例である。

■講義テーマ：慈善型開発・技術移転型開発・参加型開発
■講師：長谷川伸
■目的：開発の３類型（慈善型開発・技術移転型開発・参加型開発）の概要をつかみ、慈善型開発→技術移転型開発→参加型開発と国際協力の主流が変遷してきた理由を理解する。
■タイムテーブル
1．レクチャー（70 分）
　ａ）慈善型開発（20 分）
　ｂ）技術移転型開発（20 分）
　ｃ）参加型開発（30 分）
2．質疑応答・ディスカッション（15 分）
3．感想ラベル記入（5 分）

■異文化理解

カルチャーショック論をトピックとした講義を受け、異文化に出会った際にどのように対処すべきかを学んだ。また、異文化理解に関するワークショップでは、日本や自分自身を伝えることの難しさや、フィールドワークでの異文化を捉える視点の定め方を学んだ。

活動の場であるカンボジアについて歴史や文化、経済状況についての学習は、個人単位で行った。また、参加学生は、「カンボジアでの小学校建設ラッシュについてどう思うか」というテーマでレポートをまとめ、参加学生同士で繰り返し議論を行った。自分の意見に対する論証を集めることで、カンボジアの歴史的背景や支援の現状、国際協力のあり方等について各々が知識を深めた。

■危機管理

海外、特に東南アジアで気をつけるべき伝染病とそれらへの対策法を紹介・説明した。緊急連絡先の確認や、万が一のけがや病気にかかった際に診療を受けることができる病院についての説明や、渡航前に受けておくべき予防接種、加入するべき保険についても説明を行った。また、食べ物や飲み物、カンボジアでの基本的な生活の流れなどについても説明を行い、参加学生が十分な準備をしてからカンボジアに渡航できるようにした。

４．３．現地活動

【現地活動の目的】

カンボジアのパニャサストラ大学の学生と協働し、現地 NGO や農村部小学校での社会貢献活動に参加した。活動を通じて a)異文化間で協調しながら活動する力、b)英語コミュニケーション力、c)地球的視野で考える力の育成を目的とした。

【現地活動の詳細日程】

現地活動の日程と内容

日程	内容
8／6（月）	入国
8／7（火）	オリエンテーション、パニャサストラ大学の学生との顔合わせ
8／8（水）	現地 NGO フィールドサイト、農村部小学校訪問
8／9（木）	トンレサップ湖見学
8／10（金）	児童養護施設への訪問
8／11（土）	現地 NGO との活動、農村部小学校での活動
8／12（日）	農家生活体験
8／13（月）	アンコールワット遺跡群見学
8／14（火）	活動のふり返り
8／15（水）	活動予備日
8／16（木）	活動予備日
8／16（金）	帰国

【現地活動の内容】

■現地 NGO との活動

Education for Population Support Foundation (EPS) 、ABC and Rice などの現地 NGO の活動フィールドを訪問し、NGO の活動の内容や仕組みについての説明を受けた。また、EPS が支援する小学校を訪問し、絵本を使ったワークショップを実施したり、小学校周辺のコミュニティを訪問し、住民へのインタビューを行ったりした。さらに、丸一日農村家庭に滞在し、農村生活体験を行った。ABC and Rice では、同団体が運営する学校の校舎のペンキ塗りやそこに通う子ども達との交流を行った。

＜参加学生の感想（学習ポートフォリオより）＞

『農村で人々にインタビューをして、カンボジアの農村部の生活を知った。物を手に入れるた

めに物々交換をよくしているということを聞いて、日本のはるか昔のような生活をカンボジアの農村ではまだ続けているのだと思い、衝撃を受けた。（法学部 2 年）』
『農村生活を 1 日体験したときに、受け入れてくれた家庭は私たちのために貴重な鶏を殺し、調理して私たちに振る舞ってくれた。それ以外にも手厚くもてなしてくれて、お客さんを受け入れるということがどれだけ彼らにとって特別なことなのか分かった。（商学部 2 年）』

■パニャサストラ大学の学生と交流

カンボジア現地の大学であるパニャサストラ大学の学生は、カンボジアでの活動期間中の全てに参加し、共に活動することで交流を深めた。活動期間中に学生の家庭へのホームステイを経験することで、日常生活での関わり合いを持つ機会を設けた。また、活動期間後半にはそれまでの活動を振り返り、ディスカッションや意見交換を行うことで、お互いの社会が抱える問題邸についての考え方の相違点や類似点についても理解することができた。

＜参加学生の感想（学習ポートフォリオより）＞
『カンボジアの学生は自国の文化（特に宗教）、政治のことについてとても良く知っていた。私も日本の政治のことについて聞かれたが、政治への知識が乏しかった上、英語という言葉の壁もあり、全然うまく伝えられることができなかった。カンボジアの同年代の人との交流を通して自分を含め日本人がいかに自国への知識が乏しいか思い知った。（経済学部２年）』
『ホームステイでは、シャワーが出なかったり、出たとしても冷水だったり、トイレに紙がなかったりと、生活面で日本と違うところが多々あり、少し不便に思うこともあった。でもホストファミリーからのおもてなしはとても厚く、私を家族の一員のように扱ってくれたのがとても印象的だった。（経済学部 4 年）』

■農村部小学校・児童養護施設への訪問

農村部にある小学校を訪問し、清掃活動や、子どもたちの爪切りや洗髪を行った。また、他の小学校では絵本を使ったワークショップを行うなどして小学生との交流を図った。また、現地 NPO が運営する児童養護施設を訪問し、植林活動を行ったり、子ども達やスタッフへインタビューしたりし、カンボジアの社会問題について理解を深めた。

＜参加学生の感想（学習ポートフォリオより）＞
『カンボジアの小学生は、十分な教科書も持っておらず、今にも崩れてしまいそうな校舎の中で、熱心に勉強していて、私が小学生の時はこんなに一生懸命に勉強したかな、と少し情けない気持ちになった。（法学部 2 年）』

『孤児院の子どもたちは、家族がおらず寂しく暮らしているのかな、と思っていたが、実際孤児院に訪問すると子どもたちは常に笑顔で、人懐っこくて、元気いっぱい遊んでいて、ひとりひとりがとても輝いていた。とても衝撃だった。（外国語学部 3 年）』

４．４．事後活動

【事後活動の目的】

カンボジアフィールドワークに関する報告書の作成や報告会、座談会の実施により、フィールドワークでの経験を第三者へ発信すること、また、自分たちの活動をふり返り言語化することで、自らが得た学びを論理的・体系的に整理することで、体験を学習へと繋げることを目的とした。

事後活動の日程と内容

実施回	日程	内容
1 回	9／25（火）	TOEIC 試験
2 回	10／3（火）	学習ポートフォリオの完成
3 回	10／10（火）	関西大学学園祭での「フィールドワーク報告会」実施準備
4 回	10／17（火）	関西大学学園祭での「フィールドワーク報告会」実施準備
5 回	10／24（火）	関西大学学園祭での「フィールドワーク報告会」実施準備
6 回	11／3･4 日（火･水）	関西大学学園祭での「フィールドワーク報告会」実施
7 回	11／7（火）	フィールドワークムービー作成
8 回	11／14（火）	フィールドワークムービー作成
9 回	11／21（火）	「フィールドワーク合同報告会」実施準備
10 回	11／28（火）	「フィールドワーク合同報告会」実施準備
11 回	12／1（土）	フィールドワーク合同報告会
12 回	12／11（火）	カンボジア学生受け入れ手伝い
13 回	12／18（火）	「地域連携による海外ボランティア学習交流会」発表準備
14 回	1／8（火）	「地域連携による海外ボランティア学習交流会」発表準備
15 回	1／12（土）	「地域連携による海外ボランティア学習交流会」

【事後活動の内容】

プログラム終了後、参加学生は事後活動として、教員と院生の指導の下フィールドワークのムービー作成や、学内外において活動報告会を実施した。また、それらの報告内容に対し、教員から反省やアドバイスなどのフィードバックを行った。

■フィールドワークムービー作成

フィールドワーク中に撮影した写真を使い、1 人 3~4 分のショートムービーを作成した。このムービーでは、参加学生が活動中に感じたことや学んだこと、伝えたいメッセージなどを盛り込み、SNS 上で共有するだけでなく、後の報告会などで使用した。

■報告書作成

参加学生は、フィールドワークについての報告書を作成した。訪れた団体や行った活動ごとに、訪問・活動目的や活動内容、それらから学んだこと・感じたことなどについてまとめた。

■報告会実施

参加学生はフィールドワーク終了後、学内外で 3 つの報告会を実施した。大学生のみでなく、社会人や高校生も対象とした。これらの報告会を通し、参加学生は自分たちの活動にどのような意味があったのか、何ができて、何ができなかったのか等について改めて整理し、第三者に伝えることで自分たちの活動や意見を体系化した。

４．５．まとめ

ここでは、本プログラム全体を通じての所感を述べる。まず、本プログラムの開始時の、参加希望者を募る際、大々的な告知を行ったわけではないが、応募してきた学生の数は実施者側の予想を大きく超えた。そのため、参加者選考ではグループディスカッションを実施し、学生の態度や積極性、論理的思考力などを図った。ここでも学生の意識の高さが見られ、活発なディスカッションを見ることができた。結果として選ばれた 9 名の学生であったが、これまで使ったことのない SNS ツールの活用や、アカデミックな文章作成においては各々が難しさを感じているようだった。しかし、事前学習を通して継続的に SNS を使用したり、小論文を課題として提出させたりする事で少しずつ改善されていった。英語に関しても苦手意識を持つ学

生が多くいたが、事前に行ったオーラルコミュニケーションワークショップの成果もあってか、現地では英語に慣れないながらも、普段からなんとかコミュニケーションを取ろうとする姿勢が多く見られた。しかし、ディスカッションの場になると未だに積極的に話すことができない学生がほとんどであった。そういった語学面も含め、多くの学生が悔しさや無力感を日本へ持ち帰ったようである。語学面でのサポートもこれからの大きな検討材料である。

個人がフィールドワークで感じた思いを綴ったムービー作成ではその感情が上手く表現されていた。フィールドワークの意義や自身の学び・成長を強く感じており、報告会では力強いメッセージを込め、他人へのきっかけ作りができたらと奮闘した。また、報告会自体の企画や運営からも責任感やマネジメントを学ばせることができた。事前学習からフィールドワーク、事後学習を通して随時に参加者の成長が見られた。

本プログラムの長所は、以下の 3 点である。

１）参加対象が全学の学生であること

全学を対象とすることにより、異なった専門知識をもつ学生を集めることが可能になる。多様な知識を持つ学生が集まることにより、活動に幅が広がると考えられる。実際に、SNS 上で行った議論では、各々の背景や知識を生かし、様々な知見からの意見やアイデアが多く見られ、活発な議論が展開された。

２）事前・事後学習のプログラムが充実していること

事前学習が充実した内容であるため、参加学生は精神面でも知識面でもしっかりとした準備を行った上でフィールドワークに参加できた。カンボジアの歴史・現状はもちろん、国際的な支援の問題点や異文化理解に関する講義・ワークショップを通して、実際のフィールドワークで見るべき視点が確立され、異文化へ柔軟に対処することができた。また、グループワークや合宿などを通し、参加学生間で良好な人間関係を作り上げたことで、現地でのより深い学びや活動に対する不安の軽減がなされた。事後学習では、多くの報告会の実施やムービー・報告書の作成などにより、第三者に自らの体験を伝えた。このことにより、現地での体験を整理し、深い学びへとつなげることができた。

３）学生が主体となって企画・運営すること

本プログラムでは全ての企画・運営を教員が全て行うのではなく、参加学生にある程度の裁量を与え、学生同士の話し合いによって活動内を決定させた。その結果、院生や 3、4 回生の高学年の学生が責任感を持ち活動に取り組むことができた。また、高学年が活動に取り組む姿勢は 1、2 回生にとっては、これからどのように学生生活を充実させていくのかという、よきロールモデルになっていた。このように、本プログラムを通じ、高学年の学生が低学年をまとめながら活動を進めていく、学生主体のプログラム運営の基盤が構築された。

5 章　実践的英語コミュニケーション能力育成に向けた取り組み

Bert Kimura（University of Hawaii）

5．1．プログラムの目的と特徴

実践的英語コミュニケーション能力育成に向けた取り組み（以下、英語実践プログラム）では、プログラム全体の目的の一つである「英語コミュニケーション能力の育成」を目指したプログラムである。具体的には、渡航前の事前学習とて英語でのグループディスカッションを基本とし、プログラム全体を通して実践的な英語コミュニケーション能力を向上するトレーニングを取り入れ、現地を訪れた際、積極的に英語でコミュニケーションを取るための準備をおこなった。そして、帰国後も事後学習を行い、現地での学習をより定着させるよう取り組んだ。以下に具体的な活動項目を記す。

①英語によるディスカッションの手法
②英語によるディベート大会の実施
③英語でのプレゼンテーションの手法
④改題大学生とのテレビ会議や SNS 上での動画メッセージ(ムービー)の交換
⑤現地大学と合同でワークショップを計画・実施する
⑥英語ジャーナルの書き方
⑦英語によるアカデミックディスカッション

5．2．活動内容

英語実践プログラムは、渡航前の事前学習と帰国後の事後学習という 2 つの段階で実施した。また、プログラム成果の評価方法として、国際ビジネスコミュニケーション協会が実施している TOEIC 公開テストの参考書から問題を作成し、英語実践プログラム開始時と終了時に英語テストを実施した。2 つのテストから、学生が獲得した点数の比較し、実践成果の評価を試みた。また、学生は SNS 上に授業毎に学習の記録を蓄積していたものも、評価の資料として使用した。以下に具体的な授業内容と活動内容の説明を行う。

英語実践プログラムでは、グループディスカッションを基本とし、学生の日常内容を取り上げることで実践的な英語コミュニケーション能力の育成を行った。事前学習の前半は、SNS や Skype など ICT を活用し、コミュニケーション能力の育成を行った。テキストメッセージでのや

り取りや自己紹介ムービーの交換などを、SNS を通して行うことで、国内で活動を行いながらも、海外（渡航先）と繋がっているということを学生が意識できるようにした。また、授業内容も英語でのグループディスカッションやプレゼンテーションの基本的な力が自然に身につくよう工夫した。

実施回	前期		後期	
	授業日	テーマ	授業日	テーマ
1 回	4/13(金)	自己紹介、他己紹介	10/5(金)	英語ジャーナルの作成 1
2 回	4/18(水)	自国紹介	10/12(金)	英語ジャーナルの作成 2
3 回	4/20(金)	ディスカッション手法	10/19(金)	英語ジャーナルの作成 3
4 回	4/27(金)	ディベート体験	10/26(金)	テレビ会議を活用したフィリピン、カンボジアとの交流 1
5 回	5/2(水)	SNS によるコミュニケーション	11/2(金)	テレビ会議を活用したフィリピン、カンボジアとの交流 2
6 回	5/11(金)	英語ムービーの制作	11/9(金)	英語ムービーの制作 1
7 回	5/18(金)	テレビ会議コミュニケーション 1	11/16(金)	英語ムービーの制作 2
8 回	5/25(金)	テレビ会議コミュニケーション 2	11/23(金)	英語ムービーの制作 3
9 回	6/1(金)	中間テスト	11/30(金)	英語報告書の制作 1
10 回	6/8(金)	プレゼンテーション手法 1	12/7(金)	英語報告書の制作 2
11 回	6/15(金)	プレゼンテーション手法 2	12/14(金)	アカデミックディスカッション手法
12 回	6/22(金)	英語ジャーナルの書き方	1/11(金)	アカデミックライティング手法
13 回	7/6(金)	テレビ会議を活用したフィリピン、カンボジアとの交流 1	1/18(金)	最終テレビ会議準備
14 回	7/13(金)	期末テスト	1/25(金)	テレビ会議を活用したフィリピン、カンボジアとの交流 3
15 回	7/20(金)	テレビ会議を活用したフィリピン、カンボジアとの交流 2	2/8(金)	期末テスト

中間テストでは、英語でインタビューを実施し、英語で対話する力がどの程度身についているのかを確認した。事前学習の後半は、現地で英語ジャーナルを書くための練習を行った。また、実際に Skype を通して現地大学の学生と交流をし、大学生活や日常生活の比較をテーマに対話し、コミュニケーション能力を養った。さらに、事前学習の最終日に、期末テストとして TOEIC テストを実施し、その結果を本英語実践プログラムの評価の対象とした。

帰国後も全 15 コマの事後学習を実施した。事後学習の前半は、現地での活動を通して学んだことを、まとめるための振り返りを行い、振り返ったことを英語ジャーナルとして完成させた。また、学生同士でのグループディスカッションを行い、自分が学んだことを英語で伝える練習を行った。活動を振り返った結果は報告書だけでなく、英語ムービーとしてもまとめた。

事後学習の最終日には TOEIC テストを再度実施した。以下、活動結果にてその評価の対象となる結果を報告する。

５．３．活動結果

英語実践プログラムにおける活動結果として、学生は事前学習で学んだスキルを活かして現地で活動を行い、事後学習での振り返りを通して英語コミュニケーションの能力がブラシュアップされた。

事前学習で英語におけるプレゼンテーションの手法や対話のスキル、英語ジャーナルの書き方の手法を学んだことは、現地大学の学生との交流に対して前向きな姿勢に繋がり、結果として活発な英語での議論や、振り返り内容の充実を促進したと考えられる。これらの力は、異文化を持つ海外フィールドで現地の人々と協働していくための重要な力であり、本教育プログラムでの具体的な教育目標でいうならば、英語コミュニケーション力の向上という目的を達成できたと言える。学生は事前学習でテレビ会議を用いてフィリピンやカンボジアの学生との交流に取り組んだ。そこでは、指導教員の支援が必要になる場面も数多く存在し、積極的に自ら発言し、交流することが難しかった。しかし、現地で実際に現地学生と直接交流を行い、活動を行うことによって学生の積極性は徐々に増していった。そして、現地で向上した積極性は、事後学習でも現われていた。例えば、Skype を用いたテレビ会議ではフィリピンやカンボジアの学生との交流において、学生は作成した英語ムービーの紹介や、振り返りに関するディスカッションを学生自ら進行している様子が見られた。また、 SNS を用いた授業設計としての成果は、学習の記録を SNS 上に蓄積するだけでなく、蓄積した記録を学生自身が、事後学習の振り返り時に使用したり、海外の学生との交流のツールとして使用したりと、幅の広い学習を可能にした。学生が授業時間外でも、英語に触れ合う環境を整えられたと考える。

また、英語能力の向上を数値的に測るために実施した TOEIC テストの結果を以下に記す。

■TOEIC による結果

本英語実践プログラムにおける評価としてプログラム開始時と事後学習の期末テストで TOEIC の問題を用いたテストを行い、学生の獲得点数を比較し、英語能力の向上を数値

的に測った。以下に、テストの結果を記す。

TOICE テストの結果、Reading セッションにおいては、約 60%の学生に点数の向上が見られた。この結果の要因として、学生らが行った、SNS 上での英語での学習記録の蓄積や、海外学生とのテキストメッセージの交流をするなどが、Reading 能力の向上に大きな影響を与えたと考える。また、あまり SNS 上で積極的に交流をしていなかった学生においては向上されなかったことが分かっており、全ての参加学生が、積極的に SNS を活用できる仕組みの改善が必要である。

Listening セッションにおいては、ほとんど全ての学生に成果が見られた。その理由としては、ネイティブスピーカーにより全ての授業を英語で実施していることや、事前学習から現地での学習、事後学習を通して英語でのディスカッションやプレゼンテーションなど、実践的な内容を盛り込んだことが挙げられる。また、フィリピンやカンボジアの学生と協同活動に取り組んだことも、今回の成果に影響を与えたと考える。

TOEIC テストの結果（リーディング）

Reading

氏名	事前学習	事後学習	変化
黒石　大志郎	65	49	-16
榎　浩大	56	31	-25
森田　俊勝	30	45	15
八十嶋　郁也	39	25	-14
川西　崇文	44	41	-3
堺　悠里花	38	46	8
辻本　譲	75	73	-2
宇佐　望月	67	75	8
鷲山　彩香	29	44	15
関根　孝博	54	60	6
原　広輝	57	57	0
浦野　友欣	41	56	15
瀧野　愛美	67	65	-2
山内　さえ子	53	62	9
近藤　顕人	35	49	14
平均点	50	51.86667	1.866667

TOEIC テスト結果（リスニング）

Listening

氏名	事前学習	事後学習	変化
黒石　大志郎	44	53	9
榎　浩大	42	53	11
森田　俊勝	41	52	11
八十嶋　郁也	48	52	4
川西　崇文	30	44	14
堺　悠里花	50	34	-16
辻本　譲	64	69	5
宇佐　望月	77		-77
鷲山　彩香	36	40	4
関根　孝博	38	47	9
原　広輝	63	73	10
浦野　友欣	39	52	13
瀧野　愛美	58	68	10
山内　さえ子	50	55	5
近藤　顕人	54	47	-7
平均点	48.93333	52.78571	3.852381

５．４．まとめ

英語実践プログラムの事前学習において、英語でのグループディスカッションを基本とし、実践的に英語を身につけることに主眼を置いた。日常的内容をテーマとした、ディスカッションやプレゼンテーションの手法を学び、英語で話を聞く・話す知識を身につけたことが、現地学生とコミュニケーションを積極的に取る態度の育成につながった。そして、現地では現地の学生と協同して取り組むことで英語コミュニケーション能力の育成が達成できたと考える。事後学習においても振り返りや映像制作、報告書の制作など、英語で自身の活動を整理し成果をまとめるという作業を行った。これまで英語を学ぶこと中心に活動を行ってきた学生が、英語で学ぶことに取り組むことができた。学生は英語を使って学ぶことの難しさを実感し、さらなる英語学習への動機付けを行うことができた。

５．５．成果報告論文

本英語実践プログラムの成果をまとめた論文が、平成 26 年度関西大学総合情報学部紀要「情報研究」に採録された。

Kimura, M. O., Kimura, B. Y. & Kubota, K. (2014)「Design and Evaluation of English Oral Communication Course at Kansai University」『情報研究』第 41 号 pp.41-59

概要

Educators, linguists, and anthropologists recognize that language reflects societal values, culture, and attitudes of the country where the language is spoken. The use of technology provides numerous activities where students can learn about the values, culture, and lifestyles of people living in other countries while practicing their English communication skills. This paper examines the use of videoconferencing between students at Kansai University and the University of Hawaii to develop language skills and increase intercultural understanding. The authors describe learning activities to prepare students for the videoconferences, examine learning styles related to the use of technology, provide observations about technology use, and discuss changes in students' intercultural sensitivity over one semester.

キーワード

Second language learning, Videoconference, Intercultural awareness

Design and Evaluation of English Oral Communication Course at Kansai University

Mary E. O. Kimura*1 Bert Y. Kimura*2 Kenichi Kubota*3

Abstract

Educators, linguists, and anthropologists recognize that language reflects societal values, culture, and attitudes of the country where the language is spoken. The use of technology provides numerous activities where students can learn about the values, culture, and lifestyles of people living in other countries while practicing their English communication skills. This paper examines the use of videoconferencing between students at Kansai University and the University of Hawaii to develop language skills and increase intercultural understanding. The authors describe learning activities to prepare students for the videoconferences, examine learning styles related to the use of technology, provide observations about technology use, and discuss changes in students' intercultural sensitivity over one semester.

Keywords: second language learning, videoconference, intercultural awareness

1. Introduction

Educators acknowledge the need to include elements of cultural competency and understanding into language learning. The National Standards in Foreign Language Education Project asserts that students cannot master a language until they have also mastered the cultural contexts in which the language occurs (Peterson & Coltrane, 2003). Perception of what is communicated is affected by the language, norms, values, and behaviors in the society where the language is spoken.

The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL, n.d.), under a three-year grant from the US Department of Education and the National Endowment for the Humanities, developed the National Standards for Foreign Language Learning: Preparing for the 21st Century, that recognized the need for students to gain knowledge and understanding of other cultures, to

*1 Forum for i-Learning Creation
*2 University of Hawaii
*3 Kansai University

make comparisons, and to develop insight into the nature of cultures.

This study was conducted with Kansai University Informatics majors enrolled in Oral Communication classes. The course goal was for students to communicate effectively linguistically and culturally in English, through the use of technology. Students used synchronous communication modes such as videoconferences with Skype and Google Hangouts to strengthen their oral communication skills and increase their intercultural understanding.

2. Course Description

An Oral Communications course was offered mainly to third year students at Kansai University and taught in English to improve students' English ability to communicate orally and to increase their intercultural awareness in preparation for their field work in the Philippines and Cambodia. During 14 class sessions, students participated in activities where they were required to speak English to discuss daily activities, events in Japan and other topics of interest to people in other countries. Students practiced discussing these topics during small group, in-class discussions, at videoconferences with students in Hawaii and in videotaped presentations. Students discussed and compared cultural differences and similarities between Japan and other countries.

Students used group discussions, an electronic portfolio using a secret Facebook group, videoconferences with students in Hawaii, videotaped presentations at the start and ending of the course and written reflections to improve their English communication skills and to increase their intercultural understanding.

3. Goals

The goal of this course was to help students improve their English oral communication skills, their intercultural awareness, increase confidence and provide motivation to speak English by learning how to discuss daily activities and events, during small group discussions, problem-solving exercises and class activities. Students learned to ask and answer questions commonly encountered when traveling abroad or living with host families. Students used diagrams and gestures to further illustrate what they are saying in English. Students spoke English as much as possible when in class and used appropriate nonverbal communications.

Students learned how to understand and use nonverbal and verbal communication skills to facilitate their communication in English. Students were encouraged to use facial expressions and nonverbal body language that is commonly used by English speaker. Students used communication skills learned in class to talk with students in Hawaii through the use of Google+ or Skype.

Students provided information about Japan and learned about Hawaii to increase their intercultural understanding. Students also learned how to use Google+ to upload images, share screens and use the Internet to further illustrate their ideas and clarify their discussions.

Students served as leaders to facilitate small group discussions, asked and answered questions, continued conversations and encouraged discussion in English. They learned how to use attentive listening skills and rejoinders to assist their discussions.

Students practiced good pronunciation and improved their listening skills when communicating in English. Videotapes, taken at the beginning and ending of the course, assisted students in comparing the growth of their spoken English and to view their use of nonverbal communication.

Students used a secret Facebook group as an electronic portfolio to write reflections about what they learned in class, to make comments about how they felt about learing to speak English and to view posts that summarize what they learned in class. Videotapes of their initial introductions and final discussions in English are posted in this portfolio. Students viewed reflections about lessons and videotapes that illustrate their progress in class. Teacher's comments and observations were provided in students' Facebook reflections.

4. Description of Lessons

The following describes the content of the class lessons.

Lesson 1. Introduction

Students will learn how to provide a basic introduction and discuss simple topics about themselves. They will ask and answer questions while working in pairs. A videotape of student introductions will be taken to illustrate their spoken English on the first day of class.

Students will be introduced to class rules, to speak English only, to speak loudly and with confidence. They will be encouraged to use body language commonly used by English speakers during introductions.

Lesson 2. Body Language

Students will learn about the differences between body language when speaking English and when speaking Japanese. They will practice using body language to show attentiveness and interest when speaking English. Students will use the following when speaking during small group discussions

- Face or look at the speaker
- Keep an open position

- Lean forward slightly
- Keep eyes on the speaker.
- Relax a little
- Respect the other person's territory. Do not sit too close or too far from the speaker.

Lesson 3. Facial Expressions

Students will continue to use good body language and facial expressions when they ask and answer questions. Students will introduce themselves and provide interesting information about themselves. Students will be good listeners and speak with a loud, clear voice, while using their best pronunciation.

During group discussions, a leader will be selected to discuss questions about themselves, hobbies and interests, family or hometown from the handout. Students will ask further questions to encourage conversation and continue a conversation.

Students will practice facial expressions that show confidence and understanding when speaking English. Students will smile appropriately or nod to show agreement. As much as possible students will use facial expressions and nonverbal communications to encourage others to speak and help group members relax when speaking English.

Students will learn how to add reflections and comments to the Facebook secret group.

Lesson 4. Rejoinders

Students will work in groups and use rejoinders to raise the *energy level* of the conversation. They will learn how English speakers often use rejoinders to continue the conversation and to show they are listening. They will ask questions about what the speaker is saying to make the conversation interesting.

Students will practice using rejoinders to continue a conversation or learn more about others. In class, students will do their best to speak English, use good body language, smile and use rejoinders. In their reflections, students can explain how using rejoinders and good body language affected the group discussion.

Lesson 5. Using Gestures to Communicate

Since students will only have fourteen lessons to learn how to communicate in English there will often be times when they do not know the English vocabulary needed to express their ideas. In class students will learn how to use gestures to communicate and as well as guess at meanings of gestures that others may use. They will learn about some gestures that are different from Japanese gestures.

Lesson 6. Asking My Questions

Students will learn how to ask their own questions, while using appropriate body language, rejoinders and facial expressions. They will speak in pairs for as long as they can by creating a positive atmosphere that encourages conversation. Students will try to use verbal and nonverbal skills that are often used by English speakers.

Lesson 7. My Hometown

When students travel abroad, people often want to know more about Japan. Students will be divided into groups with people from different areas of Japan and discuss the similarities and unique qualities of their hometowns. They will learn how to ask and answer questions that will provide more information and knowledge about other areas in Japan or abroad.

Lesson 8. Picture Activity

Students will learn how to use pictures or diagrams to assist their communication in English. Students will be encouraged to draw figures that emphasize unique features that assist in identifying the concept they are communicating. Students will learn how to guess words from simple diagrams.

Lesson 9. Asking Questions

Students will practice giving some information about the topic they will discuss or themselves before asking questions. They will continue to maintain nonverbal communication and rejoinders to encourage discussion.

Lesson 10. Talking about Families

When traveling abroad, students are often asked about their families. The purpose of this lesson is to learn how to talk about families. Students will learn how to describe family members and talk about dream or future families. Students will use new words to describe families and talk about future dreams for job, family and spouse (husband/wife).

Students will learn about many types of families in other countries. While in some countries, it is not polite to ask about families. In other countries, people speak freely about their families and have very large families. Some people will talk about their parents' divorce, remarriage and extended families that are formed after people divorce or when they remarry. Students can create their "ideal" family if they do not want to discuss their current family.

Lesson 11. Becoming a Good Discussion Leader

Students will use their best discussion skills and serve as group leaders. In preparation for the

videoconference with Hawaii, students will discuss life in Japan, Japanese schools and give their opinions. The goal of the discussion is to teach others about Japan. Students will look for something special or different about where they have lived that other students may not know. They will talk with students about their lives and learn new things about Japan.

Lesson 12. Videoconference Preparation

Students will practice asking and answering questions that will compare cultures within Japan and in different countries. Students can use these questions during their videoconference with Hawaii students. Class will meet in a room with Internet connection so students can familiarize themselves with the videoconferencing software and some of the difficulties encountered when speaking over the Internet.

Lesson 13. Videoconference with Hawaii Students

Students will use the verbal and nonverbal communication skills learned in class to discuss topics relating to their daily lives, customs and traditions in Japan and interesting topics during their videoconference with Hawaii students. Students will use their best body language, pronunciation and rejoinders to communicate with Hawaii Students

Lesson 14. Final Video and Class Evaluation

Students will produce their final videotape of a discussion in English using the skills learned in class. This videotape will be posted in the Facebook group with their introduction video so they can evaluate the progress made in class. Students will complete a class evaluation.

5. Course Results and Discussion

Students completed a survey about what they learned from the videoconference. The survey examined what students learned from the videoconference and how well they thought that they could communicate with students at the University of Hawaii. The survey also examined what students learned about Hawaii and how their awareness of cultural similarities and differences changed after the videoconference. The following summarizes the results of the survey.

5.1 Videoconference Results and Discussion

Students participated in a videoconference with Hawaii students. The purpose of the students was for students to use their oral communication skills to learn more about Hawaii and to teach Hawaii students about Japan.

In the survey, students explained what they enjoyed about the videoconference, areas that they found useful and liked and areas that they disliked. They explained what they learned and how they benefitted from participating in the videoconference.

The following results reflect student responses from the Spring 2012 and Spring 2013 classes.

5.1.1 *Enjoyment and benefits of the videoconference*

In general, students enjoyed the videoconference because it provided them with the opportunity to communicate in English with people from another country. Some students felt nervous about whether the Hawaii students could understand their English and were relieved that they could communicate most of their ideas in English.

Table 1 Whether Students Enjoyed the Videoconference

Year	Yes	No
2012	12	0
2013	11	1

Reasons for enjoying the videoconference fell into two general categories of having the opportunity to communicate in English with foreigners and learning about people in other countries. The following table indicates the numbers of students that fell into each category.

Table 2 Reasons for Enjoying the Videoconference

	2012	2013
I could speak English and communicate with foreigners	8	7
I learned about other people and cultures	3	4
Other	1	1

In the process of participating in the videoconference students learned about the daily lives of Hawaii students and how to use Google Hangouts to participate in a videoconference. Some students were apprehensive that English speakers might not understand their English. They were relieved when they could successfully communicate their ideas in English. A sample of their comments explaining why they enjoyed the videoconference is listed below.

- it's so fun to communicate in English
- I could speak some students of Hawaii University in English.
  I talked with them about hobby, study, high school memory, favorite sports ...etc
- The communication with those whom I don't know makes me nervous usually. However, this time, I really enjoyed talking maybe because it was in-directional communication through Google hangout. And moreover, the Hawaii friends are all friendly and good at talking!

- I could talk with foreigner. This is a very precious experience to me.
- I enjoyed the videoconference very much. I knew many things about foreign culture, foreign places and so on. It was very interesting.

5.1.2 *Benefits of the videoconference*

When citing reasons why the videoconference was beneficial, some students indicated that they understood the importance of using technology to learn more about other countries. They enjoyed watching the faces and gestures of Hawaii students and what they could learn from speaking directly with people from other countries.

They responses, describing the benefits of the videoconference, fell into three general categories that are listed in Table 3. They gained a better understanding of people in other countries, used verbal and nonverbal means of communication when talking with Hawaii students and learned how to use technology to share and gain new knowledge. Table 3 summarizes their responses.

Table 3 Benefits of the videoconference

	2012	2013
Learn/connect with people in other countries	6	6
I can learn verbal and nonverbal skills. Speak English.	2	3
Use technology to chat, share document and maps	1	3
Other	1	1

Student comments reflect the benefits of using a videoconference to speak with students in Hawaii. Some realized that the videoconference provided a useful means of connecting with people in other countries. Videoconferences allowed them to learn more about other countries, people and cultures. Some comments are listed below.

- I could make Hawaiian friends
- I can connect all over the world.
- I could watch a face and character (of Hawaii students).
- They showed me a picture or a map. So i could learn much about hawaii.
- I could talk with stranger. It is good opportunity to talk in English.

5.1.3 *Problems of communicating through a videoconference*

Since some students were fairly new to using videoconferences, they found the slow, unstable Internet connection distracting and had difficulty understanding what the Hawaii students were saying. They had difficulty with the time lag involved when using the Internet and often talked at the same time as other students rather than waiting for the conversation from the Hawaii side to

finish.

Other students realized that they needed more questions and topics in order to continue speaking with the Hawaii students. They were unable to think of questions that they had not previously prepared. At times they couldn't respond to questions from Hawaii students. For some students, this was embarrassing and stressful, but for others, this experience provided them with greater motivation to learn and improve their English.

Table 4 Problems communicating through a videoconference

	2012	2013
Internet connection was unstable, slow	8	3
Time lag when conversing	1	1
Equipment not working well	0	1
Couldn't think of new questions	1	1
Nothing	0	2
Other	1	1

Most of the problems communicating through the Internet involved problems with connection and the time lag when speaking. More problems with the Internet occurred in 2012 when the connection was slower and unstable. Because students were second language speakers, they had difficulty understanding words when speech from the Hawaii students were interrupted or couldn't be heard clearly.

Students also noticed that speaking with someone for the first time required more concentration to understand what was said. Although they practiced discussing various topics in class, some students were unprepared to answer unfamiliar questions or lacked enough topics or questions to use during the videoconference. Some student comments are listed below.

- I can't hear voice clearly
- PC always isn't smooth.
- Often Internet disconnects.
- Students only asked the questions they prepared. Hawaii students gave good answers but Japanese students didn't really react to that. Probably it was too hard to understand? I think it will be better if Japanese students talk about themselves and their opinions, too.
- Sometimes the sound was not clear. So I couldn't listen what they were talking
- It has time lag. Sometimes we start to talk at the same time and it was difficult to decide which should keep talking
- We met them for the first time and conversed, so I was embarrassed.

5.1.4 *Reasons for liking and disliking the videoconference*

Students were asked what they liked and disliked about talking with Hawaii students. Most liked talking with Hawaii in real time and communicating easily over the Internet. They realized that with Google Hangouts, they could share documents and pictures on their desktop.

However, they also realized that with real-time interactions, they had to think and speak in English quickly, otherwise their discussion could not continue smoothly. Some realized that their English communication skill was not strong enough to do so and that they had to work on improving their ability to speak English so that they can converse more comfortably with foreigners.

For other students, the videoconference was a very uncomfortable experience because they were very nervous about speaking English. This interfered with their ability to concentrate on understanding questions and convey their ideas and opinions. Table 5 indicated whether students liked or disliked the videoconference. Most students liked the videoconference. Their reasons for liking and disliking participating in the videoconferences are listed below the tables.

Table 5 Whether Students Liked or Disliked the Videoconference

	2012	2013
Liked	11	10
Disliked	1	2

Table 6 Reasons for Liking the Videoconference

	2012	2013
I can talk with and learn about foreigners in real time	4	5
I can see the faces of foreigners while I speak	2	2
It's a convenient way to communicate	4	1
Other	1	1

Students liked being able to talk with foreigners in real time and the convenience of talking with someone in other countries. Others described videoconferences as " a great opportunity for us to talk with people who we cannot usually talk." Other comments regarding like the videoconference are listed below.

- If only have PC and connect the Internet, we can talk friends who live all over the world.
- It was much useful than Skype. I could get and show many information.
- We can talk whole we share the information such as document or web page.

Student who did not like the videoconference cited the following reasons:

- We couldn't talk smoothly then. But, my talking skill was not enough. So, I want to grow up about it. I like to talk directly more.

- I was very nervous but to meet face-to-face and talk is fun because I was able to experience interacting with them.

5.1.5 *Speaking more at the videoconference*

Students wanted more videoconferences, so they could speak with good English speakers again. Some stated that speaking with native English speakers was a good way to improve their English. Students also learned more about the culture, people and places in Hawaii through the videoconference. Table 7 indicates whether students want to speak more at the videoconference.

Table 7 Whether Students Wanted to Speak More

	2012	2013
Yes	12	12
No	0	0

Some students had difficulty clearly expressing themselves in English but realized from the videoconference that they needed to practice speaking English more and improve their confidence. One student stated that she couldn't speak a lot of English, but was excited by the experience.

5.1.6 *How to improve the videoconference*

Student suggestions to improve the videoconferences indicated that they wanted to speak longer with Hawaii students. Students rotated through six computers and talked for about 15 minutes with different students. Some felt that they would benefit more from talking to one Hawaii student for a longer time. Others wanted to speak longer or one-to-one rather than with groups of three Japanese students.

Another suggestion was that students meet in different rooms, since meeting in the current room make it difficult to concentrate on their conversation because they could hear other groups talking with the Hawaii students.

Table 8 Student Suggestions to Improve the Videoconference

	2012	2013
Better Internet connection, faster computers	5	1
I could speak English better/talk more	3	5
Could speak longer	0	1
Meet in different rooms	0	2
Other	3	3

Student comments listed below indicate how the videoconferences can be improved. Some

students indicated the need to improve their English and not be shy.

- The connection is good and I have ability of English. I want to study English more.
- Our skills of speaking English are going to be better.
- PC connection will improvement and we can't be shy.
- I think that the videoconference could be better if there should be more ICT equipments.
- Students try to talk more about themselves.
- (We could meet in a) room separately because of other members voice, sometimes I couldn't hear the voice whose Hawaii students.
- It will be longer. I wanted to talk more with one person at least 30 minutes. 15 minutes was too short for me.

5.1.7 *How students felt after the videoconference*

Although some students felt nervous after the videoconference, the majority felt excited and enjoyed their experience. Table 9 categorizes their comments. Some students' comments contained more than one of these areas and were categorized more than once.

Table 9 Student Comments by Category

	2012	2013
I was excited	11	0
I enjoyed the videoconference	6	7
I felt nervous	7	3
I had fun.	7	4
I could relax	1	1
I like communicating in English	1	0

In evaluating how they felt after the videoconference, some students indicated that they needed time to relax after their initial nervousness. Despite the discomfort and stress of speaking English to people they met for the first time, students could ask many of their questions and enjoyed the videoconference. The following are some of their comments.

- I enjoyed the videoconference. I had fun today. I felt nervous because sometimes, I can't understand what American is speaking. But after 3 minutes, I was relaxed and I enjoyed conversation.
- I felt nervous because talking is not continued. But I enjoyed the videoconference. I had fun today.
- I had fun today. I have been Hawaii twice, so I had many topics I want to talk.
- I felt nervous first, but I used to talk with Hawaii student. I think hearing English is very difficult. Hawaii students speak very fast.

- I had fun. I enjoyed today. I had many things asked.
- Everyone was very cheerful. It was very easy to speak with them. (Translated to English.)
- First, I felt a little bit nervous. But, as time goes by, I don't feel nervous. I became be relaxed. It was so fun.
- I enjoyed it very much. It was almost same as usual face-to-face talking for me.
- I was very enjoyed and I want to talk at the videoconference again.
- I felt very nervous. But, I enjoyed the videoconference.
- I felt very fun and hard to speak English to the other students.

5.2 Results and Discussion of Changes in Cultural Awareness

Students indicated that they learned more about the culture, traditions and lifestyle of people living in Hawaii. They stated that they increased their awareness of similarities and differences between the two countries. Some students stated if they knew more about Japan, they could teach others about their cultural and traditions. The following summarizes the results of the survey.

5.2.1 *What students learned about Hawaii from participating in videoconference*

Although the purpose of the videoconference was to allow students to practice their English and the nonverbal skills that they learned, they also cited that they learned about Hawaii's multi-cultural environment, the different cultures that co-exist in Hawaii, place of interest to visit, personalities of people living in Hawaii and personal interest of the students in Hawaii.

Table 10 What Students Learned

	2012	2013
About the people in Hawaii	8	5
About Hawaii's culture	2	3
About places and activities in Hawaii	1	2
Other	2	1

Student stated that through their conversations, they found Hawaii students were "so positive and energetic," "so active," " very cheerful," and "modest but many (have) high spirits." They learned about the lifestyle and American school life. Other comments are listed below.

- It's difficult for foreign students to get admission to go abroad in USA.
  Hawaii students are very kind.
- All most students' parents were not from in Hawaii. One of their parents who were from in Korea. Other of their parents who were from Singapore. So, the person who live in Hawaii, their parents not always are from in Hawaii. And they do many things. They are active. To

play various sports, to go travel oversea.

- I learned how beautiful nature in Hawaii. They showed me pictures where they live and they often swim in the sea. I really envy because no sea near my place.

Through the videoconference, students expanded their understanding of other cultures, people and places by speaking English. For some this increased their interest in learning more about other countries and provided motivation to improve their English. Examples of their comments are:

- I felt nervous, but I enjoyed too much!! I want to talk with foreign people more.
- I'm so excited still now. I like communicating to others in English. I'm looking forward to join videoconference sometime again.
- Fun! But I have to increase my English vocabulary.
- I had fun. Very enjoyed !!! I want to speak English with many people by the videoconference. Please teach me vocabulary and intonation.

5.2.2 *Understanding the Hawaii students*

Students found the videoconference difficult to understand. In class, most students could converse and understand each other, but when speaking with native speakers, the Japanese students had to adjust to listening to English spoken at a faster speed, understanding words that they hadn't studied before and talking about unfamiliar topics.

Some students were forced to resort to using nonverbal communication skills or asking for clarification when they didn't understand or couldn't communicate their thoughts clearly. Table 11 indicates the difficulty understanding what the students in Hawaii were saying.

Table 11 Understanding Hawaii Students

	2012	2013
Very difficult	2	0
Difficult	4	1
A little difficult	4	7
Easy	1	4

5.2.3 *What students learned about Hawaii*

Most discussions focused on topics about the weather, hobbies, food and movie that were covered in class. However other groups discussed the different ethnicities of people living in Hawaii, the various religious groups and mixtures of cultures in Hawaii. In the process they realized that Japan didn't have the ethnic diversity that Hawaii did. One group had a detailed discussion about

World War II and it's implications on other countries.

Table 12 Areas of Student Discussion

	2012	2013
Culture	3	4
Food	3	2
People	3	1
Sports	2	0
Weather	3	3
History	0	1
Hobby	0	1

Student comments varied in describing its complexity depending on the topic discussed in their groups. Some groups discussed topics studied in class and were limited to the weather, hobbies, foods and cultural activities. Other students had topics that were a little more difficult to understand but resulted in learning about new topics. Some of their comments are:

- Hawaiian culture is almost all not originally. It comes from many countries. Hawaiian culture is mixed culture.
  Second Hawaiian is very kind!! They speak very slowly for us.
  At the last, I should not feel shy. Be confident!
  I should remember that when I do speech in front of many people.
- Foreigner's talking is very fast. Second, I learned videoconference is very slowly. Third I learned we must more speak English.
- Hawaiian always keep smile in their face, so I don't feel nervous too much!! I would like to keep smile when I talk with some friends.
  Second, I learned the question is important! I have to learn many kinds of questions. Some foreign people like speak but other people don't speak, so I must prepare many questions.
  Finally, I really liked to communicate in English! It's too fun!!! I like it! I had a good time! Thank you!
- There are many kinds of people, religion, culture, mix!!!
- It was very enjoy today!!! Hawaii students were very friendly and we could talk a lot. This was the first time that I spoke with Hawaii students. I would like to do Skype again. I think that I would also like to talk with Philippine students like this, too. (Translated to English)
- I knew Hawaiian food, locomoco and poke.
- Mix culture because many immigrant.
- I learned about modern history after the Second World War. For example, U.S.A, China, Korea, Vietnam, Europe, etc..

- In Hawaii, there is not humid like Japan. And there is very comfortable to live.
- There are so many nationalities in Hawaii. I hope Japan also receive many differences because sometimes I feel Japan is a closed country.
- The climate in Hawaii is very nice to live. The size of food is as big as other food in US.
- I learned it was difficult for me to continue talking. I learned foreign famous places. I learned many differences between Japan and foreign countries.

5.2.4 *What students would like to teach Hawaii students about Japan*

If future videoconferences were held, students indicated that they would like to discuss the following areas that are indicated in Table 13. Some found that they needed to learn more in order to teach others about Japan. Table 13 lists topics that they would like to discuss with Hawaii students.

Table 13 Topics Students want to Share with Students in Hawaii

	2012	2013
Food	4	4
Culture	2	2
Seasons	1	2
Music	1	0
Places	2	1
People	0	1
Other	2	2

Student comments indicated that they wanted to teach others about beautiful places in Japan using pictures, pop culture or about various foods in Japan. Others wanted to discuss current events like problems with the nuclear power plants. Some of their comments are:

- Japanese eccentric foods.
- Japanese famous food.
- I want to tell Japanese characteristics when talking; nodding, rejoinders and gestures...
- About the beautiful places in Japan. About the delicious food in Japan. About our university life. .....etc
- I want to tell them about problem about Japan for example nuclear power plant. And I want to discuss about it with other people.
- Japan's image.
- I tell there are many kind people in Japan.

5.3 Future videoconferences

Most students wanted more videoconferences. Some wanted to speak to native-English speakers more often to improve their communications skills. Other appreciated the opportunity to learn more about other countries and to practice using the English that they learned in class. The following indicate the number of students who would like to have more videoconferences.

Table 13 Whether Students Want More Videoconferences

	2012	2013
Yes	12	11
No	0	1

Reasons for wanting more videoconferences fell into the following categories.

Table 14 Reasons for Wanting More Videoconferences

	2012	2013
I want to speak with native speakers/foreigners	5	5
I enjoyed speaking/communicating in English	3	0
I want to have more confidence/improve speaking English	1	3
I want to learn more about cultures and make friends	1	2
Other	1	1

Most students wanted to have more videoconferences to improve their English and speak with foreigners. Others indicated that their confidence in speaking English might improve through this process. Some wanted to learn more about Hawaii by speaking with people living in Hawaii. The following shows some of their comments.

- I want to have more videoconferences because I want to know Hawaiian friends
- I want to contact to good English speaker more times.
- Very enjoyed. I think speaking English with native is best!!!
- Today, I can't speak many English. But I received stimulus.
- I want to have more confidence for my English.
- I want more videoconferences because I want to know about other cultures.
- Even if I'm in Osaka, I can talk to foreigner on line. In Japan, I seldom speak to a foreigner. So it is good chance speaking English.
- I want more videoconferences because it's good practice to speak English.
- It is needed to use it in order to collaborate with foreigners.
- I want more videoconferences because I can learn a lot of things to speak with them.
- I don't want to have more videoconferences because once is okay I think. Or probably twice.

More videoconferences can make students used to speak English more, but they may take one opportunity for granted.

6. Conclusion

In general students found the videoconference beneficial as a way to practice and learn more about people in other countries. Although they were nervous while communicating in English, the videoconference helped them understand areas that they needed to improve and how technology can be used to increase their English ability and learn more about other countries. Areas that need to be addressed is providing students with longer times to talk, better facilities to decrease distractions from other students speaking and ways to increase student English level before the videoconference.

The Appendix contains comments that illustrate students' recognition of the need to improve their English communication skills and their motivation to continue studying English

Note: This research was supported by "Kyoiku Kenkyu Kodoka Sokushin Hi" in 2012 and 2013.

References

The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL). (n.d.) The American Council on the Teaching of Foreign Languages. Retrieved June 2 from http://www.actfl.org/sites/default/files/pdfs/public/StandardsforFLLexecsumm_rev.pdf, Retrieved June 2, 2014.

Peterson, E., & Coltrane, B. (2003). Culture in second language teaching. CAL Digest. Washington, DC: Center for Applied Linguistics. Retrieved June 2, 2014, from http://www.cal.org/resources/digest/0309peterson.html

Appendix

The following summarizes student comments that indicate what they learned from speaking English with Hawaii students at the videoconference. Their comments illustrate their recognition of the need to improve their English communication skills and their motivation to continue studying English.

- Rejoinder is really important because if it's not in the videoconference it must be uneasy. Second, smiling to others make others relieved. Third, I noticed I like speaking in English again. So I'm keeping practice speaking in English from now until the day I die.Thank you for making me notice communicating in other languages is so fun.
- Google+ is very useful to talk and conference. I can explain my name by words (chat), and check where the speaker is (maps). I want to talk again. I have so many topics what I want to talk. I like Hawaii and Hawaiian people. (Of course, I also like Indonesian people!) Thank you!
- Body language is difficult. When I thought, "how can I say?" I should use body language. Kasy don't know Sori, so we told it using body language. Second pronunciation is important. My name spell is YurRika. My pronunciation is difficult. Third, I had fun!! We love communication.
- I want to go to Hawaii when I talk with Hawaii students. ^^ I should practice hearing very hard, so I try to practice hard.
- Speaking English is very difficult, because I couldn't find vocabulary what I wanted to say. Second, I must prepare many questions because very time is wasteful, when I use videoconference. Third I know

about difference Japan and Hawaii.

- I could speak with English and use body language. Second, I learned Hawaiian food and Hawaiian tradition. Thirds, I learned to use Google+. I used it for the first time.
- First, I learned that Hawaii people are very, very kind. People talk very slowly, so I can understand!! Second, body language is very useful!! It is must tool for my English communication. Third, I have to learn Japanese culture. If I know more cultural topic, the conversation grow livelier. In conclusion, my English is slowly getting better.
- Videoconference is very, very difficult because we have time lag. I can't hear Hawaii student talk because fast speak. I felt nervous.
  I learned Hawaii culture. It is mixed many culture, so powerful culture.
  The videoconference is very difficult. I should more study English because Mizuki will be angry.
- Hawaii students felt interested in talking with people they did not know. They were a little excited. Anyway, they seemed to have wanted to talk a lot.
- It's important to TRY to speak something. It's important to have own OPINIONS.
  It's important to set the comfortable condition (audio, video etc.) when having videoconference.
- Studying English and becoming to speak English, we can talk (with) much more people.
- First I learned there are many races in Hawaii not only American. Second I learned discussion with foreigner is much fun than discussion with only Japanese because I can get unimaginable opinion. Third I learned about Hawaii food. They showed me pictures. It looked very delicious. It seemed similar to Philippines food.
- I have a little good pronunciation! The videoconference is the best way to speak English with other country people. I'd better to practice English.
- It was difficult to find problems when we cannot connect to Hawaii friends. In videoconference, Japanese students are more talkative then usual. We needed more time to talk what we want to share.
- Enjoyed an English communication. My communication skill is not enough. Talking English is very difficult.

6 章　新規連携先の開拓：JOCV と連携したプログラム

岸磨貴子（明治大学国際日本学部）

本事業をさらに拡大、波及させていくことを目的とし、新規連携先を開拓した。平成 25 年度の取組として、青年海外協力隊セネガル事務所と連携したプログラムを実施した。その成果をまとめた論文が、平成 26 年度関西大学総合情報学部紀要「情報研究」に採録された。

岸磨貴子・久保田賢一・吉田千穂（inpress）「JICA の大学連携プログラムを活用した短期海外研修の実践デザイン－セネガルでの実践事例から－」『情報研究』第 42 号 pp.25-46

概要
本研究の目的は、JICA の大学連携プログラムにおいて、短期ボランティアとして派遣される学生および学生を受け入れる青年海外協力隊員双方にとって有益な実践とするため短期海外研修をデザインするための要件を提案することである。双方にとって有益な実践とは、学生たちが現地での社会貢献活動に十全的に参加し経験できることであり、受け入れ隊員にとっては日々の実践を拡張し発展させることである。具体的には 2014 年 2 月に関西大学がセネガルで実施したプロジェクト型の短期海外研修を事例として、大学側および受け入れ隊員双方にとって有益な連携の可能性について考察する。そのために、次の 2 点を明らかにする。ひとつはプログラムに参加した学生の学びである。大学が教育プログラムとして実施する上で本プログラムが有益であるかどうかについて、学生の学びに焦点をあてて評価を行う。ふたつめは、受け入れ隊員にとっての利点である。途上国での活動経験が少なく、専門知識や技術が十分にない学生を受け入れることは、受け入れ隊員にとって大きな負担となるが、大学との連携は受け入れ隊員にとって新しい活動への展開となる可能性がある。インタビューおよび参与観察をもとにこの 2 点を明らかにした上で、双方にとって有益な実践をデザインするための要件を学習環境のデザインとして提案する。

キーワード
大学の地域連携、JICA、途上国、短期海外研修、短期ボランティア、学習環境デザイン、国際協力

JICAの大学連携プログラムを活用した短期海外研修の実践デザイン
～セネガルでの実践事例から～

岸　磨貴子[*1]　　久保田　賢一[*2]　　吉田　千穂[*3]

要　旨

本研究の目的は，JICAの大学連携プログラムにおいて，短期ボランティアとして派遣される学生および学生を受け入れる青年海外協力隊員の双方にとって有益な実践とするため短期海外研修をデザインするための要件を提案することである．双方にとって有益な実践とは，学生たちが現地での社会貢献活動に十全的に参加し経験できることであり，受け入れ隊員にとっては日々の実践を拡張し発展させることである．具体的には，2014年２月に関西大学がセネガルで実施したプロジェクト型の短期海外研修を事例として，大学側および受け入れ隊員の双方にとって有益な連携の可能性について考察する．そのために，次の２点を明らかにする．ひとつはプログラムに参加した学生の学びである．大学が教育プログラムとして実施する上で本プログラムが有益であるかどうかについて，学生の学びに焦点をあてて評価を行う．ふたつめは，受け入れ隊員にとっての利点である．途上国での活動経験が少なく，専門知識や技術が十分にない学生を受け入れることは，受け入れ隊員にとって大きな負担となるが，大学との連携は受け入れ隊員にとって新しい活動への展開となる可能性がある．インタビューおよび参与観察をもとにこの２点を明らかにした上で，双方にとって有益な実践をデザインするための要件を学習環境のデザインとして提案する．

キーワード：大学の地域連携，JICA，途上国，短期海外研修，短期ボランティア，
学習環境デザイン，国際協力

Designing a Short-term Overseas Service Learning Program with a Collaboration between Universities and the Japan International Cooperation Agency:
A Case Study in Senegal

[*1] 明治大学国際日本学部
[*2] 関西大学総合情報学部
[*3] NPO法人学習創造フォーラム

Makiko Kishi, Kenichi Kubota, Chiho Yoshida

Abstract

In this study, the authors discuss the method to design a short-term overseas service learning program in collaboration with the Japanese Overseas Cooperation Volunteers (JOCV). The authors' research is based on a case study conducted by Kansai University in Senegal in February 2014. Two undergraduate students from the university were dispatched to Senegal to work with a member of the JOCV, who is engaged in a medical clinic as an audiovisual expert. To design a reciprocal practice for both students and the JOCV, the authors clarified the following aspects: first, knowledge gained by the students during the collaborative practice. Second, benefits gained by the JOCV from this practice. The authors analyzed data collected through interviews and participatory observation based on action research and suggested the method to design a reciprocal practice for both the students and the JOCV in a collaborative practice.

Keywords: collaboration between universities and external organizations, JICA, developing countries, short-term overseas service learning, volunteer, designing a learning environment, international corporation

1．研究の背景

グローバル化の進展に伴い，大学は国際社会の中で活躍できる人材を育成することが要請されている．国際社会で活躍できる人材には，語学力に加え，異文化間でのコラボレーションを実現することができる能力を備えることが求められる（文部科学省2011）．多くの大学はこれまでも海外の協定大学へ学生を派遣する海外留学などを国際的な教育実践として展開してきた．しかし，学生が海外に留学しても，学生が現地で得られる異文化の人とのコミュニケーションの機会は限られていることが報告されている（工藤 2009）．このような課題から，異文化間でのコラボレーションを実現するための教育実践のひとつとして，途上国における社会問題を現地の人と協同的に解決することを目指した活動（以下，社会貢献活動）が着目されている（Lui & Lee 2011）．

学生が途上国における社会問題の解決に取り組むためには，現地（異文化）の人との協働が欠かせない．このような活動の特徴から，途上国での社会貢献活動を大学教育のひとつとして位置づけて取り組む大学もある（たとえば，明治大学2015，早稲田大学2015，お茶の水女子大学2015）．大学教育の一環として途上国での社会貢献活動への関心は高まるが，学生が途上国で活動することに対する危機管理が課題となっている．途上国では，政治的，宗教的，文化的な衝突や衛生面から不慮の事故や病気などの危険性が比較的高いため，学生の安全を保障しな

がら現地で活動をさせるためには，学生の行動をある程度制限するなどの危機管理が必要となるため学生を途上国に派遣することは困難であると捉えられている．

このような中，JICAは，大学生および大学院生を短期間，途上国に派遣されている青年海外協力隊員のもとへ派遣するという短期ボランティア制度を実施するようになった．短期ボランティア制度には，Aタイプ（JICAボランティア経験者向け），Bタイプ（JICAボランティア未経験者向け）があり，Bタイプの要請の中には，学生でも応募が可能な要請がある．東京大学，日本体育大学，帯広畜産大学などがこの制度を利用して学生を短期ボランティアとして派遣している．

このプログラムに短期ボランティアとして参加した学生（以下，学生短期ボランティア）は，JICAが長年の青年海外協力隊員派遣の経験を通して蓄積した様々なリソース，たとえば，現地の情報，危機管理情報，語学に関する情報などを活用することができる．また，途上国の現場では，現地に精通している青年海外協力隊員が学生短期ボランティアを受け入れ，彼らは学生短期ボランティアにとって途上国での異文化間協働のロールモデルとなる．学生短期ボランティアは，青年海外協力隊員の活動を手伝いながら，徐々に自分たちのやりたいことを見つけ，実践することができる．まさに，途上国での社会貢献活動に参加し、学ぶことができるのである．一方，JICAは，参加した学生が将来国際協力をめざすことを期待している．また，学生を受け入れる青年海外協力隊員（以下，受け入れ隊員）にとっても，メリットがある．たとえば，イベントや大規模な調査などは人手が必要なとき，派遣される学生が未経験者であっても実施の補助を得ることができる．

以上のことから，JICAの大学連携プログラムは，双方にとって有益であることが期待されるが，受け入れ隊員にかかる多大なる負担が課題となっている現状もある．特に英語を公用語としない地域では，受け入れ隊員が通訳しなければならない。また，通常業務に加え，仕事面だけでなく生活面でも学生短期ボランティアを受け入れるための宿の手配，移動の手配，健康管理や危機管理など，生活面での管理も任される．

本研究では，実際の事例をもとに学生短期ボランティアおよび受け入れ隊員の双方にとって有益な実践とするためには，実践をどのようにデザインすればよいかを考察する．

2．研究の目的

本研究の目的は，JICAの大学連携プログラムにおいて，学生短期ボランティアおよび受け入れ隊員の双方にとって有益な実践とするため短期海外研修をデザインするための要件を提案することである．双方にとって有益な実践とは，すなわち，学生短期ボランティアが現地での社会貢献活動に十全的に参加し経験できることであり，受け入れ隊員にとっては日々の実践を拡張し発展させることである．

本研究では，次の2点について明らかにする．第一に，大学の教育プログラムとして本実践

が有益であったかどうかを判断するためには，学生の学びを評価する必要があるため学生が本実践を通して何を経験し，そこから何を学んだかを明らかにする．また，本実践での学びが，これまで学生らが取り組んできた他の形態での社会貢献活動と何が違うかについても，明らかにする．第二に，受け入れ隊員にとって，これまで一人では取り組めなかった規模の大きなイベントにおいて新しく関わることになった人達との関わりや自分の役割の変化を通して何を経験したのか，またそれを今後どのようにつなげていけるかについての見通しを明らかにする．このように新しく挑戦した地域連携のイベントの実践が，その後の業務にどのような変化をもたらす可能性があるかについても考察する．

最後に，本実践研究において見られた課題について考察し，今後の研究課題として提示する．

3．実践の概要

本研究は，2014年2月10日から3月16日の35日間，関西大学総合情報学部（以下：関西大学）がセネガルの青年海外協力隊員と連携した実践事例を対象とする．関西大学では，2005年からシリア，フィリピン，カンボジア，バングラデシュなど途上国で学生主体型の社会貢献活動が実施されている（久保田・岸 2012）．活動に参加する学生の多くは，情報学を専門とし，情報教育の分野での社会貢献活動を実施していた．たとえば，フィリピンでは，現地の小学校教員の授業改善を目的として情報機器の教育活用について研修をしたり（山本ら 2012），シリアでは日本と現地の子どもをインターネットでつないで異文化理解を目的とした教育実践を実施したり（岸ら 2010）している．このように情報学を専門とする学生らが，自ら専門知識や技術を活用して社会貢献活動をする体験型の学習を行っている．

このような体験型学習の一環として，関西大学はJICAの大学連携プロジェクトに参加し，関西大学卒業後，セネガルへ派遣された青年海外協力隊員のもとへ2名の学生を派遣した．

学生を受け入れた青年海外協力隊員（以下受け入れ隊員）は，タンバクンダ州医務局に派遣されている視聴覚教育隊員である．タンバクンダ州では，妊産婦死亡率及び，乳幼児死亡率が高く，住民は質・量ともに十分な基礎保健サービスを受けられていない．更に住民の予防知識不足が，健康問題を悪化させている．このような背景のもと，医務局に配属されている受け入れ隊員は妊産婦健診の普及・定着を目指し，健診の大切さと家族計画の重要性を伝えるための保健・衛生啓発活動を行っている．

受け入れ隊員が，学生短期ボランティアを申請した理由は，その啓発活動のためのイベントを同医務局が管轄する保健ポストと協働で開催するためである．現地との交渉をしながら一人でイベントの企画や啓発教材を作成することは難しい．そのため，受け入れ隊員を補佐し，教材作成の支援とイベントの企画，イベント当日の運営支援のため，学生短期ボランティアを要請した．学生短期ボランティアは，受け入れ隊員と協働し，保健・衛生啓発のための教材作成を行うこと，そして，保健・衛生啓発イベントの企画・運営支援を行うことが求められた．

3.1　短期ボランティア受け入れのプロセス

セネガルへの学生短期ボランティア派遣は，次のプロセスで行われた．

①関西大学は，JICAと協議の上，関西大学の卒業生が青年海外協力隊員として活動している任地に在校生を派遣し，活動の支援を行うことについて合意した．

②関西大学は，JICAから青年海外協力隊員として派遣中の卒業生のリストを受け取り，引き受けてもらえそうな青年海外協力隊員へ連絡を取り内諾を得た．

③青年海外協力隊員は現地事務所に報告し，学生短期ボランティアの派遣を要請した．

④JICAは一般公募してウェブページに広報し，関西大学の在校生がこれに応募した．

⑤JICAは学生からの応募用紙をもとに第一次審査を行った．第二次審査は，東京で面接を行った．

⑥学生は審査に合格した後，JICAでの5日間の事前研修を受けて，現地へ派遣された．

3.2　事前学習から現地到着までの流れ

学生短期ボランティア派遣が決定した後の事前学習から現地での活動までの流れは，表1に示す通りである．以下，それぞれの活動について詳述する．

事前学習

2名の学生短期ボランティアは，派遣前にJICAが提供する研修とは別に次の2つの事前学習に自主的に取り組んだ．ひとつめは，週に一度の勉強会である．毎回，セネガルの文化，フランス語，母子保健・衛生に関する課題，教材開発の方法などテーマを決めて，担当を決めて順番にプレゼンテーションをし，テーマについてディスカッションをした．ふたつめは，受け入れ隊員との週に1度のインターネットを通したテレビ会議である．テレビ会議では，現地での

表1　全体のスケジュール

月　日	活動内容
2013年9月	ボランティア参加の確定
2013年10月31日～	受け入れ隊員との事前学習（インターネットを使ったミーティング）
2013年11月25日～11月29日	JICAによる日本での事前研修
2014年2月10日	セネガルへ渡航
2014年2月12日	現地JICA事務所にて健康管理・安全対策などの研修
2014年2月13日	ダカールからタンバクンダへ移動
2014年2月14日	イベント実施のための準備
2014年3月9日	イベント実施
2014年3月11日	イベント終了の振り返り
2014年3月12日	タンバクンダからダカールへ移動
2014年3月13日	ダカールにて活動報告
2014年3月16日	帰国

具体的な活動について話し合ったり，受け入れ隊員から派遣先であるタンバクンダ州の現状や勉強会で理解できなかったことなど情報収集したりした．また1ヶ月の現地滞在期間中に学生短期ボランティアが担当する教材を完成できるように，西アフリカ圏（フランス語）で使われている手洗いの紙芝居の絵の意味を読み取ったり，フランス語の表現や専門用語を確認したりするなど事前準備を行った．

JICAによる事前研修

事前研修は、各国に派遣される150名ほどの短期ボランティアを対象として，東京で5日間実施された．短期ボランティアは，「JICAボランティア事業の理念」「健康管理」，「安全対策」，「参加型開発手法」，「任国事情」，「意見交換会」などの講座を受講した．

JICAによる現地研修

現地到着後，学生短期ボランティアはJICA事務所での1日の研修に参加し，JICAセネガル事務所が行っている国際協力事業についての説明や，派遣中のボランティアの特徴，特に日本での事前研修と同様に健康管理，安全対策について受講した．東京での研修における健康管理・安全対策の内容は，一般的な病気や感染症や事故についてであったが，セネガル事務所では，セネガルで発病率が高いマラリアの予防法や予防薬の接種方法，緊急事態になった時の対応など現地に特化した内容であった．

3.3　現地での活動：母子保健・衛生啓発イベントに向けた準備

学生短期ボランティアの要請の目的である母子保健・衛生啓発イベントの実施は3月9日であったため，それまでの2月13日から3月8日の約1か月，学生短期ボランティアは受け入れ隊員と連携し，保健・衛生啓発教材の作成および，母子保健・衛生啓発イベントの企画・運営を行った．具体的に，学生短期ボランティアは，下記の5つの活動に取り組んだ．

（1）医療施設見学（州医務局・州病院・保健センター・保健ポスト）

学生短期ボランティアは，まず現状を理解するため，イベントが実施されるタンバクンダ市にあるサレギレール地域保健ポストの各医療施設を訪問した．セネガルの医療施設は，州立病院，保健センター，保健ポストという順に，施設で実施できる医療処置の範囲が異なる．保健ポストは，地域に根差した診療を行い，住民がアクセスしやすい医療施設である．これらの現状を理解するため施設を訪問し，施設で働く人たちのお話を聞いた．

また，イベントにおける啓発活動においてどのような情報をどのように伝えるかを検討するため，各施設に掲示されている教材を参考にしたり，作成する教材の内容について保健センターの助産師の意見をうかがったりした．

(2) 青年団との打ち合わせ

イベントの実施にあたっては，サレギレール地域の青年団と連携した．青年団は，20〜40歳位の地域の青年が参加する団体で，10名程の男性が主要メンバーとなってサレギレール地域住民の生活向上を目指したボランティア活動に取り組んでいる．イベントの企画・準備において，企画の内容やスケジュール，広報活動，役割分担について吟味し，活発に意見を出し合った．

(3) 啓発劇練習

セネガルなど西アフリカにおいて，口承文化が根強く残っているため，イベントでは啓発劇を実施することとなった．青年団のメンバー2名が考えたシナリオを基に，現地語であるウォロフ語とプラール語（サレギレール地域で多く使われている現地語）で，妊産婦検診の重要性を訴える内容の劇を企画した．学生短期ボランティアもまた役者として現地語で演じるため，劇の練習と現地語の学習に取り組んだ．

(4) 保健・衛生啓発教材作成（紙・模型・映像教材）

イベント実施のため(a)妊産婦検診普及のための紙教材，(b)衛生・手洗いの重要性を伝える紙教材，(c)経口補水液の作成方法を伝える紙教材，(d)胎児の大きさと重さを表現した模型，(e)妊産婦体験キット，(f)妊娠・出産について夫婦で一緒に考えていくことを促すためのインタビュー映像教材，(g)妊産婦検診普及のための映像教材の7つの教材を制作した．教材は，フランス語で作成するため，学生短期ボランティアは，受け入れ隊員や現地の人などサポートを受けて完成させた．また，教材が現地の人にとってリアルなものである必要があったため，学生短期ボランティアは市場などで人々が使っている生活用品などを調査し，教材として利用した．

母子保健・衛生啓発イベントの当日の活動

母子保健・衛生啓発イベントは，女性だけでなく男性や子どもも対象とし，妊産婦健診の大切さと家族計画の重要性を伝えることを目的とした．3月9日のイベント当日は，青年団メンバー（約20名），長期ボランティア（18名）が集まり，運営に携わった．

3月9日の啓発イベントでは，(1)ポスターセッション，(2)母親・父親・子ども対象のワークショップ，(3)啓発劇，(4)啓発映像上映，(5)日本文化紹介の5つの活動を行った（図1を参照）

ポスターセッションでは，学生短期ボランティアは下痢の原因と対処法・経口補水液の大切さと作り方をテーマにとりあげ，下痢の原因を説明したのち実際にその場で経口補水液の作り方を実演した．

ワークショップでは，学生短期ボランティアの1名は母親（女性）対象のワークショップとして，胎児の成長による母体への負担・改善をテーマとし，妊娠時の体の変化やそれを軽減するためのストレッチについて紙教材を用いて伝えた．また，もう1名は子ども向けに衛生教育のワークショップを実施した．子どもたちが楽しく細菌の危険性について学べるように紙芝居

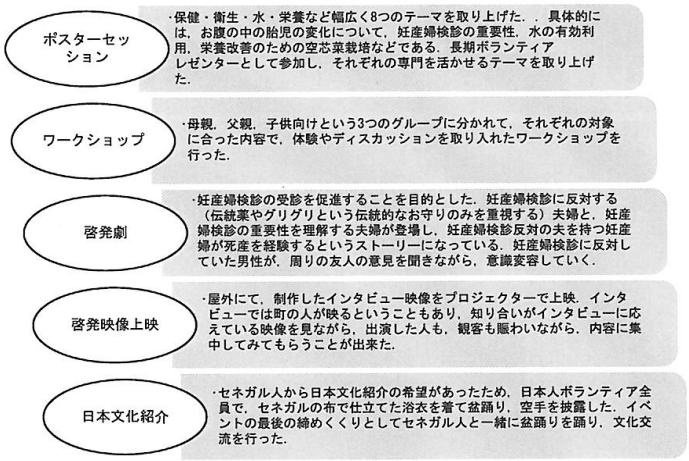


図１　イベントの内容

表２　活動の様子

紙教材を作成する短期ボランティア	青年団との打ち合わせの様子	青年団との打ち合わせの様子
ポスターセッションの打ち合わせ	啓発劇練習中の様子	夕食後のフランス語学習
イベント当日，集まる住民	経口補水液啓発のための紙教材	手洗いワークショップの様子

を使って教え，石鹸で綺麗に洗う方法を実演した．

啓発劇では，学生短期ボランティアは，セネガル人の役者と現地語であるウォルフ語で役を演じた．　当日は150名程の住民が会場に集まった．

日本文化紹介では，学生短期ボランティアセネガルでも人気のある武道である空手を披露したり，日本人全員で盆踊りを踊ったりした．

4．研究の方法

本研究は，アクション・リサーチ（Reason & Bradbury-Huan 2008）に基づいた実践研究である．アクション・リサーチとは研究者と当事者とが共同で取り組む協働的な研究を指す．本研究では，著者らと学生そして受け入れ隊員が共同で，JICAと連携した社会貢献活動の実践のためのデザインモデルの構築に取り組んだ．アクション・リサーチのプロセスでは，実践の中で問題が生じれば積極的な関与を行い，問題解決を目指し、実践をデザインするための要件を明らかにしていく．具体的には，学生短期ボランティアが実践を通して感じた問題やつまずきを洗い出し、それらを解決する中で実践をデザインするための要件を明らかにする．

本研究は役割の違う３名の研究者によって調査を行った．まず，第３著者は，西アフリカでのボランティア経験あり，今回の活動には短期ボランティアとして参加した．２名の学生短期ボランティアをモニタリングしながら，問題があれば積極的に関与して受け入れ隊員と共同でその問題解決に取り組んだ．第２著者は派遣した学生短期ボランティアの指導教員であり，実践をデザインするための具体的な方法を受け入れ隊員にアドバイスした．第１著者は，第２・第３著者と共に参加観察およびインタビューデータを収集し，これらのデータを分析した．実施者と分析者の視点を分けることで，分析の結果の客観性を保証した．

4.1　データ収集と分析の方法

本研究では，下記の２点について明らかにする．ひとつはプログラムに参加した学生の学びである．大学が教育プログラムとして実施する上で本プログラムが有益であるかどうかについて，学生の学びに焦点をあてて評価を行う．ふたつめは，受け入れ隊員にとっての利点である．途上国での活動経験が少なく，専門知識や技術が十分にない学生を受け入れることは受け入れ隊員にとって大きな負担となるが，大学との連携は受け入れ隊員にとって新しい活動への展開となる可能性がある．インタビューおよび参与観察をもとにこの２点を明らかにした上で，双方にとって有益な実践をデザインするための要件を分析し，学習環境のデザインとして提案する．

これら２点を明らかにするために，下記の４つのデータを収集した．なお，表３は，学生短期ボランティアのバックグラウンドを示したものである．

(1) 参与観察

第3著者は，プログラムの事前学習から実施終了までの一連の活動に参加して，モニタリングおよび積極的な関与を行った．第1および第2著者は3月6日から15日の間，セネガルでの活動現場にて参与観察を行った．第1著者は，現地到着後，第3著者から学生の現地での活動状況（特に，何につまずき，どのような支援をし，何が解決されたか）について詳細な情報を収集し，第1・第2著者と積極的に意見交換しながら，現場の状況を理解するためのデータを集めた．収集したデータは，実践中に学生が直面した課題，課題に対する解決方法，その結果という3つの時系列で整理をした．

(2) グループインタビュー

イベント終了後の翌日，受け入れ隊員と学生短期ボランティア2名に対してグループインタビューを行った．インタビューの時間は160分35秒である．半構造化インタビューを行い，①現地で経験したこと，②経験を通して学んだこと，③解決できた課題，できなかった課題，およびその理由についての質問を含みながら自由な対話形式で学生らの実践を通した経験についてデータを収集した．そこで得られたデータで不明な点は，グループインタビュー後に個別にインフォーマルなインタビューを行い，追加のデータを収集した．

収集したデータは，実践を通して学んだことを軸として意味のまとまりごとにコード化した．類似化したコードをまとめてカテゴリーにし，その後，カテゴリーの中から短期ボランティア制度だからこそ経験できたことを分けて考察した．

(3) 最終報告会のプレゼンテーション

活動終了後，学生短期ボランティアはJICAセネガル事務所にて本活動についての成果報告会を行った．15分間のプレゼンテーションの中で，実践の概要（活動の目的と方法），派遣前の活動，活動の具体的な内容，1ヶ月の活動の成果（現地に適したポスター・映像などの視聴覚教材の作成，イベントの運営，セネガル人の保健衛生に対する意識改善，他の保健ポスト・保

表3　参加した学生のバックグラウンド

	学生A	学生B
学年	4年生	3年生
性別	男性	男性
海外経験	フィリピンで社会貢献活動を経験	フィリピンで社会貢献活動を経験
参加の動機	アフリカに行きたい	アフリカに行きたい 青年海外協力隊に関心がある
フランス語	学部時代に副専攻で履修	学部時代に副専攻で履修
現地で必要な映像編集や教材作成のスキル	高齢者向けのパソコン指導のための際教材制作の経験あり	なし

健イベントへの応用の可能性)，セネガル人との交流，課題について説明されたため，この内容もデータとした．

(4) JICA職員との意見交換会での会話

活動終了後（帰国前日に)，セネガルJICA事務所の所長および職員と学生短期ボランティア，受け入れ隊員，筆者ら間での意見交換会の会話もフィールドノートに記録しデータとした．学生は，JICAのプログラムに参加した社会貢献活動と他の社会貢献活動との違いについて意見交換した．また，受け入れ隊員は，本プログラムを実施するにあたりJICAからの必要な支援について意見交換した．

5．分析の結果と考察

5.1　JICAと連携した短期海外研修の特徴とその中での学生の学び

インタビューデータの分析の結果，JICAの大学連携プログラムに特徴的な学びとして次の5点について述べた．

(1) 自分の専門性に対する内省

学生短期ボランティアは，本実践を通して受け入れ隊員以外にも，様々な専門を持つ青年海外協力隊員と出会い，話を聞く事ができた．会話の中で「専門は何か」「職種は何か」という話題になることが多い．そして，何故その専門なのか，何故国際協力に参加することになったのか，といった青年海外協力隊員の話を聞く中で，専門性を持つことを強く意識するようになった．彼らは，本実践の前にもそれぞれフィリピンで社会貢献活動を実践している．情報学という専門を持って現地でICTを活用した支援活動をしていた時は，ある程度自信をもって活動していたが，実践を通して自分の専門知識や技術の未熟さを実感していた．たとえば，学生Bは，「いろんな人の話を聞いて，関大の総合情報学部にいれば，ある程度，海外に行ったりとかしてるんだけどちやほやされることがあったんですけど，実際にボランティアの集まるところに行ったら，そんな自分がまだまだ未熟やなということを痛感しました．(学生B)」と述べている．そして，この経験を通して，自分の専門は何か，これからどういった専門性を身につけていきたいかについて考えるようになった．たとえば，将来，国際協力に関わりたい学生Bは「(今までは大学の授業を）なんとなく履修はしているけれど，それだけでは自信を持てるものっていうのはないです．僕にどんな専門があるんだろうか…（学生B)」「僕はそんなに視聴覚のプロフェッショナルじゃないので，あまり自信が持てなかった．社会に出て自分がちょっとでも自信が持てるようなことを身に付けたうえで，(青年海外協力隊の）2年にチャレンジしたいと思います（学生B)」と述べ，学生時代に何を経験し，その後社会に出てどのような専門性を身につけていくか見通しを立てた将来設計を意識するようになった．学生Aも同様に専門性を持

つことの必要性について意識するようになっていた.「情報学部だからハードもソフトも両方ができると現地の人は思うので，いろいろ頼まれるけれど，それができないというと，それできないのか，と期待されていたことに気付く．全部をまんべんなくできるほうがいいと思った.(学生A)」と，情報学という専門で何を自分が学ぶべきであったかを考えるようになった.

(2) 現地語への関心

学生短期ボランティアらは，現地語かフランス語しか通じない状況におかれ，大きなショックを受けた．彼らがこれまで活動してきたフィリピンでの社会貢献活動では，現地語が話せなくても英語ができれば，コミュニケーションをとることができた．国際協力に携わるためには英語は必須という前提の中で，セネガルに渡航し，英語が全く通じない状況に置かれ,「やっぱり英語だけじゃ駄目なんだなって気づいた．(学生B)」と述べていた.

学生らは，買い物など日常生活においても言葉が通じないため，思うように物事を進めることができないくやしさを感じていたが，日々の生活の中で使える表現を少しずつ習得し，コミュニケーションを楽しむようになっていた．また，現地語を少しでも話すことでセネガル人と友好な関係を築けるという経験から現地語への関心も高まった．活動地のタンバクンダでは，フランス語以外に，ウォルフ語，プラール語，ジョラ語が話される．学生らは，様々な言語での挨拶を覚え，現地の人との会話を楽しんでいた.「現地語で覚えたことが，日常の生活でも通じるんですよ．呪文みたいなものなのに通じた．なんでお前知ってるのって．現地語で笑いをとることができるようになった．(学生A)」．フランス語も現地語もなかなか上達できなかった学生Bも「ウォルフ語もフランス語もどっちも僕にとっては呪文なので大変でした.」とその苦労を述べていたが，少しでも多く単語や表現を覚えて現地の人と交流しようとしていた.

現地に友達が増え，親しくなったりすればするほど，伝えたい，話したい，知りたいという気持ちが生まれ，その度に語学への壁を感じていた．しかし，学生短期ボランティアらは青年海外協力隊員らと一緒に活動し生活する中で，彼らがよく使う表現や単語を聞いたり，セネガル人が反応するやりとりのパターンを何度も聞いたりしているうちに，使える単語や表現を真似することで，それらを自分のものにしていった．たとえば，受け入れ隊員が日々の生活の中で使っていた「ナンガデフ（こんにちは)」という挨拶のやりとりを，学生短期ボランティアらは真似して使うようになっていた.

(3) 現地の人との深い協働関係のつくりかた

学生短期ボランティアらは，本実践とこれまでの社会貢献活動の違いのひとつとして，現地との協働の深さについて述べていた．学生Aは,「共通点は自分のやらなあかんこと，自分ができることを自分で見つけてやるっていう面では一緒だと思います．自分のできることを把握して，自分のできることをやっていて，さらにプラスでやることあったらやるっていう．そういうところをちゃんと考えて動くというのはどっちも一緒です.」と述べる一方で,「違うとこ

ろは，規模の大きさとか，やっぱり，長期（受け入れ隊員）のところに短期がはいるという形なので，先導してくれる人が現地にいるので，深いかかわりの中に入れるというのが違うと思いました．（自分たちがこれまで関わってきた海外での社会貢献活動）プロジェクトだとずっとそこにいるわけじゃないじゃないですか．日本に帰って，日本と海外でやりとりして，たまに行って，そこでやるっていうのだけれど，JICAのほうは長期でずっといる人がいるので，関係性ができているからそこに入っていける．見える世界が全然違う．」と述べ，現地との協働の深さによって，理解できることの違い，関わり方の違いがあることを知った．そして，そういった関係は，長期間かけて築いていくものであることも実感していた．学生Bは，ここでの経験をフィリピンでの社会貢献活動に活かすのであれば，「（これまでは）現地で成果を残さなきゃいけないって必死になっていたので，もう少しそんな緊張をせずにやりたいようにやっていきたい」と述べ，現地の人とともに関係性を築きながら，共に少しずつ進めていくことの大切さに気づいた．

（4）現地の人の目線を意識した教材制作

学生短期ボランティアは3月9日の啓発イベントにむけて，それぞれ自分が担当するワークショップの準備やそこで使う教材制作の際，現地の人たちの目線を意識しながら進めていた．たとえば，「（ポスター制作も）体型とか格好とかも違うし．最初に書いてきて，こっちの考え方を押し付けるんじゃなくて，現地のやりかたに合わせて理解を深めるようにしたいとか．（学生A）」「こっちにきて，女性を観察っていうか，視点を持ってみることができたと思います．こっちきてから（現地の人の目線や理解の度合いにあわせて）やる（準備する）ことにしてよかったと思います（学生B）」と，ワークショップの対象となる現地の人たちが理解しやすいように表現方法を工夫していた．教材制作について事前学習していたこともあり，対象者の立場にたった教材制作を現地でも実践できていたといえる．しかしながら，事前学習をしたからといって，すぐに準備したことを実践できるわけではない．学生短期ボランティアは現地の人たちの目線をどのように理解することができたのだろうか．彼らは，現地の人たちの目線を理解するため，タンバクンダ州医務局で働いているカウンターパートと積極的に意見交換していた．たとえば，学生Bは，下痢になった場合に飲む経口補水液の作り方について説明する際，経口補水液が大切な理由を説明したほうがいいのか，シンプルに作り方を伝えるだけでいいのか，について悩んでいた．これについて「やっぱりカウンターパートも言っていたんですけど，専門的なことを言いすぎても，なかなか理解されない．でも，僕は，簡単にしすぎて，効果が下がってもいけないし，意味が伝わらなかったらいけないかなって．（学生B）」というように，自分の考えに対してカウンターパートから意見をもらい，それを無批判に受け入れるのではなく，意見交換を重ねて，適切な方法を模索していた．また，学生短期ボランティアと一緒に活動をしてきた青年団のメンバーとは毎日顔を合わせる機会があり，彼らの意見も聞くことができた．このように，自分たちの考えをもとに一緒に考えてくれるカウンターパートや青年団の

メンバーの存在は，学生短期ボランティアにとって現地を理解する重要なリソースとなっていた．そして，現地の人の学生短期ボランティアとの関わり方は，それまでに受け入れ隊員との関係性の上に成り立っており，カウンターパートと青年団メンバーは受け入れ隊員が学生短期ボランティアに接するように丁寧に学生短期ボランティアの問いに応えていた．

(5) 学びの新しい形態；協働関係の作り方

学生短期ボランティアは，青年海外協力隊員らと活動する中で時々不安や孤立感を持つことがあった．青年海外協力隊員は現地に通じており，また現地語ができるのですぐにセネガル人と仲良くなる．また協働する際，それぞれ専門性を発揮して自分が何をすべきかを判断し行動していく．一方，学生短期ボランティアは「長期隊員（青年海外協力隊員）の人と一緒になったとき，短期感がでてしまって.」と口を揃えて述べ，協働関係を構築する難しさを感じていた．学生Aは他の社会貢献活動での経験と比較して，「フィリピンでの活動は何年も活動しているし，指導教員もコネクションもあるので，土台がしっかりしているから行って活動できますけど，セネガルでは，こっちの人と関係性を作るのも簡単じゃない.」と，新しい土地で最初から協働関係をつくることの難しさを感じていた．しかし彼らは現地の人たちとの協働関係を，受け入れ隊員や経験のある他の隊員らの支援によって構築するようになった．たとえば，「自分たちだけではなかなか中に入っていきにくかったけれど，（受け入れ隊員や他の隊員らに中に入ってもらって，現地の人や他の隊員と）一緒にインタビューしたり，そういう機会を作ってもらってすごしやすかったです．（学生A）」と述べており，受け入れ隊員や他の青年海外協力隊員がセネガル人との協働の仲介役になっていた．

学生短期ボランティアは，現地との良好な協働関係を構築するためには日々のインフォーマルな場面での関係性構築が重要であることに気づき，それを積極的に実践していた．ひとりひとりとの長い挨拶，無駄話，冗談，そういったことを楽しむようになっていた．学生Bは，こういった関係性を構築するためには，趣味や関心を幅広く持つことが大切だということに気づいた．共通の趣味や関心があれば，お互い知らない間でも親密感が生まれる．学生Aは，サッカーなどで共通点があり現地の人とすぐに仲良くなれたが，学生Bは共通点をなかなか見いだせず悩んでいた．「サッカーの話題をちょっとでも知っていたら，選手の名前とかだけでもすごい盛り上がるじゃないですか．学生Aさんはサッカー見るのも好きで，セネガル人の選手の名前も知っていたので，その名前を言うとみんなでテンションあがっていくけど，僕はそれを知らない．空手とかもちょっとやって見せるだけでも，こっちの人は喜んでくれるじゃないですか．でも，僕空手も知らない．Aさんがどんどんコミュニケーションをとっているのをみつつ，やばいやばいって思った．（学生B）」というように，現地で人間関係を構築するためにはインフォーマルな場で関係性が構築できることも重要で，そのためには共通の趣味や関心を持てるように日々関心を広げていくことの大切さを実感していた．

5.2　受け入れ隊員が学生など複数の関係者が関わるイベントの実践を通して経験したこと

受け入れ隊員は，学生短期ボランティア受け入れのため，新たに地域連携のイベントを計画，実施することになった．イベントを実施するためには，現地の青年団との密接な連携，イベントのための場所や時間の確保，広報，教材や広報物の制作，啓発劇の練習など様々な準備が必要になる．これらを現地のカウンターパート，他の青年海外協力隊員，そして学生短期ボランティアと協働してどのようにイベントを作り上げることができたのか．経験を通して見えてきた可能性および課題として次の７点があげられた．

(1) 学生に対する知識・技術面での期待との齟齬

受け入れ隊員は，学生短期ボランティア受け入れの条件として，調書に「どのような技術が必要か」を明記していたため学生短期ボランティアがこれを理解し活動に必要な技術を取得した状態で現場に来ることを期待していた．しかし実際には十分な技術を持たないまま現地に派遣されてきた．これは，単なる学生短期ボランティアの準備不足ではなく，調書に示されている技術の程度を学生短期ボランティアが明確にイメージできなかったところに理由があった．学生短期ボランティアは，「リアリティの問題を感じたこともあります．今思うと（日本で練習してみて）分からないところは解決してから来たほうが良かった．そのほうがこっちにきてから，編集ももっとスムーズにできたと思います．」と，映像編集についてもどこまで求められているかが分からず，十分な準備がないままに渡航した．

また，言語や活動内容についても同様の問題が見られた．言語についても，学生らは事前に大学でフランス語を科目履修し準備はしてきたものの，リアリティを感じないという理由から本気で取り組めなかった．また活動内容についても，妊産婦とその夫への啓発活動をすることを伝える活動であることを調書や事前のテレビ会議を通して伝えていたが，これらも内容についての事前準備が十分ではなかった．この現状に対して受け入れ隊員は，「妊産婦検診の大切さとか，妊婦の体の変化について理解してもらうという目的が決まっていたので，そこに合わせたある程度の言葉の学習は事前にしてきてほしかった．また，技術のほうも，やる目的が決まっていたので，そこに合わせてプレミア（編集ソフト）もそうだし基本的なことはできるようになってきてほしかった」と述べる一方，「会ったことがない学生だし，彼らに何ができるかわからなかった．自分の学部生のころと違うし，こっちにきて私の感覚と二人の感覚が違うというのがわかった．」という反省点から，「自分の中で当たり前だと思っていたので言わなかったんですけど，何を事前に勉強しておくべきか，また，こっちにきてからそれらを勉強する時間がないということも含めてこちらも明示しておくべきだった．」と，学生短期ボランティアと協働する際の考慮点としてリアリティの付与と明確なインストラクションの必要性をあげた．

(2) 学生のケアに対する負担を軽減させる役割分担の工夫

受け入れ隊員にとって大きな負担のひとつは学生短期ボランティアの「通訳」であった．業

」

務だけではなく，日々の生活，たとえば，食事の際のメニューの注文，買い物などすべての場面で最初のころは通訳をしなければならなかった．学生短期ボランティアの危機管理も受け入れ隊員が任されているため，現地語がわからない学生短期ボランティアを，業務以外の時間だからといって放置するわけにはいかない．この負担はとても大きい．本実践では，第3著者が事前学習から現地での活動まで行動を共にしたため，その負担を分担することができたが，受け入れ隊員だけでそれを担うのは大変難しい．そのため，学生短期ボランティアを受け入れる際には「言葉の面は，まず，基本的な日常会話．これができないと生活ができない．活動期間は1か月と時間もないし，せめて日常生活は話せるようにしておいてほしい.」と事前学習の段階で語学については特に準備すべきであると考える．

一方で受け入れ隊員は，短期ボランティアという制度には事前に語学研修を受ける制度はないため，現地での活動の工夫が必要であると感じていた．そこで，言語に頼らずにできる個別の活動と，言語を学ぶきっかけとなるセネガル人と連携した活動の両方を学生たちの業務として与えた．言語に頼らずできる個別の活動としては映像編集，セネガル人と連携した活動は劇やワークショップの実施である．このように，学生短期ボランティアの立場を考えて，彼らに充実感，達成感，現地の関わりを持てるような役割を与えながら業務を分担しイベントの準備・運営を行った．

(3) 学生の異文化の中の精神的負担への対応

学生短期ボランティアは，JICAの短期ボランティアとして正式にプログラムに参加しているというプレッシャーもあり，成果を出さなければいけないとか，受け入れ隊員に迷惑をかけてはいけないとか緊張状態の中で活動をしていた．しかしながら，活動の最中には「なんかあれも，やらなきゃいけない，と思いつつも，あまりやれていなかった．それがちょっと，そういう（さぼってしまう）習慣がついてしまっているし，それは直さなきゃいけないとは思うんですけど．(学生B)」，「なんかひきこもり気味になったこともありました．外にでるのがしんどいとおもうことがあった．(学生A)）というように精神的に辛い時期も経験していた．

受け入れ隊員は，学生短期ボランティアの状況に注意を払い，励ますように声をかけていたが，こういった励ましの言葉が逆に学生の負担になることもあった．たとえば，学生Bは，「なんかみんなに日に日に元気ないんじゃないって言われたりすると，そう思われないようにどうにかしないとって思うんですけど，そうすればするほど，どんどんなんか元気をあるようにみせなきゃって，変に意識してしまってどうしたらいいかわからなくなって，どんどん，どーんてテンションさがってきて．隊員の人もそれに気づきだしたのか，”なんか元気ないよね”っていってきてくれて．そうじゃないところを見せないといけないなって思って，それもプレッシャーでしたね．大丈夫って言われれば言われるほど，大丈夫じゃなくなっていく．大丈夫じゃないですっていえないじゃないですか．(学生B)」と集団でいるからこそ，頑張らなければ行けないプレッシャーに疲れてしまうということもあった．学生短期ボランティアは青年海外協

力隊員と異なり短時間の間に新しい環境に慣れ，人間関係をつくり，活動していくため精神的な負担も多い．受け入れ隊員は，学生短期ボランティアの状況を日々の生活の中で確認はしているものの，見ているだけでは分からないこともあるため，学生短期ボランティアが何を考え，何を感じているかを知る機会，たとえば，内省の場を共有する必要性を感じた．

(4) 教育的観点をもった支援方法

受け入れ隊員は，学生短期ボランティアが教材制作をはじめワークショップを準備している様子をみて，学生短期ボランティアにセネガル人の日常の生活を経験させたかったと振り返った．たとえば，「Bくんがワークショップのときに何ミリリットルの水に塩をひとつまり，砂糖をいくらという話をしたときに，ここで何ミリリットルって誰も測ってないし，みんながよく水を飲むものってコップみたいなものなんですが，それはどんなに貧しい家にでもあるって自分は知っているからわかるけど，人の家にいった経験がほとんどなく，いってもお金持ちの家ばっかりだからみてないだろうし，そういうのを見れる環境をつくれればよかったと思った．」と，学生短期ボランティアの現地での活動をより円滑に進めるためには，セネガルでの日常の生活を経験してもらうことが必要であったと振り返る．1ヶ月という短い期間に，現地での活動以外に，地元セネガル人の日常の生活を経験させる時間をもつことは簡単なことではないが，「私だって最初はわからなかったことなので，見せたところで分からないことが分かるというわけではないけれど，イメージをもってもらうことができるし，私が説明するときも，あの家のあそこで使っていたコップといって，二人とも共通のイメージを持つことができたと思う．」というように，協働の土台となる共通の経験の必要性を述べた．

(5) 日々の生活・活動を異化することによる内省

受け入れ隊員は，学生短期ボランティアと関わる中で，当たり前となっていた日々の生活や業務を異化し，内省することができた．たとえば，「短期ボランティアの視点からもう一度活動や生活を見直すことができた．挨拶にしても，最初はあの長い挨拶を楽しんでいたけれど，今では，急いでいるからと流してしまっていた自分がいたのでは？と気づく．短期ボランティアの人が喜んだり，驚いたりしているのをみて，生活や活動を見直すことができた」というように学生たちを通して，着任当初の自分を思い出し，当たり前の日常の中で見落としていた日々の面白さを再認識するようになった．

(6) 地域との新しい連携

妊産婦の問題の関係者である母親・父親・子どもを対象に同時にワークショップをするという大規模なイベントはひとりの隊員だけでは実施が難しい．ワークショップには，母子保健の重要性を知ってもらうための教材が必要となるが，教材を制作するためには現地調査を含め人手が不可欠である．学生短期ボランティアが参加することをきっかけとして，所属していたタ

ンバクンダ州医務局だけではなく地域の青年団らとも連携して実践することになった．このイベントを計画・実施するにあたり地域の関係者と連携が必要となり，「ひとりではこんなに地域の人や保健ポストの人と関わる事がなかったが，全体で取り組んだため，深く関わる事ができた．そういうのが無い限り一緒にひとつのことに全体で取り組むことはない．一緒にやったからこそ，しっかりみんなで関わる事ができた.」というように，これが彼女の地域との連携をさらに強めることになった．

同時に，新しく連携する団体との協働は想像以上に困難で，「私は個人的には，疲れました.」と協働した青年団と継続して連携する予定はないが，「ほかにも団体はあるし，関わりたいとおもっている保健ポストもあると聞いたので，その人たちと会ってみてもいいかなって思います.」と，地域の青年団など新たな連携を拡大することについて可能性を見いだすことができるようになった．

(7) 他の隊員との連携事業への展開

受け入れ隊員は，このようなイベントを通して，他の青年海外協力隊員との連携の可能性を実感することができた．「こうやって短期の人も長期の他の隊員の人も参加して，誰かと一緒にやるというイメージとかそういう体験があると，次にその人たちもつながるし，そのイメージを持つことができた.」と，協働してひとつのイベントをつくりあげるという経験が，受け入れ隊員だけではなく他の青年海外協力隊員にとっても次の活動をイメージ（予測）につながっていた．また，協働の経験だけではなく，制作した教材も活動を拡大するきっかけとなる可能性がある．たとえば，「村とかになると保健ポストは，その周辺の一番大きな病院になるので，ここのポスト以上に人はきているし，需要もやっぱりいっぱいあるし，物資もすくないなど問題もかかえていると思うので，そういうポストで働いている隊員さんと今回作った教材とかを使ってこういう啓発ができたりとか．作ったもの以外でも作った経験を活かしてこういうことができそうだなあって，次につながりそうな期待があります.」と，制作した教材や制作を通して得た技術を土台に，新しい活動へと展開する可能性を述べていた．

6．実践の課題と今後の研究への展望

本研究では，JICA の大学連携プログラムに参加した学生短期ボランティアおよび受け入れ隊員が，何を経験しそこから何を学んだかについて明らかにした．5.1および5.2では，それぞれ学生および受け入れ隊員が実践を通して経験したことを，インタビューデータを引用しながら詳述した．本節では，これらの経験をもとに解決できなかった課題を示し，次への研究への展望としたい．

6.1　活動のイメージの共有

学生短期ボランティアに現地での活動のイメージを持ってもらうため，3ヶ月の事前学習を設けた．事前学習によって，学生らは渡航前にある程度活動の準備をすることができたため，「こういうワークショップをするということは決まっていたので，日本で準備できることは何かということを，考えていって，いってもらったことで，準備しないといけないなって気持ちになりましたし，準備してこっちにきたので，まったくなしできたら，やっぱりめちゃめちゃ厳しかったなあって思います．（学生B）」というように，準備したことを土台に現地の実践に円滑に参与できた．

一方，事前学習では受け入れ隊員とインターネットを通して事前に打ち合わせを何度か重ね，母子保健についても資料をもとに勉強会をしたり，実践で必要な技術を練習したりして現地で実践できるように準備したが，学生短期ボランティアは現地にいって「勉強不足であった」と振り返った．「医務局のほうとか専門のことも，（現地の人と）こんなにやりとりするとは思っていなかったので，このやりとりがイメージできてれば，もっとフランス語をやっていたのかな，って思いました．（学生A）」と述べ，受け入れ隊員と学生短期ボランティアの間に期待の齟齬があったことがわかる．しかしながら，どれだけ現地での活動について説明されたところで，経験のない学生短期ボランティアがそれをイメージするのは難しく，また，受け入れ隊員にとってもこれまで協働したことがない学生短期ボランティアに何ができるのか，どう協働できるのかを予測することはほぼ不可能である．実際，受け入れ隊員は「事前の準備もあったのでそれぞれ担当はきまっていたんですけど，その分量が，適格か，多すぎか，少なすぎか，どれくらい任せていいのか，不安だった」と述べ，どのように学生短期ボランティアと協働できるかについて実践前から不安を持っていた．そのため，事前学習では，その齟齬を前提として事前学習が現地での実践の参加のきっかけ（土台）となるようなデザインをする必要がある．

6.2　異文化間での協働の仕方，役割

学生短期ボランティアが現地での活動のイメージがもてない理由のひとつは，学生短期ボランティアが現地の人との協働の仕方が分からないことであった．つまり，何をすべきかが分かっていても，それをどう進めていけばいいかが分からなかった．受け入れ隊員は，学生短期ボランティア受け入れの業務調整に加え，日々の活動，イベントの準備で忙しくしていたため，学生短期ボランティアは受け入れ隊員に対して「（受け入れ隊員に）申し訳なくて，どんどん聞けなくなっていた．本当に．つきっきりで申し訳なくて，僕ら2人でやってしまっていた．どうしたらいいか，ということを解決できなかった．（学生A）」と，分からないことをその場で解決できない状況に置かれていた．そのため，ポスター制作や映像編集に必要以上の時間をかけたり，分からない事があったときそれをどう解決すればよいか分からずそこで立ち往生したりしていた（参与観察より）．本実践では第3著者が介入し，現地の誰に相談して進めればいいか，現地の誰に協力を得ればいいか，現地の時間感覚ではどのように活動のスケジュールを立

てればいいかなどアドバイスしたりした．その結果，「何をやらないといけないかが分かっているとやりやすかった．それをやるっていうやる気は出たと思います．どれをしっかりやればいいかがわからなかったところがあって．（学生A）」「教材作成とかのスケジュールも（第3筆者や受け入れ隊員さんがいなかったら）いついつまでにやってっていうのを自分たちで決めて作業を進めれなかったと思います．（学生B）」と現地との協働の仕方が理解できたころには，実践に積極的に参加することができるようになった．

以上のことは，異文化間での協働において役割を適切に配置する人の重要性を示している．

6.3　言語面

英語を母国語としない地域でのプログラムについては，言語の事前学習について十分に検討する必要がある．受け入れ隊員の最大の負担のひとつが，日常および業務内での通訳である．すべての場面において，通訳をしなければ協働を進めることができない．本実践では，言語に頼らずにできる個別の活動と，言語を学ぶきっかけとなるセネガル人と連携した活動の両方を学生短期ボランティアの業務として役割を与えることで，この問題に対応したが，言語の問題がすべて解決されたわけではない．学生短期ボランティアにとっても言語が通じないというストレスは大きい．「なんかアイデアがあっても自分から提案できないし，聞いてても，ほんまに単語をひろって妄想してイメージするしかなくて何もできなくて悔しかった．やりたくてもできない．言いたいことがあってもいえない．全然言葉ができなくて．しっかり調べるんですけど，最低限のことは，日常で使う言葉は一応覚えたんですけど，難しい話は全然ついていけない．（学生B）」「なんかくやしいっす．何もできない．日本では何もできなくてもしゃべることができる．英語でも小学校，中学校である程度英語をやってきたので，ある程度理解できる．でもここでは全くわからなかったので．それでも，まわりはみんな活動をしていて，僕らはその中に入ろうとしたんですけど，難しい（学生A）」と言語の不自由さを強く感じていた．一方，学生短期ボランティアの異文化での学びの観点から見れば，言語が通じないというくやしさの経験は，学生たちに英語以外の言語の重要性，学び楽しさを発見させるきっかけになっていた（5.1.（2）現地語への関心ー英語以外の言語への関心ーを参照）．しかしながら，受け入れ隊員の負担軽減は，検討すべき課題である．JICAおよび大学という制度を活用して事前の言語習得または現地での言語に関する問題に対してどのように支援するかをデザインすることが必要である．

6.4　活動の形態

本実践では，たった1ヶ月という短期間でイベントの準備を完了して，実施しなければならなかったため，事前準備が不可欠であった．そのため，本実践では，3か月間から学生短期ボランティアとインターネットを通して実践の準備をしたりしてきた．しかし，現行の短期ボランティア制度では，事前学習にこれほど時間をかけることはできない．そのため，受け入れ隊

員との交流も事前学習も十分にできないまま渡航することになる．このような場合，本実践のようにイベント型の連携（活動拡張型）を行うことは難しいだろう．

では，現行の制度の中でどのような連携ができるのだろうか．ひとつは，受け入れ隊員の日々の業務の一部を手伝うというものである．今回のように新しく活動を生み出すのではなく，日々の業務の一部を周辺的な立場から参加し手伝い，隊員の活動を通して国際協力を経験する形態（業務支援型）がある．たとえば，村落でのフィールド調査などでインタビュー調査や映像撮影を手伝ったり，体育なので測定を手伝ったりすることである．少しずつ業務内容を高度なものにしながら学生短期ボランティアにできる範囲で参加させることができる．また，受け入れ隊員の活動に参加する形態（活動観察型）がある．現地の人たちと同様に隊員が提供するサービスを受けたり，隊員の活動を観察したりする参加形態もある．現地の人の立場から国際協力でどのような活動が行われているかを見たり，聞いたりすることで経験することができる．

いずれの形態であっても，学生短期ボランティアにどのように実践に参与させるかの実践のデザインを受け入れ隊員だけに頼っていいかという課題は残る．本実践では，受け入れ隊員と著者らが連携して実践をデザインしモニタリング・支援を行ってきた．受け入れ隊員にとっては，「別にやらせなくても自分がやったほうが早い．翻訳とか，自分でやったほうが早いと思う．」というように自分に負担がないような形態で学生を参加させることもできる．しかし，「でも，せっかく来てもらっているんだし，何か得てもらいたいという意識をもっていたからこそ，もどかしかった．そうじゃなかったら，場を盛り上げる役だけでもいいという考え方もできた．けどやっぱり，せっかく大学のうちに，こんなところまできてくれて，なんとなく楽しかっただけで帰っるんだったら，意味ないし，何か得てもらいたいっていうのがあった．」と地域にとっても有益な活動としたいという気持ちがあるからこそ，受け入れを快諾している．そのためにも，すべてを受け入れ隊員に任せるのではなく，たとえば，本実践のように大学教員と連携して実践をデザインしたり，第3著者のように学生短期ボランティアと受け入れ隊員の間をつなぐような役割の人が参与したりする工夫が必要だろう．

付記：本研究は、関西大学の平成24・25年度教育研究高度化促進費から助成を受けている。

参考文献

岸磨貴子，今野貴之，久保田賢一（2010）「インターネットを活用した異文化間の協働を促す学習環境デザイン－実践共同体の組織化の視座から－」『多文化関係学会』，Vol.17，pp.105-121

工藤和宏（2009）日本の大学生に対する短期外国語研修の教育的効果－グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察－．スピーチ・コミュニケーション教育 22（2）：117-139

Liu, Ruo-lan; Lee, Hsin-hua (2011)" Exploring the Cross-Cultural Experiences of College Students with Diverse Backgrounds Performing International Service-Learning in Myanmar", New Horizons in Education, v59 n2 p38-50

JICA「青年／短期ボランティア募集要項」http://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-seinen/require/

文部科学省（2011）産学官によるグローバル人材の育成 のための戦略．産学連携によるグローバル人材育成

推進会議.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf (2014年7月27 日参照)
山本良太，今野貴之，岸磨貴子，久保田賢一（2012）海外フィールドワークにおける学習を促す要件の検討ー協働する他者との関わりに注目して――日本教育工学会論文集，36巻――Suppl. 号，pp.213-216
お茶の水女子大学（2015）グローバル協力センター http://www-w.ao.ocha.ac.jp/intl/cwed/ (2015年1月28日参照)
明治大学（2015）国際協力人材育成プログラム http://www.hric.jp (2014年7月27日参照)
早稲田大学（2015）早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター http://www.waseda.jp/wavoc (2015年1月28日参照)
Reason, P., W. & Hilary Bradbury-Huan (2008) The SAGE Handbook of Action Research, Participative inquiry and practice, London: SAGE Publications Ltd (Second Edition)

7章　スウェーデンにおけるサービスラーニングの事例

アレキサンダー・ベネット（関西大学国際部）

スウェーデンにおける「武道リハビリサービス・ラーニング・モデル」

国　：スウェーデン
地域：ラップランド地方、ノールボッテン県、ルレオ市
人口：45、467 人
大学：ルレオ工科大学

【はじめに】

ルレオ工科大学が Pontus Johansen 氏の指導のもと、体育専攻の学生に、幼児教育、身体および精神健康の促進、そして高齢者および事故の犠牲者のリハビリテーションに関して一般地域社会で自分たちの知識を活用することを奨励するプログラムの開発に取り組んでいる。同プログラムは開発中であるものの、日本の武道で、特に身体的および精神的障害を持つ者の為のリハビリテーションの可能性が興味深い。スウェーデンで開発されている武道のサービスラーニング・モデルは、日本の高齢化問題を考えると間違いなく妥当と思われる。このスウェーデンの実験は伝統的な身体文化を実践する上で、日本でこれまで使用されなかった未開拓の使用方法を論証し、いかに学生と地域社会がこの知識から利益を得ることができるかを論証できる可能性を秘めている。

この事例研究は、日本での実践活動に応用可能であり、特に事前・事後研修に示唆を与えることが期待される。スウェーデンのモデルが日本の社会的および文化的状況に合わせてどのように適応・参照することができるかを調査することを目的として 2012 年 8 月にデータ収集のためにスウェーデンを訪問した。

【サービスラーニングとは】

学校教育とコミュニティにおける関連サービスを組み合わせた教授法である。提唱者は、原則と実践が適切な社会的背景において直接適用され、かつ、教員の指導のもとに得た経験内省と併せて学生が学校教育を通じてそれらを学ぶことにより、学習という行為がより高まると主張する。

サービスラーニングは、以下の項目のように様々な形態をとる。

①直接的サービスラーニング：個人対個人で顔をあわせて行うプロジェクトで、学生から直接的支援を受ける個人に対してサービスが影響を与えるもの（家庭教師、高齢者を扱う仕事、オーラル・ヒストリー、ピア・メディエーション等）
②間接的サービスラーニング：特定の個人ではなく地域にとって有益なプロジェクト（すなわち環境、建造物、復興、町史、食料および衣料の寄付を募る活動など）
③提唱型サービスラーニング：仕事、活動、演説、執筆、教育、提示、情報の伝達等の公益に関係する問題に対する行動を促したり認識を高めたりするプロジェクト（すなわち読書の促進、安全性、環境保護、郷土史、暴力や薬物使用の防止、防災準備等）
④研究型サービスラーニング：実地調査、研究、査定、実験、データ収集、インタビュー等を通じて公益に関するテーマについて情報を探し、集め、報告する（すなわち家庭や公共の建物のエネルギー効率診断、水質調査、動植物研究、実地調査など）。

高等教育機関でのサービスラーニングの実施に関して、アメリカは概して世界のリーダーだと見なされており、たいていの西欧諸国は、自国の地域社会に合ったサービスラーニング・モデルを開発する際にアメリカを手本にしている。他の西欧諸国がアメリカの様々なモデルをどのような方法で採用しているかを見ると、日本に合ったモデルを開発する上でとても参考となる。特に、スウェーデンにおけるサービスラーニングは、教育的実践の促進および社会全般に利益をもたらす貴重な手段としてますます認識されつつある。スウェーデンは先進的福祉政策で評価されており、サービスラーニングは教育と社会政策を統合するために実行可能な手段とみなされている。

【スウェーデンにおける日本武道の現状】

スウェーデンにおける武道の一般的人気に関して言うと、実のところ、一般論として、定着率は 90 年代半ばより何年にもわたって減少している。しかしながら、この減少傾向は収まっており、新たに武道を始める人の数は再び増えつつある。とりわけ、MMA（総合格闘技）や BJJ（ブラジリアン柔術）、「サブミッションレスリング」などの新しいまたはハイブリッドのプロの格闘技をする人口は国中で急増している。

面白いことに、これらの「新しい」格闘技は伝統的武道のブームにも火をつけた。プロの格闘技における「スター」の多くは伝統武道、特に空手道や柔道のトレーニングをしてキャリアをスタートしている。Lyoto Machida、George St。 Pierre、岡見勇信、青木真也と言った MMA の有名な格闘家はみな過去に伝統武道を学んでいるが、多くの人々が彼らを通じて従来の武道の哲学や伝統を単なる競技スポーツとしてではなく「生き方」として捉えて興味を持つようになっている。

主流のスポーツと比べれば武道はいまだにマイナーなスポーツではあるが、スウェーデンでの武道のイメージは肯定的だ。武道は身体と心に深遠な哲学的見解を包含するということをより多くの人々が理解している。武道は「屈強な男たち」と身体能力に優れたアスリートの為のスポーツだという誤解はいまだに存在するものの、性別や年齢に関係なくすべての人が参加することのできる身体鍛錬のひとつの形だと捉える人々の数が増加している。実際、身体的および精神的障害を持つ人々は、武道における肉体的排他性という先入観を無視し、全ての人が武道を通して身体的および精神的健康面で多くを得ることができると証明するようになってきている。

【スウェーデンにおける障害者の武道】

スウェーデンにおいて障害者の武道への参加は Solveig Malmqvist 女史が 1970 年代に柔道で先駆者として努力をしたことから始まった（彼女はスウェーデンで最初に剣道を始めた一人でもある）。空手道における障害者の参加の歴史を紐解くことはより困難だが、一般的に、1980 年代初頭の Pontus Johansen 氏（脳性まひ）の多大なる努力が始まりとされている。彼はまずは空手道、次に柔道を始め、間もなく、これらの武道に参加することは非常に満足感が得られるだけでなく、リハビリテーションおよび健康維持のためにとても有効だということが立証されていることに気付いた。

当時、武道をしている障害者の人数はわずかで、様々な障害を持つ人々に合ったトレーニング法を開発することはもちろんのこと、自分が学ぶ際にインスピレーションの源を探すことは難しかったと Johansen 氏は主張する。初期の頃は、まだインターネットが世界的現象になり始めたばかりの頃だったが、障害者のための武道に関する活動に関与している数多くの個人もしくは団体が存在することを発見した。それぞれが独立して存在する小団体ゆえ、広く普及させる上でそれぞれが似たような問題により活動を妨げられ、常に何度も類似してかつ不必要な作業を一から行わなければならなかった。

Johansen 氏はイニシアチブを取り、それらの全ての団体が一同に終結して情報交換ができるような機会を設けることを決めた。彼の力になったのが千葉に所在する国際武道大学だった。国際武道大学を訪問し、Johansen 氏は定期的にほぼ全ての日本の武道を試すことができた。そしてこのフィールドワークを通し、彼は様々な武道を混ぜたハイブリッド武道をつくりあげ、広範囲にわたる障害を抱えた人々が参加をしてリハビリテーションおよび肉体面・精神面での健康のために最適な技の組み合わせを見つけることを可能にした。

Johansen 氏によると、リハビリテーションの面では、一つの武道を習うだけでは最大の効果を得ることは恐らく難しいとのことだ。障害を持つ人たちのためのトレーニングメニューでは個人に合わせて技術を改変することが必要とされる。指導者も生徒/患者も一定の伝統的慣

習を乗り越えるために開かれた考え方を持つ必要がある。また、武道のトレーニングでは常にいつ起こるともわからない危険がつきものである。このことから、障害者が武道をする上で個人がケースバイケースで適応することが必要不可欠であり、生徒のそばでの絶え間ない監視と、限界と変化を把握して指導することが必須である。

Johansen は、可能な限り医療の専門家と緊密な協力体制をとりながら訓練を行うことが最適だと認めている。しかしながら、Johansen 氏は武道の世界に手を出した当初からすぐさま障害者が率先的武道トレーニングを通して身体健康、体力、社会的相互作用、自尊心を向上させることのできる可能性について気付いた。

【障害者のための武道に対する政府および Educational 支援】

ABCD（障害者のための武道カルチャー協会）の設立後、Johansen 氏は障害者のための武道の潜在的恩恵に対する支援と理解を獲得すべく積極的に活動してきている。人々の反応は様々だ。大多数の武道家、地方自治体、学校関係者は非常に好反応だった。しかしながらスウェーデンの中央政府からの支援は今のところ熱意がない。

Johansen 氏は現在、地域社会の道場で需要に合わせて使用することのできる指導モデルを統合するための共同研究のシステムをルレオ工科大学（LTU）と共に立ち上げることに従事しており、同じく、理学療法士と医師がれっきとしたリハビリテーションの手段として武道を使用することについての可能性を探っている。この目的のために、ルレオ工科大学は身体的および精神的障害を持つ全ての年齢の人たちのためのリハビリテーションとしておよび高齢者の健康維持の手段としての武道の可能性について研究の先頭に立っている。

Annika Naslund 博士（ルレオ工科大学 Health Sciences 学部 Health and Rehabilitation 学科）がルレオ工科大学においてこの研究分野で先頭を切っている主な人物で、調査されている手段の一つが、身体教育学部の学生に対して、地域社会に住む身体的および精神的障害を持つ人々に特定のハイブリッド武道を指導するための技術を教え込むというものである。ルレオ工科大学の研究者は、特にリハビリテーションの手段としての武道の抱える異なる問題について、運動制御、健康、自己効力感と参加、サービスラーニングに関連したソーシャル・イノベーションなど、様々な観点から取り組んで調査している。

この革新的研究分野が発展しながらもいまだに克服すべき問題がいくつも存在する。適正な人数のスタッフを雇うために政府の補助金を獲得すること、そして日本における適切および真剣な研究協力者を探すことが現時点での主な問題点である。

【考察】

以下のグラフは Johansen 氏および Naslund 博士が開発した研究モデルだ。サービス

ラーニング・モデルにおける武道使用についての研究およびその適用はまだ全く初期の段階にはあるが、日本の伝統文化の一つがスウェーデンにおける身体的および精神的障害者のリハビリテーション需要を解決するのに適した別の形に改変されている点は興味深い。この種の研究は日本だと国際武道大学、国士舘大学、および民間道場の小グループにおいて小規模で行われている。しかし、現時点で日本にはこの研究を統合する統一団体は存在しない。

Johansen 氏および Naslund 氏による研究モデル

日本では 2012 年 4 月より武道が中学の体育の授業で必修科目となったが、学校での初等教育としての武道は学生に日本の伝統文化と礼儀作法への理解およびグローバル社会における日本人としての一体感を授けるものである。しかしながら、大部分において、教育と としての武道には大いに深遠で未開拓、かつこれまで完全に見過ごされてきた側面が存在する。心と身体を鍛える手段として有効であるとしばしば宣伝されるものの、一般的に武道は健常者のための領域だと憶測されている。障害者にとって武道は危険すぎると幅広く考えられている。この憶測は、身体的および精神的能力に関わらず武道が全ての人間の人生を改善できるという可能性を見落とした由々しき問題である。

体育大学の卒業生で武道を専攻する者は就職の機会が大変限られている。中でも、日本全土における入学者数の減少が原因で、武道専攻学生の体育教師としての就職機会がほとんどないが、これは今日までこのような学生にとって重要なキャリアの道であった。しかしながら、日本の大学において武道のサービスラーニング・モデルを武道または体育専攻の学生に対して実施することにより伝統的武道のリハビリテーション的可能性に対する興味をかき立てるだろう。これは、日本での平均年齢が継続して増加する（現在は 46 歳）に連れて

ますます重要な役割となるだろう。この意味で、皮肉なことに、スウェーデンは日本より先に武道のこの可能性について気付いている。この興味深いサービスラーニング実験に関するスウェーデンのデータを照合した後の私の感想は、まだ初期段階ではあるとしても、日本は、自国の文化の持てる可能性についてこのモデルから多くを学ぶことができるが、これはしばしば「伝統」という自主制限により動きが取れなくなってしまっているということである。

８章　サービスラーニングのモデル化

久保田賢一（関西大学総合情報学部）

本年度は、ａ）異文化間で協調しながら活動する力、ｂ）英語コミュニケーション力、ｃ）地球的視野で考える力、の育成に向けてアジアと連携したサービスラーニングを実践してきた。具体的には、フィリピンのブラカン、アンヘレスにおけるサービスラーニング、カンボジアのシェムリアップにおけるサービスラーニングを展開してきた。本章では、本プログラムによって明らかになったサービスラーニングを実施する上で重要な要件をまとめ、サービスラーニングのモデルとして提示する。

８．１．サービスラーニングのデザイン

本取組では、複数の異なるサービスラーニング実践を同時並行で実施し、デザインモデルを検討してきた。その結果、実践に共通する「ミクロなデザイン」と、実践間の連結を想定した「マクロなデザイン」の両面をデザイン対象とすることが重要であることが分かった。

８．２．サービスラーニングのミクロなデザイン

本取組では、３つのサービスラーニングの教育実践を試行してきた。それらの教育実践において、共通して学生の学習を支える４つのデザイン要件を以下に提示する。

①「事前学習－現地活動－事後学習」のプロセスと通した連続的な指導をすること

本サービスラーニングでは、単に学生が現地で活動するのを支援するだけではなく、事前・事後に学習の機会を設け、より一層現地での活動を促すような工夫をした。事前・事後学習はイベント的に行うのではなく、15 回（事前・事後合わせて計 30 回）の授業を連続的に行い、現地での活動と結びつけることで年間を通した学習の場へと変化した。

このことから、サービスラーニングを展開する際には「サービス」だけに焦点を当てるのではなく、ラーニングを長期スパンの視点から捉え、継続的に学習の場を設けて学生を支援していく必要性が明らかになった。

②学生が主体的になれる場を設けること

サービスラーニングは、学生が現地の人々との協働を通して主体的に学習する場である。しかしながら、現地に赴くだけでは、学生が積極的に現地の人々とコミュニケーションを取り、

主体的に学ぶことができるとは限らない。何故なら、学生が大学で受けている授業は講義型が中心であり、自ら主体的に活動に参加したり仲間と問題解決したりする機会が十分に設けられていないからである。そのため、現地の人々とどのようにコミュニケーションを取ればよいのかがわからず、主体的に活動に関わることができぬまま、海外での活動を終えてしまう学生も少なくない。

そういった問題意識から、本プログラムでは学生が現地での主体的な活動にうまく関わることができるよう、事前・事後学習においてもワークショップ型の活動を多く取り入れ、「主体的に関わる活動」を学生一人ひとりが体験できるように工夫をした。具体的には、学生を複数のグループに分け、各グループが 15 回の授業の中で必ず一度はワークショップの計画・実施を担当するようにした。こうすることによって、単に参加型のワークショップに参加するだけでなく、ワークショップを企画することを通して他者の主体性を促す方法やワークショップの運営など、「主体的に関わる・学ぶ」という活動を俯瞰的に捉える力を身に着けることができるようになった。

事前学習において、多くの学生は主体的に関わることに困難を感じていた。しかしながら、ワークショップ型の活動を数多く体験することで、徐々に主体的に関わる方法を模索しはじめ、結果的には現地を訪問した際には学生全員が主体的に関わることができた。このことから、サービスラーニング全体のプログラムの中で、常に学生が主体的に活動に関わることのできる機会や場を設定する必要性が明らかになった。

③語学学習を事前－事後学習に盛り込み、現地での活動に繋げること

本年度は、語学力（英語）の向上にも重点を置いた。語学力は、これからのグローバ社会を生き抜く上で、無くてはならないものである。語学学習が十分でなければ、現地でのコミュニケーションがままならず、活動に十分に参加することができない。

本プログラムでは、ネイティブ講師による実践的英語コミュニケーション力育成の授業を事前学習と事後学習に盛り込み、現地での活動や現地で習得した英語能力がより定着するように工夫した。語学学習に重点を置いた活動に一年間を通して取り組むことで、学生は英語を話すことに対して自信を持ち、現地での活動や報告書の作成など、全ての活動に対して積極的に取り組むことができた。大学生にもなれば相手の会話の内容は挨拶や世間話の域にとどまらず、自国の文化や習慣、時には政治や歴史の話など、難易度の高いトピックが取り上げられる。現地の人々と取るコミュニケーションを充実させる上で、事前・事後学習は重要な意味をもっていた。

本プログラムでは、語学学習を事前-事後学習に盛り込み、現地での活動に繋げることを通して学生の語学力を向上させることが、海外と連携したサービスラーニングを実施する上で重要になることが、明らかになった。

④１年間の全ての活動に、現場との繋がりを埋め込む

これまでのサービスラーニングにおいても、事前学習や事後学習は行われてきた。しかしながら、日本国内で行う事前・事後学習は現地との繋がりをもたせることが難しく、学生のモチベーションが低下したり、学習に取り組む意味が見いだせなかったりするといった問題が指摘されてきた。本プログラムでは、SNS やテレビ会議システムを用いることで事前・事後学習において常に現地との繋がりをもたせ、そこでの学習が全て相手との関係性に影響するように、工夫した。

例えば、事前学習では SNS を使って学生と現地の人々が参加するグループを作成し、アイスブレイキングを行った。具体的には写真を使ってお互いに自己紹介をしたり、文化について質問をしたりした。また、事後学習では報告書や動画作成の過程でテレビ会議の機会を設け、現地との関わりを維持する中で活動のまとめを現地の人々と一緒に行った。

このように、活動のプロセスにおいて現場との繋がりを埋め込むことは、学生に活動の意義を実感させる。単なる写真や動画の作業も、現地での協働相手と共に制作するためのものであれば、真剣に取り組み始める。本プログラムでは、ICT を活用することで現場との関わりを維持し、学生の事前・事後学習に対するモチベーションは向上した。このことから、サービスラーニングにおいては常に「現場との繋がり」を活動に埋め込む必要があることが、明らかになった。

８．３．サービスラーニングのマクロなデザイン

本取組では、実践の内容や継続性といった質の異なるプログラムを取り上げ、試行とデザインモデルの構築を試みた。その結果、それらを個別の実践として切り離しデザインモデルを構築するのではなく、連続した一つのまとまりとして理解し、デザインすることでより教育効果を高めることができると考えられる。

本取組では、３つのプログラムを対象にデザインを試行したが、筆者は並行してフィリピン小学校支援プロジェクト（PESP）のデザインにも取り組んできた。その実践から得た知見も含めてマクロなデザインについて検討する。まず、筆者が取り組んできた、フィリピン小学校支援プロジェクト（PESP）について概要を紹介する。次に、本取組で展開した３つの事例と PESP をまとめた表を示しその特徴について示す。最後に、それらの実践を連結したマクロなデザインについて示す。

８．３．１．フィリピン小学校支援プロジェクト（PESP）

大学院生が立ち上げた、2006 年から始まったプロジェクトである。毎年、夏休みと春休み

の 2 回、10 名程度の学生が 2，3 週間フィリピンに滞在し、現地でさまざまな活動をする。主な活動は、小学校教員に対してパソコンを活用した授業をするための方法を研修で教えることである。大学院生と学部生が協働して取り組むだけでなく、ブラカン大学の学生とも連携を取り、研修はマロロス市内にある小学校を中心に行っている。ブラカン大学の教員と調整をし、研修をおこなう小学校と打ち合わせをしたりするため、英語コミュニケーション能力と交渉力が求められる。

主な活動は、小学校教員に対して授業でのパソコンの効果的な使い方に関する研修をおこなう。プレゼンテーション・ソフトを使い教材を作る。教室ではプロジェクターを使い提示し、児童の興味をわくような利用方法を提案することである。

活動は、ブラカン大学の学生と協働しておこなう。2011，12 年度はフィリピン学生を受け入れ、日本の小学校を見学し、どのようにパソコンが授業で使われているか調査し、今後の活動に生かすための方法を探る。短期留学の奨学金を受けることができた。

活動は、相手のニーズに沿ったものであるとともに、学生が提供できるもの、総合情報学部の特徴を生かし、コンピュータ関連の教育が中心であった。小学校での研修のほか、大学の日本語クラスで日本文化を紹介したり、学校に行かない子供たちを支援している NGO の活動に参加したりしている。

８．３．２．実践の特徴の比較

各教育実践の特徴を比較するために、表にして各実践をまとめた。これらの表から分かることは、実践ごとに目指すべき達成目標の程度といった活動の内容、目標の達成に向かうための活動の継続性が異なることが分かる。こうした実践ごとに異なる特徴を個々に切り離すのではなく、それぞれの特徴を活かし一つの教育実践として連結してデザインすることが重要であると筆者は考える。

各プロジェクトの特徴

プログラム	主な活動			
	時期	訪問期間	交流相手	参加者
フィリピン・チルドレン・プロジェクト（PCP）	既存のプログラムに学生が参加。事前に教え方の指導を受ける。児童にリコーダーの演奏を教える。大学との交流。活動内容は事前に決まっており、学生はそれに参加して体験する形態。帰国後、報告書作成、発表。			
	夏休み	10 日	男子児童養護施設、小学校、大学、	全学部。2010 年度から実施、約 10 名
フィリピン・フィールドスタディ（PFS）	事前に訪問先を学生が決め、相手と連絡を取りながら準備を進める。大学生と交流。大枠は決まっているが、宿舎の予約、訪問先との連絡、航空券の手配など参加学生自身がおこなう。上級生がサポートに入る。			
	夏休み	14～20 日	小学校、高校、大学、NGO、日本大使館	ゼミ生およびその他、約 15 名
カンボジア・協働活動プログラム（CCAP）	事前に NGO や大学のスタッフと調整を図る。NGO や大学と連携をして小学校の図書館を充実させる。カンボジアの学生の受け入れ、小学校での図書充実、交流学習支援、日本の小学校とカンボジアとの交流の支援。			
	夏休み、春休み（年 2 回）	14 日	NGO,大学、小学校、養護施設、日本語学校	外国語、商、総情などが参加、約 10 名
フィリピン小学校支援プロジェクト（PESP）	教員研修の内容を事前に準備。現地学生と連携し、小学校教師にパソコンを使った授業の研修を実施。年に 2 回訪問し継続的に活動。内容に関しては、自分で相手と交渉をして、方向性を決める。大学院生が主導の活動であったが、現在は学部生のみで行っているため、活動内容に大幅な変更が生じた。			
	夏休み、春休み（年 2 回）	14 日～30 日	小学校、大学	特に限定しないが、総合情報学部、約 10 名

８．３．３．マクロなデザインのモデル

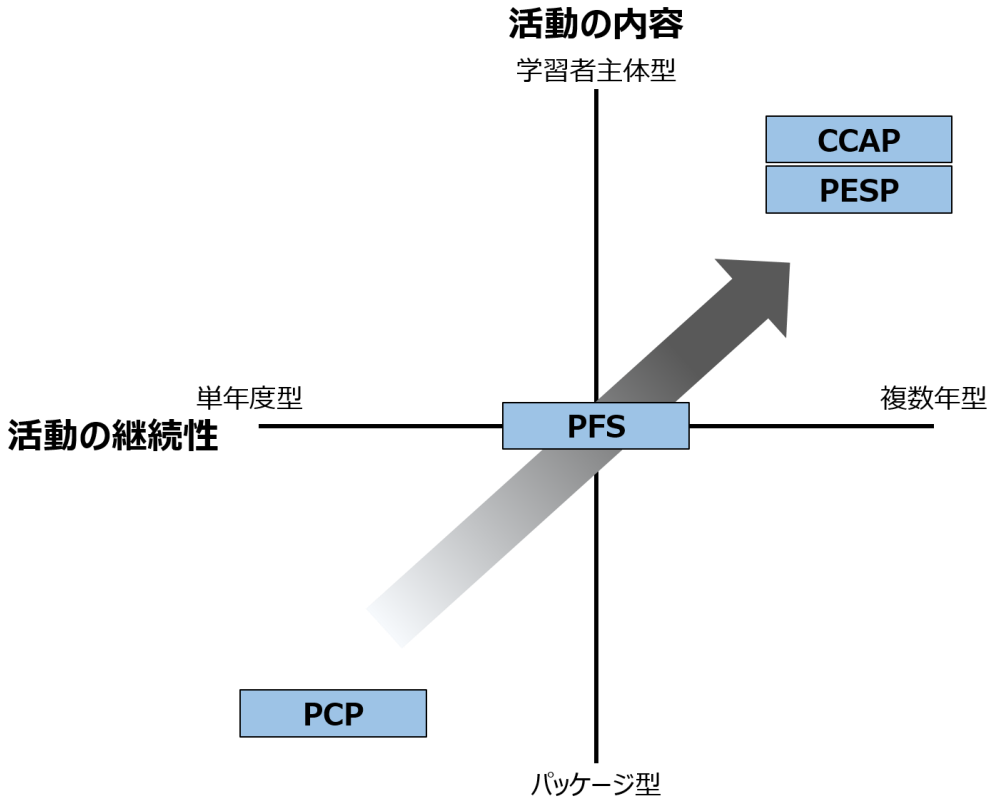
今回の研究では、４つの教育プログラムについて調査をおこなった。これらのプログラムを整理する枠組みとして、二つの軸を作った。ひとつはプログラムの内容の軸であり、もうひとつは継続性の軸である。プログラムの内容は、パッケージ型と学習者主体型の二つの極があり、継続性は単年度型と複数年度型の極をおき、内容ではスタディツアー型と学習者主体型の二つに分ける（図参照）。PCP は、パッケージ・単年度型に分けられる。プログラムはパッケージ化され、参加者は大学内で一般に公募され、用意されたプログラムに沿って活動をおこなう。一度参加した学生は、次年度に指導者として参加する場合もあるが、活動の内容は変わらない。

それに対して、PESP と CCAP は、学習者主体・複数年度型に相当する。両プログラムとも、一般に公募をしないが、参加者は口コミやゼミを通してプログラムを知り、自主的に参加してくる。活動内容は、参加者の話し合いと相手国で協働する組織との間で調整が行われ、活動内容が決められていく。現地での活動は、年に２回出かけて行われるために、参加者は複数回現地活動に参加することになる。日本にいる間も現地の様子をモニタリングしたり、ネットを介してさまざまな活動を継続したりする。学習者の責任と意思に基づいて行われるため、高度な交渉技術や英語コミュニケーション力が求められる。参加者は、活動を通してそれらの能力を身に着けていくことになる。3 年から参加する学生が多いため、途中でやめない限り、３～４回の現地参加をおこなっている。特に、これらのプログラムは活動内容が相手組織との協働で行われるため、大学院生の参加が重要な鍵になる。

この二つの類型の間に入るのが、PFS である。パッケージ型では、主催者がプログラムの内容を事前に用意し、学習者はそのプログラムに参加する。PCP がこれに該当する。PCP は、専門演習の活動の一環としておこなわれるため、基本は単年度型である。しかし、毎年継続して行われており、２名から４名の一度参加した上位年度の学生が支援をするために参加する。また、活動の内容は参加者が自主的に決めることになっているが、先輩からのアドバイスのもとにおこなうため、大枠は毎年似たような内容になっている。しかし、参加する学生は自分たちで訪問先や活動内容を決めたという強い意識を持っている。

図の表の右下の部分は、学習者主体・単年度型であるが、初めて参加する学生に自主的に計画を立てさせることは現実的ではない。また、左上のパッケージ・複数年度では同じ内容の活動を何度も繰り返しているプログラムへの参加はあまり面白みを感じられないだろう。

これらのプログラムへの参加は、パッケージ・単年度型のプログラムに参加した学生が、海外に興味を持ち、さらに高度な活動をしたいという意欲のもと学習者主体・複数年度型のプログラムにステップアップしていく方向性が望ましいのではないかと考える。



サービスラーニングのマクロなデザイン

８．４．今後の課題

今回の取組を通してサービスラーニングのデザインを、ミクロ、マクロな視点からモデル化することができた。しかし、これらの教育実践を大学教育の内部に位置づけ、より多くの学生に提供していくためには、いくつかの課題も残されている。最後に、今後の課題と展望をまとめたい。

【正規科目化による学生に対する正当な評価】

本取組を通して、教育プログラムのモデルを作成することはできた。しかし、そのプログラムを正規カリキュラムに位置づけ、単位認定をするまでには学内調整を行う必要がある。伝統的なディシプリンに基づいて構成されている現状の学部教育システムは、「国際化」のミッションを持っておらず、そのため学部教育の中にサービスラーニングを位置づけ展開することは容易ではない。サービスラーニングで学生は教室の外に飛び出し、教員のコントロール外で様々な活動に取り組み経験を重ねながら学習していく。そうした教室での授業のような形で進めることのできない不安を払拭することは容易ではなく、現状では学部内でのコンセンサスを得ることが難しい。

しかし、グローバル化に伴う大学外との連携は必須であり、学生に対して在学中から大学外との連携の機会に参加させることは有意義な学習経験となる。こうした機会を学生に提

供していくために、例えば、全学共通教育のシステムに組み込むことなどが考えられる。特定の学部に依存しないプログラムとして位置づけることで、新しい教育システムを構築することができる可能性がある。他にも、学部や大学としてインターンシップ・プログラムの実施のような形で、推し進めるなど、従来の教育システムに依存しない形態で、サービスラーニングを大学教育の中に位置づけていくことが重要であろう。

【リスクマネージメント】

大学外で行う教育実践で最も留意しなければならない事項の一つとして、リスクマネージメントがある。サービスラーニングでは、事故や病気があった際、その対応と責任問題についての不安が大学には伴う。サービスラーニングにおいて大学は、積極的に学生を現地の人たちと関わらせ自律的に問題解決させることを推奨しなければならない反面、リスクに備えて学生の行為を制約しなければならないというジレンマに直面することになる。

学生の自主性を尊重しながらも、不測の事態に備え大学は様々なリスクマネージメントを行う必要があるだろう。例えば、本取組のプログラムでも必ず実施したような学生に対するリスクマネージメント講座を行うことが挙げられる。しかし、そうした講座を行ったとしても不測の事態が生じることがある。そうした事態に備え、渡航国の日本大使館との良好な関係を構築しておくことや、けがや病気があった際に信頼できる医療機関の情報を常に持っておくこと、大学として保険会社と交渉しサービスラーニングに適した保険を用意することなどがあるだろう。

【サービスラーニングの実施・運営体制】

学生の自主性、自発性を大切にするサービスラーニングは、教育実践が開始される事前にすべてを計画し、それを実行するような、教室内の教育実践とは異なるため、担当する教員には高度な柔軟性が求められる。本取組では、これまでもサービスラーニングに取り組んできた教員が実施したため、プログラムの実施・運営体制に関する問題点は浮き彫りにはならなかったが、同様の実践を経験のない教員ができるわけではない。

サービスラーニングを初等中等高等教育で積極的に推進するアメリカでは、サービスラーニングを専門とする担当教員が配置されていることが多い（Kapustka 2003）。サービスラーニングを一つの専門分野として位置づけ、専門教員の配置など、全学的に推進する体制が今後必要になってくると考えられる。

参考文献

Kapustka, K. M. (2003) Dilemmas of service-learning teachers. In Billing, S. H. & Eyler, J. (Eds) *Deconstructing service-learning: Reserch exploring context, participation, and impacts* (pp.51-74). Greenwich, CT: Information Age Publishing.

アジアと連携したサービスラーニング教育プログラムのモデル化　最終報告書作成者

■実施担当者

久保田　賢一	関西大学総合情報学部・教授（実施代表者）
澤山　利広	関西大学国際部・教授
長谷川　伸	関西大学商学部・教授
アレキサンダー　ベネット	関西大学国際部・准教授
岸　磨貴子	明治大学国際日本学部・特任講師
バート　キムラ	ハワイ大学・名誉教授
チュオン　ルムリアッセイ	神戸学院大学・非常勤講師

■研究・プログラム実施補助

時任　隼平	山形大学教育開発連携支援センター・講師
山本　良太	東京大学大学院情報学環学際情報学府・特任助教
植田　詩織	関西大学大学院総合情報学研究科社会情報学専攻・修了
田原　俊哉	関西大学大学院総合情報学研究科社会情報学専攻・修了
平川　成一	関西大学大学院総合情報学研究科社会情報学専攻・修了

関西大学 平成 24 年度教育研究高度化促進費 採択事業
アジアと連携したサービスラーニング教育プログラムのモデル化
最終報告書

2015 年 2 月 印刷／発行

編集／発行 関西大学大学院 総合情報学研究科
〒569―1095
大阪府高槻市霊仙寺町 2 丁目 1 番 1 号
TEL：072-690-2419
FAX：072-690-2419